
三人一緒に幻想入り ~ the three heros and new trouble .

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人一緒に幻想入り } the three heroes and new trouble .

【Nコード】

N8807M

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

今・・・幻想郷にまた、新たなる者が導かれた。

世界は彼らを歓迎していたのか、それとも逆か・・・

回りだした運命の歯車、もはや誰にも止める事はできない。

彼らははたして、この世界に何をもたらすのか！？

彼らを導く者とは！？

彼らを待ち受ける者とは！？

今幻想郷に、新たなる物語が紡がれる！

序章 仲良し三人が幻想入り（前書き）

諸注意

作者（脳内構造が）中二です

ほぼ自己満足です

二次設定おいしいです

オリキャラ出てきます

オリキャラ多分強いです

中身がありません

表現力は皆無です

弾幕戦闘非想天測風味です

結構ご想像にお任せします

以上を承諾した人だけ見てください

序章 仲良し三人が幻想入り

序章 仲良し三人が幻想入り

秋も中頃を過ぎた頃。

ここは田舎のとある道。金曜日の真っ昼間からそこを暇そうな三人が歩いていていた。

その内の一人が空を仰ぎながら、

「1「ねえ、暇だね、僕達。」

と言ったのは三人のムードメーカー、鳥間 進だ。

逆にして被った赤い帽子に紺色のパーカー、すそをまくった青い半ズボンと、いかにも子供らしい服装だ。

「2「まあ、世間一般から見たら、確かにわしら暇人やのう。」

頭の後ろに両手を当てながら、進に答えたのは三人のスポーツマン、拳武 正だ。

頭にzunと書かれたバンダナ、白い半そでジーパンで動きやすそうな服装だ。

「3「しょうがないだろ。今日の俺達の授業、午前中までだったからな。」

二人を見ながら言ったのは三人のリーダー、戦動 陸だ。
真っ黒な長袖長ズボンのフル付きの格好だ。

進「本当、何か起きないかな？」

と不満そうな顔で言った。

陸「うゝん、そうだな。」

首をかしげ腕を組み考える。

そこで正は率直に、

正「わしらが幻想入り・・・とか？」

二人は正の言い切った感のある顔を見て笑った。
その後陸が、

陸「30点」

と大真面目な顔で言った。

正「おい！30点はないやろ！」

声をやや荒げて突っ込んだ。

進「じゃあ0点。」

と陸と同じ感じで言った。

正「下げんなや！」

とさっきとほぼ同じ調子で突っ込んだ。

そんなくだらない会話を続け、あてもなく歩いている内に、彼らの目の前に古臭い小物店が見えてきた。

進「あ、あれ見てよ。」

とその小物店を指差した。

陸「あれがどうしたんだ？」

進「どうせさ、このまま歩き続けるぐらいなら、あの店で休もうよ。」

正「おいおい、何であんな所で休むんや。あれ絶対休むようなところやないって。」

陸「わかってないなあ、休めなくても暇はつぶせるだろ？」

と進に賛同するように言った。

進「ほーら、二対一で僕の勝ちだあ。」

とキラ（神）ばりの慢心顔を正に向けた。

正「・・・しゃあないのう。」

その様子に呆れながら、ため息混じりに言った。

店内に入る三人。

外見通り古い物ばかりが置いてある。
そして圧倒的に胡散臭かった。

正「おゝ、何か古臭い物ばつかやのう。」

店内を見渡し言った。

進「ねえ、見てよこれ。」

そう言うに進は手に何かを持っていた。

それは三人の人の絵が書いてあるカードだ。

進「何かさ、僕達みたいじゃない？」

それを二人に見せながら言う。

正「そうか？」

疑問たつぷりの視線を向ける。

陸「なるほど、銃を持った奴にボクシングスタイルの奴、そして間でジャンプしている奴か。確かにな。」

と説明気味に言った。

進「でしょ。銃を持ったのは陸。ボクシングスタイルは正。その間のは僕だ。」

とこれまた説明気味。

正「おいおい、わしがボクシングスタイルかい。」

その言葉に対し、呆れ気味に言った。

進「だって、この三人で正が一番体育会系じゃん。」

正「何やねんその理由！適当すぎるやろ！？」

軽く怒りながら言った。

陸「まあまあ、物の例えだしな。落ち着けよ。」

正をなだめる様に言った。

進「じゃあ僕、これ買ってくる。」

とすぐさま会計の所に行こうとした。

正「え？それ買う気か？」

陸「そうか、じゃあ俺も、これ買ってくかな。」

そう言うと、陸はいつのまにか手にモデルガンをいくつか持っていた。

正「ええ！？お前もかい！？」

軽く驚きながら言った。

陸「どうした？これはただ俺が買いたと思ったただけだ。正は別に何か気にしなくてもいいだろ？」

と正を見て言った。

正「・・・しゃあないのう。」

と空気を読んで近くにあつたサポーターを手に取った。

進「あ、やっぱりそれ買うんだ？」

まるで読んでいたかのように言った。

正「やかましい！ほとんどお前らのせいやる！」

と明らかに逆切れする。

進「何で何でー？」

と正にしつこく迫る。

陸「とりあえず、これ持って行くか。」

と三人を代表してそれらを持つていく。

正「おい、ちゃんとわしらの分計算せえよ。」

陸「わかつてる。正9で俺ら1だろ。」

正「ちよつと待てや！！どんだけサポーター高いねん！！」

テンション高く品物に指を指す。

進「えーっと、3000円ぐらい?」

と値札を見て言う。

正「それやったら、他の奴どんだけ安いねん!」

同じ調子で言う。

陸「そうだな、このPSG-1のモデルガンは・・・28000円
だな。」

と値札を見て言った。

正「おーい、公平って言葉知ってる陸君?」

と遠くに言うように言った。

進「いいじゃん、正お金一杯持ってるし。」

正「おい!なんでこんな所でお前等におごらなあかんねん!」

陸「ははは、それじゃ別々に持って行くか」

と言って二人に荷物を返した。

結局三人はそれらを会計の所まで持って行った。

陸「すいません、これいくらかします?」

と最初に言った。

その時、正は陸の後ろから店員をじつと見ていた。店員はフードを被っていて容姿がよくわからない。

正「（妙やのう、何か見覚えあるわ。誰やる？）」

と頭の中で考えた。

そして店員は口を開き、流暢にこう言った。

？「代金はいらないわ。そのかわり・・・」

とそのまま続けて言った。

？「幻想郷にいらっしやい！」

そう言った瞬間、三人の足元に幻想の隙間が現れた。

進「え？え？え・・・」

正「ちょ！？おま！？・・・」

陸「まいったな・・・」

と各々がリアクションを取って落ちていったのであった。

序章 仲良し三人が幻想入り（後書き）

初めまして皆さん。

友達のPC借りて投稿させてもらいました。

どうですかみなさん、あまりにもひどいでしょう？

実はこの話は二人の友達と協力して、動画投稿してみようと試みて、
見事に失敗（む
てかやってみてすらいらない）
しろ自然消滅した夢の残骸です。

まあその事自体はまったく気にせず、この話はわしのPCでただ腐
っていた訳です。

そんな時、わしの友人（投稿協力させてもらってる人）のバクテリ
アンさんに投稿小
説やらないか？って言われて、まあ小説ならできるかなって思っ
てきまぐれ＋暇つぶしにやらせてもらいました。

もちろん原文のままでは駄目すぎるのでこれでも改変しましたけど、
それでも素人のレベルよろしくな感じですけどね。

まあ読んでくれるだけでもいいんです。

でも・・・せっかくだから、感想、評価等してくれたら作者は舞
い上がって次回作を速攻で書き上げる所存です。

ではみなさん、またの機会にて。

バクテリアン」誤字、脱字等の指摘も奴の為にもよろしく願います」

第二章 闇との遭遇（前書き）

あらずじ

- 1、三人がいた
 - 2、店に入った
 - 3、幻想卿？に送られた
- ではどぞ

第二章 闇との遭遇

第二章 闇との遭遇

意識を失った正。

しばらくして、正は目を覚ました。

正「あたた・・・こりや軽く頭打ったのう・・・」

頭を触りながらきよろきよろと辺りを見渡した。

見渡した感じは日が差し込み、木々に囲まれた場所だった。

正「・・・何があったんや、わし？」

周りを見渡しながら立ち上がり、とりあえず歩こうとした。

その時、近くに何かが落ちている事に正は気がついた。

それは、さっき正が買おうとしていたサポーターだ。

正「ん？何でこれがここに・・・」

少し考えた後、正はとりあえずそれを装着した。

つい後に後ろポケットに入れてあった軍手もつけてポーズを取った。

正直目も当たられないほどださい。

正「・・・結構ええやん。これ。」

と軽く自己満足した後、再び歩き出した。

しばらく歩いていると土ではあるが舗装された道に出た。

正「どっちに行くべきかのう・・・まあ適当に左にでも出るか。」

正から見て左の方に歩いていった。

あてもない道を歩きながら、正は色々と考えていた。

正「それにしても、ここは一体どこや？わしは確か古物店にいたはずや。やのに目を覚ませばこんな森で一人。いったいわしに何が・・・」

その時、正の頭の中にふと小物店のあの店員の姿と台詞が浮かん

正「確か・・・あの店員は言ってたの・・・幻想郷にいらっしや
いって・・・そんじゃ・・・わしは・・・」

そう考えた時、正は自身を否定するように顔を横にブンブンと振った。

正「いやいや！それより、まずは二人を探す事が先決や。まだここが幻想郷と決まったわけ・・・」

そう言っていると、頭上から誰かの声がした。

？「あはは、人間だ。人間だあ。」

その声が聞こえた正は、上を見上げた。

そこには満面の笑顔を浮かべた少女が浮かんでいた。

そつ、あのルーミアだ。

正は驚き、自分の目を疑った。

正「あ、あり？わし、まさか幻覚でも……。」

ル「幻覚って何の事？」

不思議そうな顔で正に尋ねる。

そこにある存在感と、えもいわれぬ感覚が、それを幻覚でないと正に知らせた。

正「……こりゃ、幻覚やないの……。」

ル「んー？お兄さん、何だか見ない顔だね。」

正「そりゃそうやる。一応聞くけど、ここって幻想郷か？」

ル「うん、そーだよ。」

正「そか。ありがとのう。」

ル「じゃあさ、私も聞きたい事があるの。」

さっきまでとは明らかに違う笑顔を向けて言った。

ル「あなたは食べてもいい人？」

ルーミアの周りの闇が強くなり、口元からはよだれがこぼれていた。
正はその様子から全てを悟った。

正「駄目な人……言ってもあかんか。」

ル「ま、食べてもいいよね」

もはやルーミアにとって、正は獲物でしかなかった。
闇が強くなり、今にも正に襲い掛かりそうだ。

正「じゃあない、このままお前さんに食われるのも癪や。相手した
ろうやないか。」

ルーミアに応えるように、正も一応構える。

誰が言った訳でもなく、戦いは始まった。

お互い道の上でぶつかり合うように相手に向かったかと思うと、正
はルーミアの横を通り過ぎ、ダッシュで逃げ出していった。

正「調子のんなや！何もわからへんのに、戦えるわけないやろ！」

少し振り向いて言った後、一目散に走っていった。

ル「・・・」

少しぼーっとした後、反転し、走る正を飛んで追いかけていった。
おそらく正の突発的な行動に戸惑ったのである。

必死に逃げる正だが、ルーミアの飛ぶスピードに追いつかれる。

ル「逃がさないよ！」

正に対して弾幕を放った。

正「ちよう！たんまたんま！」

放たれた弾幕を何とか避け、転がりながら森の中に逃げた。

正は森の木の陰に隠れたが、ルーミアはもうすぐ近くにいます。

ル「・・・なんでだろうね、私と会った人ってこうやってほとんど逃げちゃうんだ。でも私は鬼ごっこ好きだよ。だって捕まえた時のあの顔が大好きだもん。お兄さんはどんな顔してくれるかな。あはは。」

殺意でも悪意でもない、あくまでも純粹に自分の気持ちを語る。

交代のない一度だけの鬼ごっこ。鬼から隠れる正は考えを巡らした。

正「（まずい、まずいで、このままやと確実にやられる。どないすれば・・・）」

考える中、正はふと自身の手を見た。
少しばろい軍手に汗がにじんでいた。

正「（そうやのう、こうなりややるしかあらへん・・・）」

手を握り締め、拳を固める。

そして正は隠れるのをやめ、ルーミアの正面に出た。

ル「あ、隠れるのやめたんだ。」

正「ああ、まどろっこしい事は無しや。行くで！」

その場でルーミアに右ストレートを構え出した。

ル「へえ、そこから届くの？ちよつと無理じゃないの？」

正とルーミアの距離は、少なく見積もっても10メートル強だ。どう見ても拳が届くはずはない。

正「届かへんのはわかつとる・・・やからこうするんや!!」

その体勢のまま、ルーミアに対して思いっきり飛び込んだ。

正「どおりやあああああ!!」

その飛び込みは、何とルーミアのいる所にまで達した。

ル「あれ？うそ？本当に届いた？」

思いもがけない事とあまりのスピードに、ルーミアはまったく対応しきれていなかった。

正はそのままルーミアにパンチを放った。

パンチはルーミアに当たり、ルーミアは後ろにあった木に飛んで行き、ぶつかって倒れた。

正は自分のやった事に驚き、殴った拳をじつと見た。

正「・・・マジで？駄目元でやったら届いた・・・もしかしてこれが・・・わしの能力なんか!!」

大声を上げ、ガッツポーズを取った。

だがその時、正に向かって弾幕が飛んできた。

不意の事に正は対応しきれていなかった。

正「やば・・・!!」

弾幕は正の体に数発当たってしまった。

反動で後ろに飛んでいき、倒れる。

打ってきたのは、片頬に少し腫れた後が出来たルーミアだ。

どうやらルーミアは、倒れてすぐに起き上がってきていたようだ。

ル「びつくりした。あんな所から届くなんて。すごいジャンプだね。」

警戒に話している様子から、正のパンチはあまりダメージが無かったようだ。

正「ぐう・・・」

迫ってくるルーミアから逃げようにも、正の体は言う事をきいていなかった。

どうやらルーミアの弾幕のよって、体かなりのダメージを負ったようだ。

ル「鬼ごっこは終わりだね。私の勝ちで。」

正「くそお・・・ここが・・・わしの終わりなんか・・・」

薄れていく正の意識。

もはや視界には何も移らなかった。

ル「じゃあ、いただきます。」

正に手を伸ばすルーミア。

正が今にも食べられそうなその時、その場にどこからともなく何かが飛んできた。

それは大きな音とともに強烈な光を放った。

ル「！」

辺りが閃光に包まれ、ルーミアは自身を闇で覆った。ルーミアにとって光は天敵だ。

閃光が晴れ、ルーミアは覆っていた闇を解いた。

その場にさっきまでいた正はいなかった。

辺りを見渡したが、それらしい人影もない。

ル「ちえ、せつかくのこはん逃しちゃった。ざーんねん。次会う時は、ぜーったい逃がさないんだから。」

まだ痛みの残る頬を触って、ルーミアはその場を去ったのだった。

第二章 闇との遭遇（後書き）

後書き

思い上がってすみません。

こんなペーパーの中2の小説がたった一話だけ書いて評価してもらえる訳ないですね。むしろ評価貰えてたら冗談もいい所ですよ。

反省したわしはまず5話まで書き上げて上げることになりました。話は出来ているので後は手直しだけです。

正直思い上がっている所がありました。自分はこれでも才能あるんじゃないかな？とか。結構いけるんじゃないかな？とか。

今は頭が冷えて丁度いい感じです。とりあえずこの文章はネットカフェで打ってます。自宅のPCいまだに生還しないので。

なので、何となく見ている人とか、通りすがりの人とか、暇だったら評価してください。もちろん適当でかまいません。

まあこんな事書いてる時点で下心ありありですけどね（笑）。

こんなわしですけど、どうか暖かい目で見てやってください。

コメントで質問とか指摘とか大歓迎です。どしどしお願いします。

もちろん作者の事なんかも・・・え？聞きたくない？興味ない？ちよっとは思ってくださいよ・・・

さて、こんな事よりも次章のが当然気になりますよね？もちろんありますよ。

では、第三話をお楽しみに。

P S、作者は高3です。

第三章 陸と正の合流（前書き）

あらすじ

- 1、正はルーミアに出会った
- 2、正が食べられそうになった
- 3、とりあえず正は助かった

ではどぞ

第三章 陸と正の合流

第三章 陸と合流

？「・・・きろ、おい、起きろ。」

さきほどの戦いで気絶した正に、声をかける者がいた。

正「なんや・・・一体誰や？お迎えか？」

寝ぼけながら目を覚ますと、正の視界にゴーグルを着けた者がいた。

？「・・・やつと目を覚ましたか。」

正「ん？誰やお前？」

？「おいおい、俺が誰かわからないのか？」

そう言つてその者はゴーグルを上にした。

それは正にとつて見覚えのある顔であつた。

そう、ゴーグルをつけていたのはあの陸本人だつたのだ。

正「おお！陸やったんか！これリアルか？ていたた・・・」

驚くと同時に体の痛みで、正は今を現実だと判断した。

陸「まったく、お前との再会がこんな形になるとはな。」

正「ちょ、ちょっと待てや。そういえばわし、確かルーミアに・・・」

そう言っただけで周りを見渡した。

陸「安心しろ。ここにルーミアはいない。」

正「え？一体全体どういうことや？」

陸「そうだな、俺の事も含めて一から説明するか。」

そう言っただけで陸と正はその場で座って長話を始めた

陸「俺はここに来て最初、香森堂の近くに倒れてたんだ。」

正「そうか、わしは森の中やったわ。」

陸「で、目を覚ましてから色々考えてな。まずはここはどこか尋ねようと香森堂の中に入っていった。」

正「そんで？」

陸「その時はまだここがどこかわからない訳だから、当然入ったところも香森堂かわからなかった訳だ。」

正「ってことは、お前はあの建物が何かもわからず入ったんか？」

陸「危なそうな感じは無かったからな。人でもいればと思ってな。」

正「で、こーりんがいた訳か。」

陸「ああ、名前を聞いた後、ここはどこかって聞いたら・・・」

正「香森堂って言われたんか。」

陸「そうだ。その時やっと理解したんだ。俺は幻想郷に来たんだって。」

正「どう思ったんや？」

陸「いや、まさか正が言った0点のジョークが現実になると思わなくてな。」

正「おい、確か30点やったやろ？」

陸「それはさておき、その後でしばらく考えた後、まずはお前ら二人を探そうと考えてな。」

正「おー、わしもや。」

陸「だがここは幻想郷。いつ戦うかわからないからまずは武器が必要と思ってな。」

正「武器って、香森堂にあったんか？」

陸「いや、実は幻想郷に来たとき、俺の周りに何かがあったことに気づいてな、一旦外に出て確認したら、あの時買おうと思っていたモデルガンがあったんだ。」

正「でもモデルガンやったら、何の意味もないやろ？」

陸「それがな、そのモデルガンいじってたら、本物ってことがわかったんだ。」

正「マジかい！一体どうなってんねんあの店・・・てか今気づいたんかい！」

陸「まあな。それから、こーりんが色々手榴弾を売ってるって言うから、買つといたんだ。」

そう言つて正に現物を見せた。よく見たらにとり製と書かれていることもない。

正「ええ！？香森堂にそんな物騒なもんあるんかい！？どうなつとんや幻想郷って・・・」

陸「その時にゴーグルも買ったんだ。何かの役に立つかなって。」

正「ほお、そうか。（役に立つもんかのう・・・）」

陸「その後こーりんに感謝して森の道を歩いていったんだ。」

正「それで、わしを見つけたんか。でも森の中のわしをどうやって見つけたんや？」

陸「それがな、道でお前がルーミアという所を見つけたんだ。」

正「ええ！？じゃあその時からおつたんか。」

陸「ああ。」

正「じゃあなんで助けへんねん！あの時から結構やばかったんやぞ！」

陸「いやあ、お前がどうするのか観察しようと思ってな。」

正「おいおい！」

陸「まあ、お前はダッシュで逃げた訳だな。」

正「だから、かなりやばかったんやって！」

陸「でも結局追いつかれたな。」

正「しゃあないやろ、相手飛んでるんやから。」

陸「俺はルーミアの後ろ辺りにいてな、森に隠れてるお前を探してたんだ。」

正「そうなんか。わしは気づかんへんかったわ。」

陸「で、お前が出てきていきなりあんな事してな。」

正「一か八かに出たんや！」

陸「でもよく届いたよな。」

正「ああ、あの時はほんま奇跡やと思ったわ。」

陸「でもその後、お前がガッツポーズしてる所をルーミアの弾幕飛んできて当たって、こいつ何してんだと思ってな。」

正「おい！その台詞から考えたら、お前明らかにルーミアが立ち上がってんの気づいとるやないか！」

陸「ああ、その時はこいつどうなるかと思ってな。」

正「ひつでえ・・・」

陸「実は言つとあの時そのままルーミアに食わすのもありかって思つてな。」

正「おい、仮にも友達やろわしら？」

陸「それは可哀相だと思つてな。閃光手榴弾を投げてお前を助けたんだ。」

正「そんで、今に至ると？」

陸「ああ。」

正「なる。やっと納得したわ。」

陸「さすが脳筋。」

正「ほつとけ！」

陸「じゃあ、次は・・・」

正「進の搜索やのう。」

そう言つて二人は立ち上がり、歩き始めた。

森の中を歩く中、陸は正の服装が気になったのか、立ち止まってまじまじと見だした。

正「な、なんや？何か変な所でもあるんか？」

陸「いやな、お前つてよく見たらあのサポーター着けてたんだなつて。」

正「ああ、せつかくやから着けたんや。」

陸「その軍手もか？」

正「ああ、これは元々持ってた奴や。」

陸「・・・だつせ。」

死んだような目で正を見る。

正「やかましいわ！！」

本日一番の大声で言つた。

正「それはそうとや。」

陸「何だ？」

正「実はのう、わし・・・もしかしたら、能力持ってるかもしれへんのや。」

陸「ああ、ルーミアと戦ったときの、あの大ジャンプか。確かにあのジャンプはカール・ルイスでもできそうにないな。」

正「今時カールルイスかい。でもそうやろ？」

陸「だが、どんな能力かわかってるのか？」

正「そうやのう・・・」

しばらく考え込んで正はこう言った。

正「すごく飛ぶ程度の能力・・・？」

陸「ふん。」

かなり適当に返事する。

正「リアクション軽いのお前!!」

陸「わかってないな、今はそれより進を探すべきだろ？行くぞ。」

そう言っただけで陸はまた歩き出した。

正「それもそうやの。」

陸に続いた。

陸「あ、そうだ、言い忘れてた事があった。」

陸がまた立ち止まり、正に振り向いた。

正「なんや？」

陸「ここに来るまでに茸拾ってな。食べるか？」

ポケットから取り出したその茸は紫の斑がかかっていて、どう見ても毒がありそうだ。

正「誰が食つかあ！」

その茸を思いっきり地面にはたいて言った。

陸「そうか。じゃあ違う使い方を考えるかな。」

はたかれた茸を拾い上げ、懷にしまった。

正「（・・・こいつの事やからろくでもない事に使いそつやのう・・・）」

その様子を見ながら思う正であった。

その頃、湖の畔で頭から真っ直ぐ突き刺さり、胴体辺りまで埋まっている進がいたのであった。

第三章 陸と正の合流（後書き）

後書き

こんにちわみなさん。これでも三話目です。

作者がいい加減なので今回は動きとかほとんどありませんでした。
あ、関係ないか。

とりあえず陸と正は合流しました。四話目で進と合流するかは秘密です。（マジ）

これまでの段階でいまだにキャラ紹介とかしてませんね。するかどうかはちよっくらみなさんに聞きたいと思います。

いらないならいらないでこのまま行く予定です。まあ近い内にする予定です。

前回から本当に反省しているつもりですので、みなさまどうか温かい目で見てください。

しつこいですけど質問大歓迎です。どしどしお願いします。

もちろん作者の（ry

こんな有様ですけど、次はあの？が出ますよ！

では、第四話をお楽しみに。

第四章 馬鹿と阿呆（前書き）

あらすじ

- 1、二人は再会
- 2、陸が色々あった
- 3、進探索

ではどぞ

第四章 馬鹿と阿呆

第四章 馬鹿と阿呆

？「きらきら〜ダイヤモンド〜、かがやく〜星のように〜。」

湖の畔に、調子つばずれな声で歌っているのは氷の妖精、チルノだ。ぶらぶらとしていると、チルノは何かを見つけたようだ。

チ「ん？何だろあれ？」

見つけたのは、畔から両足だけ出ている進であつた。

チ「これは・・・もしかして・・・」

少し怯んだ後にこう言い放った。

チ「ダイダラボッチの指ね！」

どう見ても人の足にしか見えない物だが、チルノはなぜか確信して言った。

チ「まさかここでダイダラボッチに会えるだなんてね！指でこれなら、体はどんなに大きいんだろう。戦いがいありそうだね！」

とりあえずそれに触ろうと近づく。
するとその足がばたばたと動いた。

チ「わわわ！」

少しびっくりしたが、怯まず歩み寄る。

チ「どうやら目を覚ましたようね！」

多分間違っではない予想。

チ「その体、拝ませてもらうよ！」

その足を持って大根のように引っこ抜くと、当然泥だらけの進が姿を見せた。

進・チ「・・・」

両者、眉一つ動かさず黙ったままになった。
しばらくの沈黙の後、チルノが先に口を開いた。

チ「・・・ダイダラボッチって、指が人間なんだ！」

進「ねえ・・・君・・・」

進も応えるように口を開いた。

進「降りしてくれないかな・・・」

と言ったので、チルノはその体勢のまま降ろした。
当然進は頭から地面に落ちた。

進「!!!!!!!!!!」

悶絶しながらしばらく辺りを転がった。

五分ぐらいして、進は湖の中、パンツ一丁で体と服の汚れを落としていた。

進「もう、なんでこんな目に遭ったんだ・・・僕、何も悪い事してないのに・・・」

頭には漫画でよく見る大きなたんこぶができていた。

チ「ねえ、あんたつてさあ、」

服の水を絞っている進に、木の上からチルノが尋ねた。

進「何？」

湖から上がり、服を着ながら言う。

チ「ダイダラボッチの指じゃないの？」

今だにダイダラボッチの指だと思っているようだ。

進「違うよ。てか何でそうなるの？」

チ「なーんだ。がっかり・・・」

ため息混じりにショックを見せる。

進「それよりさ、僕も君に聞きたいことがあるんだけど。」

真っ直ぐな目でチルノを見て尋ねた。

チ「何よ？」

進「あのさ、君ってチルノだよな。」

チ「そうよ。あたいは幻想郷サイキョーのチルノよ！」

木の上から降りながら、ふんぞり返って言った。

進「じゃあ・・・やっぱりここって幻想郷なんだ！」

喜びを隠せず、体で表す。

それと同時に、進はあることを考えた。

進「(つてことは、他の二人はどうしてるんだろ？僕みたいに幻想郷にいるのかな?)」

じつと考え込んでいると、チルノがすぐ後ろまで来ていた。

チ「・・・あんたってもしかして・・・」

改まった顔で聞いてきた。

チ「外の間？」

進「そうだよ。それがどうかしたの？」

チ「へー、だったら・・・」

急に顔つきが変わり、真剣になる。

チ「今ここで・・・あたいと勝負しなさい！」

進にビシッと指差した。

進「ええ！？僕は戦えない・・・」

と言う間もなく、チルノは既に上空でスペルカードを構えていた。

チ「最近外の奴に負けっぱなしだからね！行くよ！氷符　アイシクル
フオール - e a s y - ！」

そう言うのと進に文字通り弾幕を放った。

優美な弾幕ではあるが、宣言したスペルカードは、明らかに正面安地だった。

ただ立っているだけだがまったく進には当たらない。

チ「な、なんで当たらないのよ！？」

わかりやすく？マークを頭に浮かべまくる。

その時、進は真面目な顔で言い放った。

進「君は確かに僕より強い・・・でも・・・あまりにも馬鹿すぎたんだよ！」

チ「な、なにぃ！？」

びつくりした後、空中からそのまま地に落ちていき、膝を折って地に屈した。

チ「ばかな・・・ばかなばかなばかなあ！！！」

地を叩き叫んだ。

チ「まさか・・・あたいが今まで負けていたのは全て・・・」

屈したチルノに近寄ってきた進が続けるように言った。

進「いや、負けてる理由は大方実力だと思うけど？」

チ「ですよね・・・でも・・・あたいはバカなのね・・・」

今まで気づいてなかったのか、やたら落ち込む。

進は落ち込んでいるチルノにそつと手を差し伸べこう言った。

進「大丈夫、君はひとりじゃない。」

精一杯の笑顔を向けて言った。

進「僕だってアホだよ！」

チ「アホ・・・」

不思議そうな顔で進を見る。

進「うん。だから・・・落ち込まなくてもいいじゃないか。」

チ「なんか・・・ありがとう。」

差し伸べた手を握り締めた。

だがチルノとの温度差によって、進の手はみるみる凍っていった。

進「NO――！！！！！」

凍った手を即座に引つ込めて叫んだ。

チ「あ、能力オフにするの忘れてた。」

握った手をじっと見た。

進「このばかり！！！」

チ「なによ、このアホー！」

しばらくの間不毛な言い合いをする二人であった。

第四章 馬鹿と阿呆（後書き）

後書き

ほのぼのはだ・い・じ

なので気持ちほのぼのです。チルノはこうであるべきですよ。

馬鹿はむしろ自覚していないよりも否定している姿の方がよかったかな？まあいいや。

とりあえず陸と正はまったく出ませんでしたね。いつ合流すんだろうこいつら？

それは・・・その内です。

まあ、次回でわかると思いますので、しっかりと見てくださいね。

では、第五章をお楽しみに。

第五章 三人の再会（前書き）

あらすじ

- 1、進、チルノに出会った
- 2、チルノに挑まれた
- 3、口げんかになった

ではどぞ。

第五章 三人の再会

第五章 三人の再会

いまだに不毛な言い合いを続ける進とチルノ。

そんな所に陸と正が来た。まだ陸達と進達との距離はある。ぱつと見子供みたいな喧嘩をしている二人を見て陸は、

陸「おい、あいつ・・・」

となぜか真剣な顔で言った。

正「ははは、何してんのかと思ったら、チルノとじゃれとったんかい。」

冗談交じりに言った言葉を遮るように、

陸「わかってないな正・・・あれは・・・弾幕戦だ!」

正「ええ!? そんな訳ないやろ!? あれのどこが・・・」

陸の方を見て指を指しながら言う正を無視し、陸は狙撃銃を構えた。

陸「待つてろ進! 今援護する!」

今にもチルノに対して撃ちそうだ。そんな陸を止めようと、正が陸に掴み掛かった。

正「おい！？何してんやお前！」

陸「離せ！！進を見捨てるのか正！？」

正「だから、どう見てもそんなんちゅうやろってさっきから・・・」

もみ合いになったその時、陸の銃が暴発した。

陸・正「！」

暴発した銃弾は進を襲い、進はその場に倒れた。
チルノは突然の事に傍観とした。

陸・正「進！」

進の下に駆け寄る二人。

辺りにどうしようもない空気が流れた。

正「おい進！！」

進を抱きかかえ呼ぶが進は返事をしなかった。

正はひるがえって陸をにらんだ。今までからは想像出来ないほどの
気迫だ。

正「陸！お前・・・」

怒りの表情を陸に向ける。

陸「・・・」

正「おい・・・何か言ったらどうなんや!! 戦動 陸!!」

無言の陸の胸倉に掴み掛かる。

陸「ふふ・・・はははは!!」

突然高らかに笑い出した。

正「何が可笑しいんや!？」

掴み掛かった手の力を強める。

陸「だって、進は寝てるだけなんだぞ？」

正「なんやて!？」

そう言われて進の方を見ると、進はいびきをかいて寝ていた。

正「何でや・・・さっき陸の銃に撃たれたはずやろ・・・」

陸「俺が使った弾は、麻酔弾だからな。」

正「・・・何でそれを先に言わへんかったんや？」

今度は陸の方を見て言った。

陸「いやな、進の為に必死になってるお前、面白くてな。つい・・・」

「

正「・・・そうか。」

冷静になり、胸倉から手を離れた。

正「なあ、ちょっと上見てくれへんか？」

陸「え？まあいいけど。」

そう言つて空を仰いだ瞬間、正のアップーが陸のあごに入った。

正「冗談もたいがいにせえやあ！」

陸「ごめんちゃーい！」

そんなやり取りの後、三人は各々のこれまでの事を説明した。

少年達説明中・・・

それが終わって、三人は話し合いをしていた。チルノは少し近くで

暇そうに聞いていた。

陸「とりあえず、これからどうするかだな。」

正「まず、ここから一番近そうな所に行くべきやろ。」

進「近くもいいけどさ、それより霊夢に会えばいいじゃないの？」

正「あ、それもそうやのう。」

陸「確かに、俺と進はともかく、正は能力を持っている可能性があるからな。」

進「じゃあ、最初の目的地は博麗神社で決定だね。」

正「それはええけど、場所は誰が知ってるんや？」

進「いやいや、僕らはこの世界の地図知らないでしょ。」

陸「それもそうだな。」

正「って事はまさか・・・。」

そう言って正は、ちょっと離れた所でさっきより暇そうにしているチルノを見た。

陸「そのまさかだな。」

正「おいおい、あれほど当てにならん案内もないで。」

進「でも、僕達だけで行くのはもつと無理だよ。」

陸「いないよりましって奴だな。」

正「それもそうやのう・・・」

進「じゃあ、僕が頼みに行くよ。」

そうやって進がチルノに交渉し、三人は内よりましなガイドに道案内をしてもらう事になった。

チ「さあ、あたいについて来なさい!」

そう言ってなぜかダツシュで先に行くチルノ。

三人も走って追いかける。

正「それにしても、ほんまにあれが当てになるんかのう?」

陸「まあ、今はチルノを頼ろう。」

こうして四人はとりあえず湖を出発した。

少年達移動中・・・

しばらくして、四人は森の中で歩みを止めていた。

進「ねえチルノ、この道で合ってるの？」

チ「えーっと、確かここを右に、次が左、次が・・・あれ？どっちだっけ？」

ぶつぶつと念仏のように言っていた。

陸「どうやら、道がわからなくなってるみたいだな。」

正「やっぱのう。絶対迷うと思っとなわ。」

呆れたように小声で言う。

チ「うるさいわね！あたいは普段飛んでるから、歩く必要なんてないのよ！」

聞こえていたのか正に逆切れする。

陸「さて、ここからどうするかな。」

そう言うと、すぐ近くの木の枝に止まっている鳥の声が聞こえた。

正「こうなったら、鳥にでも聞くか？」

冗談混じりに言っていると、進がなぜか耳を澄ましていた。

正「おいおい、マジにするか進？」

進「ごめん、ちょっと黙ってて。」

正を制し、しばらくして鳥の声を聞いた後進は、

進「もしかしたら・・・」

何かを思い立ったのか鳥に近づいていった。

正「おい、ほんまに鳥に聞く気が進？」

正の言葉を見し、進は鳥に話しかけた。

進「あのさ君、博麗神社ってどこか知ってる？」

そう言うのと、鳥は返事をしたように鳴いた。

しばらくして、進が全員にこう言った。

進「あのさ、この道を左に行って、次を右に曲がって、ずっと歩いていいたら見えてくるって。」

まるで鳥に聞いたように言った。

正「進・・・お前って、鳥と喋れんのか？」

進「最初は僕自身も半信半疑だったけど・・・聞いてる内に何を言ってるのかわかってきたんだ。」

正「マジかい・・・」

陸「恐らくそれが、進の能力だな。」

進「何か不思議な能力だね。」

正「お前らしいっちゃいわ。」

陸「じゃ、鳥に感謝して行くか。」

正「ああ、そうやのう。」

そして四人は、少し急ぎ足で博麗神社に向かっていったのであった。

第五章 三人の再会（後書き）

後書き

ふう、やっと編集終わった・・・友達のPC借りてるから申し訳ない気持ちでいっぱいです（笑）。

とりあえず第五章までの連続投稿を終えました。ちょっと疲れましたが、でもんだーいなーいよ。

現時点でいまだに東方キャラの登場が二人だけ・・・コレハマズクナイカネスミタ？

まあ後でわんさか出てくる（予定）ですので、今後に期待してください。

初心に戻ってみると、やっぱり若かったなあとかしみじみ思います。

なので編集とかはこれでもしっかりやっているつもりです。でも誤字脱字はいまだにあるこの現状・・・悲しいです。

不定期なので第六章はどうなるか・・・まあそんなに遅くないと思いますけどね。

気になるなら、是非とも評価とコメの方お願いします！わしはこれでも結構必死です！！

では、第六章をお楽しみに。そう言えば昔の奴ずつと話になってましたね。今回で自覚しました。

第六章 能力の覚醒（前書き）

あらすじ

- 1、三人は合流した
 - 2、三人は話し合った
 - 3、三人+チルノは博霊神社に向かった
- ではどぞ。

第六章 能力の覚醒

第六章 能力の覚醒

少年達移動中・・・

四人がしばらく歩き続けていると、目の前にあの博麗神社の階段が見えてきた。

進「ここかあ。」

その声に、全員が上を見上げる。

陸「それじゃ、この長い階段を上って行くか。」

そう言つて、三人は階段を上っていった。チルノは飛んで上つていった。

しばらくして、四人はようやく博麗神社に着いた。

陸「これが、博麗神社か。」

正「何て言つか・・・想像通りやのう。」

四人が博麗神社を見ていると、後ろから誰かの声がした。

？「あら、ここに見慣れないのが三人も来てるなんて珍しいわね。」

四人が振り向くと、そこにはあの霊夢本人が箒を持ってこっちを見ていた。

霊「で、何の用？賽銭以外なら、早々にお帰り願いたいわね。」

陸「この人が霊夢か・・・」

正「これまた想像通りや。」

進「うわー、霊夢だ霊夢だ。」

霊「だから、何の用なの？」

陸「あ、挨拶が遅れました。俺達は外の世界から来た人間です。」

全員を代表するように、一步前に出て答えた。

霊「え？またあ？もう、紫の奴・・・一体これで何人目よ・・・」

明らかに面倒臭そうな素振りを見せる。

陸「それで、俺達はこれからどうしようかと思ひまして、とりあえずここに来ました。」

霊「どうしようかって？決まってるじゃない。すぐにでも帰つてもらうわよ。」

進「ええ！？なんでそうなるの！？」

霊「当然でしょ。何かあったら面倒なもの。」

正「ちょっと待ってくれや、まだあんたに言っていない事があるんや。」

霊「何よ？」

陸「はい、俺自身はまだわかりませんが、この二人は能力を持っている可能性があるんです。」

霊「それ・・・本当？」

さつきの面倒くさそうな様子とは、明らかに変わった。

正「ああ、そうやで。」

霊「なら話は変わるわね。」

進「じゃあ僕達・・・」

霊「これからどういう能力を持っているか、確かめさせてもらうわ。ついて来て。」

そう言っつて四人は博霊神社の裏辺りの少し広い所に連れてこられた。

霊「まず一人目、そうね・・・そのの。」

正「わしか。」

霊「そうよ。名前は？」

正「拳武 正や。」

霊「そう。じゃあ、今わかってる事は？」

正「そうやのう・・・さっきルーミアといざこざがあって、その時自分で驚くぐらいのジャンプをしたんや。」

霊「ふ〜ん。ちょっとこっちに来て。」

そう言われた正は、霊夢の方に歩み寄った。

霊「ジャンプねえ・・・」

ぶつぶつと言いながら、正の体を下から上まで見渡した。

霊「ああ、なるほどね。」

正「へ？そんなんでわかるんか？」

霊「私を誰だと思ってるのよ。」

正「はぁ・・・で、わしの能力ってなんなんや？」

霊「そうね・・・」

そう言って霊夢は近くの木を見た。

霊「説明するの面倒だから、あれ殴ってみて。」

正「ちょっとまってや！！あんな木殴ってどないすんねん！！こつちの手痛めるだけやろ！？」

霊「大丈夫よ。普通の人間なら無理でしょうけど、今のあなたなら出来るわよ。」

正「ほんまかいな・・・」

進「早くしなよ、この後僕らのもあるんだから。」

正「（他人事やと思つてからに・・・）しゃあないのう。」

そう言つて正は木の方に行つた。

霊「とにかく集中して。遠慮とかせず本気でその木を殴つて。」

正「へいへい、なんでこんな事せなあかんのや・・・」

その木を殴る構えをとる正。

霊「体の力を全部出し切る感じでやるのよ。」

正「はいよ、そんじゃ思いつきりやるでえ！！」

そう言つて力いっぱいその木に殴りかかった。

正「そうりゃあああ！！！！」

掛け声とともに放つたパンチは、殴つた所からその木をへし折つた。

へし折れた木は大きな音を立てて地面に倒れた。

霊「それが、あなたの能力よ。」

正「・・・すげえ！！これがわしの能力か！！」

嬉しさから、しばらくその辺りを走り回った。

霊「さてと、次は・・・その。」

進「あ、僕？」

霊「そうよ、名前は」

進「鳥間 進だよ。」

霊「そう、あなたは何かわかってる？」

進「えーっと、さっき鳥の言葉がわかって、道を聞いてみたんだ。」

霊「なるほどね、その手の類は・・・」

その時、正がさっき倒した木にいる何かに気づいた。

正「お、この木蛇がおったんか。」

霊「蛇？それは丁度いいわ。ちょっと持ってきて。」

正「ええ？なんでや？」

霊「いいから持ってきて。」

そう言われて正はその場に蛇を持ってきた。

霊「じゃあその蛇を進に持たせて。」

正「はいよ。」

そのまま進に渡す。

霊「いい進？耳を澄ましてその蛇の声を聞いてみて。」

進「うん。」

正「鳥の次は蛇かい。」

進「・・・わかった！」

霊「何て言ってるの？」

進「誰が木を倒したんだって。」

正「それってわしゃ。」

霊「じゃあそれを蛇に言ってみて。」

進「うん。」

進が蛇に話しかけると、蛇は正に噛み付こうとした。

正「危な！！ちょう、堪忍やって！！」

噛み付きから避ける正。

霊「それがあなたの能力よ。」

進「へえ、何か楽しそうな能力だね。」

蛇を見ながら言う進。

霊「じゃあ、最後はあなたね。」

陸「戦動 陸です。」

霊「あなただけが、まだ何の手掛かりもないのよね？」

陸「はい。もしかしたら、ない可能性もありますね。」

霊「そうね・・・」

陸の体を前から後ろから見回る。

霊「わかったわ。あなたにも能力があるわね。」

陸「では、どういう能力なのですか？」

霊「今から試すわ。正と進とチルノ、ちょっと来て。」

霊夢は三人に耳打ちをし、その後陸にこう言った。

霊「陸、目をつぶって。」

陸「わかりました。」

目をつぶった後、霊夢以外の三人はそれぞれ陸の右、左、後ろに散らばった。

霊「今他の三人があなたの周りにいるから、どこに誰がいるか、目をつぶった状態で判断して。」

陸「え？どうやって？」

霊「意識を周りに集中してみて。」

陸「はい・・・」

ひたすら集中しつづける陸。

しばらくして、三人の位置を感じ取ったようだ。

陸「わかりました。」

霊「どこ？」

陸「正が右、進が左、チルノが後ろですね。ついでに霊夢、あなたは前。」

陸が言ったとおり、三人と霊夢はその位置にいた。

進「当たたり〜。」

正「何でわかつたんや？」

目を開けた陸が答えた。

陸「何て言うかな・・・そこにいたって言うべきかな。」

正「それやったら曖昧すぎるやろ。」

進「でもすごいよ、かくれんぼとかしたら絶対わかるもん。」

陸「はは、そうだな。」

正「よっしゃ、とりあえずはこれで全員わかつたんやのう。」

霊「じゃあ、これから一通り説明するわね。」

三人が集まった所で、霊夢が説明を始める。

霊「まずは正、あなたは身体能力を向上させる能力よ。」

正「マジで!?!どれぐらいなんや？」

霊「それは、あなたの努力と器量次第よ。」

正「そっか。そんじゃしつかりと鍛錬するか!?!」

霊「次、進。あなたは生き物や意思のある物と会話できる能力よ。」

進「わあ、じゃアリスとか鹿も？」

霊「もちろんよ。」

進「やったー！」

霊「最後、陸。あなたは・・・熱探知できる能力。」

陸「熱探知・・・ですか？」

霊「そうよ。」

陸「随分変わった能力ですね。」

霊「いいじゃない。曖昧じゃないだけ。」

陸「それもそう・・・なんですかね。」

霊「じゃ、これで説明は終了。」

正「いやあ、まさかわしらに能力があるとはのう。」

進「何だかわくわくしてきたね！」

素直に喜ぶ二人。

そんな中、陸だけはが深刻な顔をしている。

陸「では霊夢、俺達はどう・・・。」

霊「ええ、残念だけど。」

正「へ？何が？」

陸「わからないのか？能力を持ったことが何を意味するかを。」

進「それは・・・すごい事？」

霊「違うわよ。」

正「じゃあなんや？」

陸「・・・俺達は、もう外の世界には帰れないんだ。」

その一言は、二人の顔から笑顔を奪った。

進「・・・え？どういう事？」

霊「単純な事よ。能力を持った者を外の世界にいさせる訳にはいかないのよ。」

正「ちよつと待てや！！わしはともかく、進や陸は大丈夫やる！？」

霊「じゃああなたは、動物と喋ることが出来る人がいて、それを周りは何とも思わないと？」

正「それは・・・」

霊「能力の危険次第じゃないのよ。幻想郷は忘れられた者がいる場所であると同時に、あつてはならない者もいさせる為の場所なのよ。」

進「それは・・・どうにもならないの？」

霊「ええ、それが幻想郷の・・・二つの世界の掟よ。」

そう言うと、進はその場を逃げるように走っていった。

正「おい！！待てや進！！」

陸「誰か追いかける！！」

チ「あたいが行くわ！！」

そう言つてチルノが進の走つた後を追いかけた。

しばらく森の中で進の走つた足跡を頼りに、チルノは進を探した。

チ「もう、進の奴一体どこに・・・あ！！」

森の開けた所に、小さな川があつた。

その近くで一人ぼつりと座っている進がいた。

チ「やっと見つけたよ進！！」

進「ああ・・・チルノか・・・」

進は振り向きもせずに応えた。声には明らかに元気がない。

チ「もう、何でいきなり走りだしたのよ？みんな心配してるよ？」

進に近づきながら言った。

進「・・・からない・・・」

チ「え？何て？」

進「わからないんだよ・・・僕も・・・」

チ「わからないって、足が勝手に動いたって言うの？」

進「何でだろう・・・色んな事考えてて・・・気がついたら走ってたんだ。」

チ「で、ここに来てたわけ？」

進「うん・・・ねえ、何でだろう？何で僕、いきなり走ったのかな・・・」

うつむきながら言う進の隣に、チルノが座り込んだ。

チ「進、それはね・・・」

少し溜めてチルノはこう言った。

チ「青春してたんだよ！！」

進「え？」

チ「青春してる時はね、そんな事しょっちゅうよ！！だから進は今青春してるのよ！！」

進「チルノ・・・」

そんなはずがないだろうが、馬鹿のチルノにそんな事わかる訳ある
ない。

チ「さあ、あの夕日に向かって走るとよ!!」

そう言っただけの方を指差す。

進「夕日って、まだ昼だよ。てかどこ指差してんの？」

チ「何でもいから、とにかく走りなさい!!」

進の手を掴んで引っ張り、浅い川を走り出す。

進「ちょ、チルノ、こけちゃうって!? わあ!!」

案の定こける。

進「チルノ、よくもやったね!!」

立ち上がった後、チルノに水を浴びせる。

チ「何を!! あたいたって負けないよ!!」

しばらくの間、水の掛け合いをする二人。
遠くから、それを見ている三人がいた。

正「はは、人が心配してたら、何やってんやあいつら。」

陸「……」

正「ん？どないした？」

陸「正・・・俺達も行くぞ！！」

正「ええ！？いきなり何言つとんやお前？頭大丈夫か？」

陸「うるさい！！行くぞ！！」

そう言つて正の手を引っ張り、二人の元に走っていく。

正「ちょちょちょ！！待て待て待て！！」

陸「イヤッホー！」

そのまま川にダイブする二人。

正「陸！！いきなり何すんやお前！！」

立ち上がり、陸を睨む。

陸「お、文句があるならかかってこいよ！！」

進「僕らも僕らも！！」

チ「あたいを忘れるんじゃないよ！！」

四人は今の現状など忘れて、川で無邪気に遊びだした。

霊「やれやれ、もう外に帰れないって言うのに、明るいわねえ。」

そんな様子の四人を、微笑みながら見守る霊夢であった。

第六章 能力の覚醒（後書き）

後書き

更新遅れました。ごめんなさい。

言い訳する気はないんですけど、何分わしは忙しい身分ですので。

一応不定期とは言っているので、みなさんも承諾してくれていると思っと思っています。

今回でとりあえず三人の能力とかはわかりましたか？陸はわかり辛いですけどね。

最初いたんだ三沢君並にチルノの存在霞みましたけど、最後はしっかりと使いましたよ。

これから三人は本格的に動いていきますので、みなさんにとっても面白くなると思います。

さて、自宅PCは直ったので、これから友人の協力の元ばんばん投稿させてもらいますよ。

では、第七章をお楽しみに。

第七章 彼らの存在（前書き）

あらすじ

- 1、四人は霊夢に会った
- 2、三人は能力を持っていた
- 3、四人は青春した

ではどぞ。

第七章 彼らの存在

第七章 彼らの存在

川で遊んだ後、四人は博麗神社の前で話し合いをしていた。霊夢は近くで彼らの話を立ち聞きしている。

正「さーて、これからどないすつかのう。」

進「僕は、この世界を旅したい！！」

陸「それはいいな。幻想郷はいろんな所があるからな。」

正「わしもええと思うけど、ずっとそーいうのはまずいやろ？」

進「そうだね。」

陸「じゃあ旅をしながら、俺達が住めそーな所を探そー。」

正「おお、それが一番よさそーやのう。」

進「僕もさんせー。」

陸「これで方針は決まったな。」

正「そんじゃ、まずはどこに行くかやのう。」

陸「ここから近くがいいだろう。」

進「チルノ、ここから近くってどこがある？」

チ「そうだねえ・・・」

正「チルノに聞いてもわからへんやろ。」

チ「うるさいわね！！今思い出しているとこよー！！」

陸「ここは霊夢に聞いたほうがいいな。」

霊「ここからならそうね・・・紅魔館辺りじゃない？」

正「紅魔館かあ。」

進「あそこって、確か結構物騒だよな。」

陸「確かにな。招待状でもあれば別だろうがな。」

進「とりあえずさ、それなりに準備しようよ。」

陸「そうだな。」

正「準備って、何を？」

陸「それはもちろん・・・」

正「？」

陸「心の準備だ。」

正「へ？それ？」

進「当たり前だよ。忘れがちだけど大事だよ。」

正「いやいや、もっと大事な事があるやろ。」

陸「何だ？」

正「そりゃ戦闘準備やろ。」

進「・・・バトルマニア・・・」

正「ん？何か言ったか？」

進「何も。」

陸「まあ確かにな。紅魔館の連中を相手にしようと思ったら、それ相応の準備はいるな。」

正「やる？」

進「でもどうやって？」

正「そこはあれや・・・」

そう言っつて正は霊夢の方を見た。

霊「まさか、私を当てにする気？」

正「そりゃそうやる？」

陸「俺達はまだ戦いの何かを知らない。だからあなたの協力が必要なんだ。」

進「僕は多分戦えないからさ、この二人だけでもお願いだよ。」

霊「何言ってるのよ、私が何で・・・ん？ちよつと待って。」

何かの気配を感じたのか、いきなり神社の裏の方に行った。

四人「？」

少しばかり話し声が聞こえた後、霊夢が何か大きな袋を持ってこっちに来た。

霊「しょうがないわね。」

陸「じゃあ、俺達に協力してくれるのか？」

霊「そういう事になったわ。」

正「よっしゃあー!!」

霊「但し、戦い方とかは一切面倒を見ないわよ。」

進「じゃあ、ぶつつけ本番ってこと？」

霊「そうよ。」

正「それはしゃあないのう。」

陸「まあ物事全て最初はぶつつけだ。」

進「そうだね。」

霊「じゃあ、渡すものがあるからさっさと渡すわよ。」

そう言ってさつき持ってきた袋から何かを取り出した。
それは束になっているカードだ。

霊「これは陸に渡す物ね。」

そう言ってそれを陸に手渡した。

陸「これは？」

霊「あなたたちはスペルカードの事を知ってるでしょ？」

陸・正・進「一応。」

霊「それは武器をしまったタイプよ。」

陸「武器？」

正「武器って、どう使うんや？」

霊「簡単よ。貸してみて。」

そう言つて何枚かの内の一枚を取り出し、それを陸に見せる。

霊「いい？カードに書いてある物を今手に持っている様にイメージするのよ。」

陸「なるほど。じゃあやってみようか。」

陸は束の中から一枚を取り出た。他のカードはそのままポケットに入れる。

陸「えーっと・・・」

少しするとカードが光り、それは陸の両手の拳銃に変わった。

陸「お、こんな感じが。霊夢、折角だから他のカードも見ていいか？」

霊「それはいいけど、同時に出すのは多分無理よ。」

進「何で？」

霊「今は一つだから気にならないくらいの霊力だけど、同時となると慣れてない者は体に無理がきたり、倒れたりするのよ。まあ才能とか適正があれば別だけど。」

正「なーる。」

だが陸はさっき出した銃をしまわずに次のカードを使った。

霊「ちょっと、人の話を・・・」

その言葉を遮るように次の武器が出た。今度はナイフだ。

陸「おお、銃以外にもあるんだな。これはスペツナズナイフみたいだな。」

正「おい、何ともないんか？陸。」

陸「別に。」

正「おいおい霊夢、こいつ何ともないって言っとするで。もしかして才能とかなんちゃらに恵まれてるって事か？」

陸「俺だったらそれぐらい当然だな。」

進「さっすが陸。」

霊「信じられない・・・本当にあいつの言ってた通りなの？」

正「ん？何言ってんや霊夢？」

霊「え？ああ、ただの独り言よ。」

陸「霊夢、これはどうやって元に戻すんだ？」

霊「出した時と同じ感じよ。持っている物をカードにする感じ。」

陸「わかった。」

同じ要領で二つの武器をカードに戻し、ポケットにしまう。

正「にしても、それ便利やのう。」

うらやましそうに見つめる。

進「あれ？正は何か無いの？」

霊「正にもあるわよ。」

正「マジで！？何々？」

霊「ちよつと待って・・・」

さっきの袋からまた何かを取り出した。
今度は金属製のグローブとレギンスだ。

霊「はい、これよ。」

そう言つて正に渡す。

正「え？わしのつて、カードでしまう物とかとちゃうんか？」

霊「それだと陸と被るでしょ？」

正「ちよ！なんやねんその理由！？」

進「まあさ、まず付けてみたら？」

陸「それもそうだな。」

二人の発言で立つ瀬のなくなった正。とりあえず付けてみる。

正「お、見た目のごつさから思ってたより動きやすいやん。」

少し動き回る。

霊「元々軽いでしょうけど、あなたの能力と相まってより機能性が上がってるのよ。」

正「ほお、まさにわしの為の装備やのう。」

陸「まあ、前の軍手とサポーター姿よりはましだな。」

正「け！もうええやろ、その事は。」

ふてくされる正。

霊「後、これも渡しておくわ。」

そう言って見せたのは、何も書かれていないカードの束だ。

陸「これは何だ？」

霊「スペルカードよ。」

正「へ？じゃあなんで何も書いてないんや？」

霊「当然よ。このカードは、あなた達自身の手で描かれるんだから。」

陸「描かれる？」

霊「要するにイメージよ。」

正「イメージか・・・」

霊「まあ、とりあえず渡すから、はい。」

そう言つて陸と正に手渡した。

渡された二人はしばらくそのカードをじっと見つめた。

霊「戦う前に、そのカードに自分のイメージを描いておいて。」

正「ほーい。」

陸「わかった。」

霊「じゃあ進、ちよつと来て。」

進「何？」

霊夢は大きな目の紙を袋から取り出し、進に手渡した。

霊「あなたには地図を渡しておくわ。」

進「え？何で僕なの？」

霊「あなただけ手持ち無沙汰でしょ？」

進「はは、なるほどね。」

陸「まあ、地図はある方がいい。チルノの案内はもう沢山だ。」

チ「大きなお世話よ！」

霊「じゃあ、これで私が渡す物は全部よ。」

正「すまんのう、霊夢。」

陸「感謝する、霊夢。」

進「色々ありがとう、霊夢。」

霊「はいはい、じゃあとっと行きなさいよ、ここにいても邪魔なだけだから。」

あしらう感じで応える霊夢。

陸「じゃあ、俺達はこれで失礼する。」

正「じゃあのう霊夢。」

進「またここに来るよ。」

そして四人は博霊神社を後にした。

それを見送る霊夢に、後ろから誰かが話しかけてきた。

？「ふふ、ようやく行つたのね。」

霊「ええ、それにしても、あんたがわざわざこんな事するなんて珍しいわね。」

その誰かの方に目を配る。

？「さつきも言ったでしょう。彼らはその内、あなたにとって役に立つ存在になるのよ。」

霊「それと同時に、厄介事も起きるのよね。」

？「仕方ないわよ。もうその兆候は起きてるんだから。」

霊「もう、この世界はいつになったら平穏になるのよ。」

？「あら、この問題を解決したら、また平穏になるじゃない。」

霊「で、少ししてまた違う異変が起きる。その繰り返しじゃない。」

？「でもそれは、あなた自身が歩まなければならない道よ。博霊の巫女としてのね。」

霊「それもそうよね。」

そう言っただけを見つめ、軽くため息をつく。

霊「で、検討はついているの？」

振り返ってその誰かに尋ねる。

？「それがね・・・まったくなのよ。」

霊「ちよつとお！？何の脈も無し！？」

？「仕方ないわよ、この問題は不特定多数で、今までの問題と違って単純じゃないのよ。」

霊「・・・じゃあ、もう少し協力者がいるわね。」

？「それだったら、魔理沙にはもう言ってるわよ。」

霊「そうなの？相変わらず手は回るわね。」

？「ふふ、それが私のとりえだもの。」

霊「じゃあ、とりあえずさっきの連中は様子見、私達は問題の検討探しって訳ね。」

？「ええ。」

霊「それじゃ、さっさと行くわよ。出来るだけ早めに解決して、またゆっくりしていたいからね。」

そう言つて霊夢とその誰かも神社を後にしたのであった。

第七章 彼らの存在（後書き）

後書き

こんにちわ、今回は違う友人のPCで投稿しました澄田です。

なぜいつもの友人ではないかと言いますと、何分お盆ですので色々
と忙しかっただけなんです。

まあどうせ文章は自分のPCで打つ訳ですから、あんまり関係ない
んですけどね。

わし自体はあくまでオフラインな家ですので、色々苦労しているん
です。

それはさておき、この小説もいよいよ本格的に動き出してきました
ね（多分）。

友達も見ている訳ですから、もっと気合を入れてやっていきたいで
す。

さて、不定期なのは相変わらずですけど、まあ暖かい目で見えてくだ
さい。

では、第八章をお楽しみに。

第八章 紅魔の門番（前書き）

あらすじ

- 1、三人は話し合った。
 - 2、三人は霊夢から色々と授かった。
 - 3、四人は紅魔館に向かった。
- ではどぞ。

第八章 紅魔の門番

第八章 紅魔の門番

少年達移動中・・・

四人は紅魔館までひたすたに歩いていった。だがいくら近いと言ってもそれなりに距離はある。
一同の顔にはあまり元気がなかった。

進「そう言えば、チルノはなんでついてきてるの？」

チ「ただ暇だからよ!!」

正「随分適当なやつちゃ・・・」

陸「なあ、後どれくらいだ進？」

進「うん、この地図じゃちよつと・・・」

正「お、おい!!あれ見いや!!」

前方を指差した。

他三人「え？」

三人が指差した方をじつと見ると、紅魔館らしき建物がぼんやりと見えていた。

進「やったあ！やつと見えてきた。」

嬉しさから飛び跳ねる。

陸「よし、じゃあまずは門に向かうぞ。」

その声にこたえるように四人は陸を先頭に紅魔館まで走っていった。

近くいまで来た四人、彼らの前には紅魔館の大きな門が見えていた。そこには門番こと美鈴がいつものように立ちながら居眠りしていた。四人はある程度門から距離を置いて話し合っていた。

陸「さて、どうするかだな。」

進「予想通りだけど、中国寝てたね。」

正「そうやのう。」

チ「寝てる内に入り方考えようよ。」

進「そうだね。」

正「でも、いくら美鈴が寝てる言っても門は閉まったままだ。さすがに開けた瞬間目覚めますで。」

陸「そこは・・・頭を使え。」

そう言うと陸と進は打ち合わせをしていたようにチルノを取り囲む。

チ「あれ？何であたいの周りに来てるの？」

二人は返事すらずに無言でチルノを担ぐ。

チ「あ、わかった！！あたいのこの天才の頭で・・・まさか？」

察しのいいチルノ。二人は担いだまま門に突っ込んだ。

正「ええ！？今時ト ストーリー2ネタ！？てかそれ絶対意味ない・
・・」

と言い切る前にチルノの頭は門にぶつかった。
物凄く鈍い音がしたが、門はまったく開かない。

チ「NO - - - - -！！！！」

陸「おっとと。」

進「うわぁ！！」

反動で倒れる二人と頭を抱えて転げ回るチルノ。
そして当然のごとく美鈴が起きた。

美「むにゃ？一体何の音ですかぁ？」

陸「しまった！！目を覚ましたか。」

進「まずいよ！！僕らこのまま突破するはずだったのに！！」

正「てか突破できる訳ないやろがあ！！！！」

焦り顔を見せる二人と突っ込む正。

美「何だかよくわかりませんが、とりあえず敵ですね！！たえ何があるうと、ここは通しませんよ！！」

二人の方を向いて構えを取る。

陸「くそ！！こうなったら・・・正！！」

正「何や？」

陸「美鈴と戦え！」

正「ええ！？この空気でわしがやるんかあ？」

進「頼むよ！僕らの為と思って・・・」

なぜか今だに立ち上がらない二人が正を真剣な眼差しで見つめる。

正「・・・しゃあないのう。おい、あんた。」

レギンスをはめ、手にグローブを付け、美鈴を見る。

正「わしらを通してもらえんのなら、今からわしと戦ってもらうで。」

「

美「ほお、あなたが私の相手を？」

正「まあ、そういうこっちゃ。恨みはあらへんけど本気で行くで。」

それなりな構えを取る。見た感じはボクシング丸出しだ。

美「ふふ、人間と妖精程度なら、私は四人がかりでも構わないわよ？」

応えるように構えを取る。こちらは太極拳の構えだ。

正「そか、でもわしはただの人間とちゃうで。」

美「では、何？」

正「わしは・・・己の拳で仲間の明日と未来を切り開く！！熱血拳士、拳武 正や！！」

変にポーズを取って言い切った。

陸「へえ、いつの間に二つ名考えてたんだお前？」

正の後ろからぼそりと言った。よく見ればいつの間にか三人は正の後ろにいた。

正「うお！？いつからおつたんやお前ら！？」

後ろを振り向く。

チ「熱血なんちゃらって言った時。」

チルノがやたら冷たい目で正を見る。

正「熱血なんちゃらちゃう！！熱血拳士や！！」

進「どうでもいいよ、そんな中二的ネーミング。」

チルノと同じように冷たい眼差しを正に向ける。

正「け！！お前らなんぞもうええわ！！」

少し機嫌を悪くし、改めて前を見る。

美「挨拶はすんだ？」

意味深な微笑を浮かべて正を見る。

正「ああ、すましたで。あんたを倒す前の挨拶をのう。」

美「口だけは達者ね、あなた。」

正「口だけ達者なんは後ろにいる奴らや。わしは言葉よりも体で語るタイプやで。」

美「そう・・・だったらすぐにでも叩き潰してあげるわ！！」

気を右足に集中させ、構える。

美「華人小娘、紅 美鈴、参る！！」

右足を上に振り上げた。

美「黄震脚！」

そのまま下に下ろし、地面に衝撃波を起こした。
だが正は地面におらず、既に美鈴の頭上にいた。

美「な！？」

正「遠慮は無しや。行くで！」

右足を伸ばし、勢いを付けて美鈴に降下した。

正「ドロップシュート！」

その蹴りは、美鈴の頭部目掛けて放たれた。

美鈴は両手を顔に持つてきて気を使いガードした。

ガードされた正はそのまま、後ろ飛びをし、距離を置いて着地した。

美「・・・人間にしては大した物ね、あなた。」

正「へ、わしの攻撃はこれからやで！」

構え直して言う。

正「どうりゃあー！」

そのまま力強く右足で横蹴りを放ち、その蹴りの軌道を描いた衝撃波を飛ばした。

美「甘いわよ!!」

美鈴も円を描いた弾幕を足で飛ばした。

二つの攻撃は二人の距離の真ん中辺りでぶつかり合った。

その瞬間、二人はお互い引き付けあうように突撃していた。

正「ライドナックル!!」

美「螺光歩!!」

お互いの右拳が激しくぶつかり合う。

正「おう!？」

美「ちい!!」

反動から弾かれるように飛ぶ二人。

体勢を立て直した二人の右拳から、わずかに血が流れていた。
その血を払い、構え直す二人。

美「ふふふ・・・はははは!!」

突如大声で高らかに笑い出した。

正「何がおかしいんや!!」

美「うれしいの・・・心の底からね!!」

さつき見せた微笑を浮かべる。

正「うれしい？そりやどついうこつちゃ？」

美「私は、長くこの世界にいた。でも過ごした日々はつまらない物だったわ。確かにこの世界にも武芸者は数多くいるわ。でも私のような格闘技を嗜んだ者はろくにいなかった・・・だから、あなたのような存在を、私は待っていたのよ！！」

正「なーる。でもわしの格闘技は見よう見まねやで？」

美「それでも十分よ。こうして己の武を語り合える者であるのなら。

」

正「そか。そんじゃもう喋る事もあらへんのう！！」

そう言つて美鈴に向かって走り、その勢いのまま上空に飛んだ。

美「同じ手は食わないわよ！！」

右手に気を込める。

美「華符！！破山砲！！！！」

上空に向けて強烈な裏拳を放った。

放たれた裏拳は飛び掛った正を確実に捕らえた。

正「ぐわあ！！」

吹き飛ばされた正は、地面にそのまま落下し、倒れた。

正はもう立ち上がれるかも怪しい状態だった。

美「・・・もう終わりかしら？所詮は人間の力・・・」

その台詞に抗うように、正は立ち上がってきた。

正「人間を・・・なめんなやあ！！」

美「・・・驚いたわね。あの一撃を喰らって起き上がれるなんて。」

正「生憎打たれ強さと根性はそんじゃそこらの奴とは訳が違うで！
！今度はわしの番や！！行くでえ！！」

美鈴に向けて、右手の拳を握り締めた。

正「拳符！！ストロークストレートオ！！」

渾身のストレートパンチを放ち、美鈴に突撃した。

美「な・・・早・・・」

防ぐ事もできず、美鈴は門まで吹き飛んでいった。

門に貼りつけられる様にぶつかり、そのまま地面に伏した。

美「こ・・・この私が・・・」

地に這いつくばる美鈴。

正「わしは、もうただの人間とちゃう。舐めてかかったのが、お前さんの敗因や！！」

倒れてる美鈴に近づきながら言った。

美「・・・そうね・・・」

顔だけを上げ、答える。

美「でも、私に勝った程度じゃ、この館の者には勝てないわよ・・・」

苦しそうな様子で下っ端な台詞が飛んできた。

正「・・・確かにわし一人やったら無理や。やけど・・・」

振り向かず右手の親指を後ろにいる仲間に向ける。

正「わしには仲間がある。あれでも頼りになる仲間がのう。」

美「仲間・・・」

その時、正が倒れたままの美鈴に手を差し伸べた。

美「・・・何のつもり？」

正を睨みつける。

正「あんたと戦ってて思ったんや。あんたがいたらわしらの旅が面白くなりそうやのうって。まあ、勧誘って言うんかのう？」

照れくさそうに言った。

美「私を・・・紅魔館の門番と知ってて言ってるの？」

正「だから、これからその当主に許可貰いにいくんや。それよりも、美鈴はどうなんや？」

美「・・・仮にも私を倒した者からの誘いなら、断る道理は私にはないわね。」

正が差し伸べた右手を握る。

美「じゃあ、これからあなた達の道案内をしてあげるわ。」

正「お、そりやありがたいのう。」

そのまま美鈴を引き上げる。

後ろにいた三人が正に歩み寄ってきた。

陸「はは、まさかの勧誘か。まあ、そう言った所も正しいな。」

意味深な笑顔を浮かべる。

進「これからよろしく美鈴!!」

手を振って笑顔で挨拶をする。

チ「ふん!! あたいよりは弱いだろうけどね!!」

慢心顔で手を組んで言った。

陸「じゃあ、これからレミリアの元に行くか!」

他四人「おう!!」

こうして五人は、門を開けて紅魔館に入って行った。

その様子を、紅魔館の一つの窓から見ている者がいたのであった。

第八章 紅魔の門番（後書き）

後書き

さて、この話の山場の一つである紅魔館編、いよいよスタートです！！

まあ見よう見まねの正が武芸者の美鈴にいきなり勝っちゃうとかおかしいのは最初言ったとおりですよ？

正は中2脳ですのでこれから技名とか連呼しますけど、他のキャラはそれほどなのでご安心を。

これからバトルは連続してありますので、今までとは違った面白さを是非ともお楽しみください！！

では、第九章をお楽しみに。

第九章 紅魔のメイド（前書き）

あらすじ

- 1、四人は紅魔館についた
 - 2、正が美鈴と戦い、勝った。
 - 3、美鈴を勧誘し、紅魔館の中に入った。
- ではどぞ。

第九章 紅魔のメイド

第九章 紅魔のメイド

少年達移動中・・・

美鈴の案内の元、四人は紅魔館の広い廊下を走り、レミリアの元に向かった。

廊下は不気味なほど静かで、人っ子一人見当たらない。

正「のう、すんなり行きすぎとちゃうか美鈴？」

美「確かにそうね。紅魔館の中で何かがあつたのかしら・・・」

進「陸、誰かいるとかさ、何かわからない？」

陸「ちよつと待て・・・」

目をつぶり、周りを探る。

陸「後方・・・結構離れて一人・・・これは・・・」

何かを感じ取ったのか、即座に後ろを振り向いた。

そこには無数のナイフが飛び広がり、陸達目掛けて飛んできていた。

陸「まずい!!!全員伏せる!!!」

その声に呼応するように全員が身をかがめる。

飛んできたナイフは前方に飛んでいき、何本かが廊下の壁などに刺さった。

正「あつぶな!!」

美「これは、まさか・・・」

全員が立ち上がり、後ろを見ると、悠然と歩いてくる者がいた。
紅魔館のメイド長、咲夜だ。

咲「まったく、侵入を許すどころかその侵入者に道案内をしている
だなんて・・・一体何を考えているの、美鈴？」

その眼光と言葉は、そこにいた者全員に突き刺さるように向けられた。

美「咲夜さん！これは・・・その・・・」

咲「言い訳はいらないわ美鈴。貴方には今ここで・・・制裁を与え
るわ。」

ナイフを一本右手に構え出したその時、廊下に銃声が鳴り響き、構
えたナイフが弾かれ、廊下に転がった。
転がったナイフに目を向ける咲夜。

陸「おいおい、ろくに話も聞かずに制裁を加えるだって？やる事が
随分物騒だな。」

咲夜に向けられている陸の右手の拳銃の銃口から、うつすらと煙が

上がっていた。

転がったナイフから視線を外し、今度は陸にその目を向けた。

咲「・・・今やったのは、貴方で？」

陸「対し、殺気を放つ。」

陸「いえ、ここにいるこの正って奴です。」

そう言つて差し出すように正を前に出した。

正「へ？ちよつと待てや！？おかしいやろ！？何でここでわしを出すんや！？」

陸に突つかかる。

咲「そうですか、それなら、貴方から制裁を与えましょうか。」

左手に一瞬で構えた四本のナイフが、正と陸目掛けて飛んできた。

正「ちよちよちよちよおー！！」

思わず身を縮める。

だが、飛んできたナイフは全て陸が銃で打ち落とし、辺りに散った。

陸「おい正、盾ぐらいにはなれよ。」

構えたまま軽い調子で正に言った。

正「ふざけんなや陸！！てか今わしが盾になる必要なかったやろ！

！
」

立ち上がり、陸にほえる。

陸「いくらなんでも全部に当たるとは限らんだろ？だからお前はその時の保険だ。わかれよ。」

正「じゃあ避けるとか考えろや！！」

陸「わかってないなあ、ここは避ける所じゃないだろ？」

正「こんにやろう・・・」

陸をにらんでいると、咲夜が陸に話しかけてきた。

咲「貴方・・・人間にしては中々の腕ね。」

陸「はは、お褒めの言葉をあずかりどうも。」

咲「美鈴を退けたのは・・・貴方で？」

美鈴の方を見てから陸に視線を移した。

陸「いえ、それは今俺の前にいるこいつですよ。」

正を指差す。

咲「そう。でしたら・・・」

今までよりもさらに強烈な殺気を放つ。

咲「貴方自身の實力はどうでしょう？」

そう言いながら、両手にナイフをずらっと持ち、構える。

陸「はは、それほどでもありませんよ。」

陸もカードを使い、拳銃を両手に持ち、構える。

陸「・・・ここは俺が食い止める。正達はレミリアの元に向かうんだ。」

正たちに目を配らせて言う。

進「陸！！一人で大丈夫なの！？」

心配そうな目で陸を見つめる。

正「なーに、あいつやったら、咲夜相手でも心配あらへんやろ。行くで。」

そう言って進の手首を掴み、美鈴とチルノとともに前方を走りさった。

咲「行かせませんよ。」

咲夜が追いかけようとしたが、陸の銃弾に阻まれる。

陸「おーっと、俺を無視する気ですかい？」

咲「・・・」

陸を見ながら距離を置いて構える。

咲「仕方ありませんね、貴方から制裁を与えましょうか。」

陸「物騒ですねえ。ま、それでこそ貴方らしいんですけど。」

お互いの間にピリツとした空気が流れる。

陸「そうだ、戦う前に挨拶ぐらいはしておきましょうか。」

咲「そうですね。」

陸「俺の名前は戦動　陸です。よろしく。」

咲「私の名前は、十六夜　咲夜です。以後はありませんけどよろしく。」

陸「ははは、随分見くびられていますな。」

咲「見くびってなどいませんよ。力の差がありすぎるだけです。」

陸「それを世間一般で・・・」

両手の銃口を咲夜の方に向ける。

陸「見くびってるって言うんだ!!」

両手の銃を咲夜目掛けて乱射する。

だがそこには咲夜はおらず、カードだけが床に散らばっていた。
陸が攻撃を止めると、どこからともなく咲夜の声がした。

咲「闇雲な攻撃ほど愚かな物はないわね。」

咲夜は既に陸の背後にいた。

陸「（しまった！！これは・・・バニシングエブリシング！！）」

心の中で考えている内に咲夜の攻撃が来た。

咲「散りなさい。」

咲夜が右手のナイフで陸を一閃した。

だが陸はぎりぎりでも攻撃を回避していた。

陸「ふいー、危っぶないなあ。さすがはメイド長。」

咲「・・・大した反応速度ね。」

陸「まあな。だが、能力なしだったら当たってたな。」

咲「能力？」

陸「そうだ。もちろん企業秘密だけだな。」

咲「なるほど・・・」

陸を見据える。

咲「思ったより歯ごたえはありそうね。こついつのは久々よ。」

両手にナイフを構える。

陸「そうか・・・勝負はこれからだ!!」

そして、二人の本格的な弾幕戦が始まった。

その頃、四人はまだレミリアの元に向かっていた。

美「ねえ正、陸って人、本当に大丈夫なの？」

正「大丈夫やって。それより、咲夜の方こそどうなんや？」

美「咲夜さんは、このような室内でこそ活きる戦闘スタイルよ。だから正直言ってよほどの実力者じゃなきゃ太刀打ちできないわ。」

進「陸・・・」

正「おいおい進、お前がそんな顔してどないすんや。」

チ「そうよ!! 友達はどんな時でも信頼すべきよ進!!」

進「・・・うん、そうだね!! 僕も陸を信じるよ!!」

進の顔に希望が戻った。

その時、正はある事を思い出していた。

正「最初からそうやけど、なんでこない静かなんや・・・」

ここまで来ても、彼らは咲夜以外とは誰とも出くわしていなかったのだ。

美「そうね、一体何が起きているのかしら・・・」

その頃、紅魔館の地下のフランの部屋の前で恐らくこの館中の妖精が部屋のドアの前に構えていた。

一番前にはパチエリーと小悪魔が立っていた。パチユリーがそれらしい呪文を唱え、小悪魔はただおどおどしていた。

部屋からはドア越しに凄まじい音がしている。

小「ま、まずいですよおパチユリー様あ・・・このままじゃここも・・・」

パチエリーにすがりつく。

パ「あんたが言わなくてもわかってるわよ!!」

ドアに魔法を施しているが、声と顔に焦りが出ている。現にドアは今にも開きそうだ。

パ「それにしても・・・何で今になって・・・ここ最近は大人しか

ったのに・・・」

抵抗むなしくドアがどんどんひび割れていき、パチュリーと小悪魔はドアと一緒に吹き飛ばされていた。

その後、妖精達が戸惑う中、部屋から弾幕が放たれ、辺りにいた妖精たちを文字通り蹴散らしていた。

その頃、陸と咲夜は廊下がぼろぼろになるほどの戦いを繰り広げていた。

少ししてお互い向かい合うように立ち止まったていた。二人共あまり傷を負ってはいなかった。

咲「ふふふ、所詮はこの程度？いえ、あなたはむしろ頑張った方よ。」

見下す目で陸を見る。明らかに余裕がある。

陸「はは、まだまだこれから・・・」

だが明らかに息を切らしていた。陸自身はもうあまり余裕がありそうにない。

陸「（まずいな・・・この空間は明らかに彼女が有利だ・・・しかも、俺自身はまだまだ経験不足・・・勘で案外どうにかなってるが、長期戦になったらますます俺が不利になる・・・）」

考え事をしている内に、咲夜が陸に対し、ため息混じりに言ってきた。

咲「・・・もういいわ。これで終わらせる。」

そう言つて一本のナイフを構えた。さっきまでとは違い変に大きい。

陸「まさか・・・」

陸がそれを見つめていると、凄まじいスピードでそれを壁に投げつけた。

咲「光速　C・リコシェ！」

投げられたナイフは、廊下中を滅茶苦茶に跳ね回った。反響音が廊下中に響き渡る。

咲「このナイフは、すぐには貴方を襲わない。しばらく壁を跳ねて加速し続け、最後には・・・」

少し溜めて言つた。

咲「貴方の急所を一撃よ。」

壁を跳ね返るナイフは、もはや人の目では追える者ではなかった。

陸「（やばい・・・これほどのスピードじゃ避けることもできないな・・・どうすれば・・・待てよ。）」

陸は少し考え込んだ後、手に持った銃をじつと見つめた。

陸「（・・・こうなったら、駄目元でやってみるか。」

神経を集中して目をつぶり、自身を守るように銃を構える。

咲「何のつもり？まさかこのナイフを見切る気？」

陸「ああ、その通りだな。」

なぜか咲夜に対し、笑顔を浮かべる。

咲「ふ、愚かね。人間ごときにこのナイフを見切れるはずがないわ。」

その時、廊下を跳ね続けていたナイフが、今まさに陸に襲い掛かるうとしていた。

咲「これで終わりよ。」

陸に対して翻って言った。

ナイフは的確に陸の前方から頭部に飛んできた。

だがナイフは何かに刺さるような音は立てずに鋭い音を立てて地に落ちた。

咲「！」

陸の方を再び見ると、両手の銃で頭部をしっかりと守っていた。さっきの鈍い音は銃に当たった音だ。

咲「馬鹿な・・・あのナイフを、ただの人間のあなたがどうやって・

・・」

驚きを隠せず、動揺する。

陸「・・・これでも賭けだったんだ。」

咲「賭け？」

陸「俺の能力は生き物や一部の物にしか意味がない。だからナイフみたいな無機物じゃ使えないと考えていた。だが今あなたが投げたナイフは、壁で凄まじい跳ね返りをしていた。だから考えたんだ。だがこれほどの跳ね返りをすれば、そのナイフ自体が相当な摩擦熱を持つと俺は考えたんだ。まあこれだけのスピードだ。いくら俺でも避けきれぬ自身はない。だったらいつそそれを見切って防いだ方がいいと思ったんだ。」

咲「じゃあ・・・あなたは能力を使ってあのナイフを見切ったと？」

陸「そうなるな。」

咲「く！！でもまだ勝負はついて・・・」

咲夜がナイフを構え直そうとしたが、その時構えた手に軽く何かが当たった。

咲「な！？これは・・・」

咲夜自身の周りに、目で見えるには困難な糸がそこら中に張り巡らされていた。

咲「い、いつの間に!？」

陸「あなたが後ろを振り向いた瞬間、こっちもスペルカードを使ったのさ。」

そう言つてそのスペルカードを咲夜に見せた。

咲「ふ．．．この程度の系で、私をどうにかできると?。」

陸「いやあ、その系だけじゃないんだな、これが。」

咲「え?。」

再び周りを見渡すと、その系の先には何かがついていた。

咲「ま、まさか．．．」

陸の方をまた見る。さすがに汗がにじんでいた。

陸「そのまっさか。」

カードを持っていた手には、今度はパイナッフルタイプの手榴弾が握られていた。

陸「あなたは今、そこを動く事が出来ない訳だ。」

咲「動けないですか．．．そんな物、私の能力の前では無意．．．」

カードをぱつと構えようとしたが、その前に陸の手榴弾が咲夜の目前に飛んできた。もちろんピンは外れていた。

咲「ええ！？ここは少し待・・・」

言い切る前に手榴弾が爆発し、糸についていた手榴弾も誘爆。
陸から咲夜が見えなくなる程の大爆発を起こした。

陸「あなたは、負ける時も完璧だったな。」

爆煙に向かって決め台詞を言う陸であった。

第九章 紅魔のメイド（後書き）

後書き

こんにちわ（こんばんわ）、不定期更新なのは仕方ない澄田です。

今回は正でしたので、今回は陸に戦わせてみました。割愛したのは紅魔館の全体的な所を書き出したかったので。

まあ正と同じく勝った？ってこれじゃまだわかりませんね。とりあえず陸すごいって事で。

正と陸はこれで活躍させたので、後は進だけですな。もちろんそれは次回明らかになるかもしれませんが。

では、第十章をお楽しみに。

第十章 進の思い（前書き）

あらすじ

- 1、五人は紅魔館に入った。
- 2、紅魔館内で色々起きていた。
- 3、陸が咲夜と戦い、勝利？した
ではどぞ。

第十章 進の思い

第十章 進の思い

陸「さてと、この爆発じゃ動ける状態じゃないだろう。正達と合流するか、」

そう言つて爆煙にきびすを返し歩こうとしたが、その爆煙から一本のナイフが飛んできた。

陸「！」

陸は後ろを警戒していたので、そのナイフを寸前でかわした。かわした後に体ごと後ろを振り向くと、そこには体中が焼け焦げだらけになりぼろぼろになった咲夜が、立つのもやつの状態で両手にナイフを構えていた。

咲「・・・待ちなさい・・・」

声も弱弱しく、今にも倒れそうだ。

陸「おいおい、もう決着は着いただろ？そんな状態で挑む気か？」

咲「・・・ない・・・」

陸「え？何て言つたんだ？」

咲「今ここにいてはいけない・・・」

陸「は？どういうことだ？」

咲「あなたは・・・今の紅魔館に・・・他の者がなぜいないか・・・わかるの？」

陸「いや、美鈴も知らないって言ってたから、俺が知る訳ないな。」

咲「妹様を抑える為よ・・・」

陸「抑える？フランはもうおとなしくなってるはずだろ？」

咲「誰にもわからないのよ・・・急に・・・暴れだして・・・」

そう言つて力尽きるようにその場に倒れた。

陸「つて事は・・・正達が危ない!!」

再び振り向き、急いでそこを去ろうとした。
だがえもいわれぬ物が、陸の足を止めた。

陸「（な、なんだ・・・これは・・・）」

確かに背後に気配がある。だが体がそれを見ようとしなかった。

陸「（動け・・・動けよ俺の体・・・頼む・・・）」

固まりきった体を何とか動かし、背後に振り向く。

陸「誰だ!？」

銃を構えたが、そこには倒れた咲夜以外に誰もいなかった。だが気配はまったく消えていない。

陸「・・・フランか！？どこだ！？一体どこにいる！？」

辺りを見渡すが、どこをどう見てもいない。

陸「そうだ！！能力を使えば・・・」

目をつぶって神経を集中させ、辺りを探る。

陸「な・・・馬鹿な・・・こんなことって・・・」

陸が探知した結果、それはすぐ後ろにいた。感じ取った瞬間、陸はそれに襲われた。

その頃、四人はようやくレミリアのいる部屋のドア前にたどり着いた。

美「ここよ。」

正「ふう、やっと着いたか。」

進「長かったねえ。」

美「じゃあ、開けるわよ。」

美鈴がドアを開けると、そこにはふんどし一丁のこーりんがドアから背を向けて立っていた。

こ「やあ、僕とやら・・・」

こーりんが振り向いてはにかみながら言おうとした瞬間に、美鈴が急いでドアを閉めた。

進「ねえ・・・今の・・・」

美鈴を見てドアに指を指す。

美「ごめんなさい、この部屋じゃないわ。」

進の言葉をほぼ無視し、無表情でまた歩き出した。

正「間違えた事より、今の説明して欲しいんやけど・・・」

進と同じように尋ねた。

美「ああ、あれよ。あれがお嬢様の部屋。」

それも完全に無視して廊下の奥のドアを指差した。いかにも感じがするドアだ。

進「ああ、あれね・・・」

もはやあれはなかった事になった。

正「さて、どう説明するかのう・・・」

チ「もうまどろっこしいことは無しよ!!」

正が考えている内に、チルノがドアを蹴破り、先に入った。

美「あ!!」

進「ちょ、チルノ!!」

正「待てやおい!!」

三人が追いかけると、そこには他の部屋とは明らかに違う広く赤い空間が広がっていた。

その奥に、レミリアが恐らくは特製の椅子に悠然と腰掛けていた。チルノはレミリアの結構近くにいた。

レ「あら、こんな時に誰？」

椅子からまったく動く様子もなく、悠然と答える。

チ「誰かしらって何よ!!あたいの顔に見覚えないって言うの!？」

レミリアに指を指して言い放った。

レ「・・・知らないわね。」

少し考えた様な振りをした。

チ「きーっ！！あたいの顔知らないなんて、このもぐり！！」

悔しがってから、再び指を指した。

レ「だから知らないって言ってるでしょ。」

そう言っただけで腰を上げるように椅子から立ち上がった。

レ「あなたみたいなの、一介の妖精風情。」

立っている姿はどう見ても幼いが、部屋を包み込むほどのオーラは、レミリアを何倍にも大きく見せた。

美「ま、待ってください、お嬢様！！」

美鈴がチルノを差し置いて言った。

美「この者達は争いに来たのではありません！！話をする為に来たのです！！」

胸に手を当て言った。

そんな美鈴の思いが伝わったのかどうかはさだかではないが、レミリアが答えた。

レ「そんな事、わかってるわよ。」

美「え？ではなぜ・・・」

言うと同時に、閉められていたドアが派手に吹き飛ばされた。
一同がその方を見ると、そこからぼろぼろになった陸が転がってき

た。

陸は地面に倒れたまま動こうとしなかった。

正・進「陸!!」

二人が駆け寄り、陸を抱きかかえる。

正「おい!!しっかりしろや!!」

陸の体を起こすように揺らした。

陸「う・・・正・・・進・・・」

進「何があつたの!?陸!!」

進は目に少し涙を浮かべていた。

陸「さすがに・・・相手が悪かったな・・・進・・・あいつは・・・」

そう言いかけて、陸はふつと意識を失ってしまった。

正「陸!!どないしたんや!?陸!!」

意識を失った陸に対して必死に話しかけるが、陸はまったく反応しない。

そんな中、壊れた扉から誰かが入ってきた。

？「あのお兄ちゃん、どこかな?ここにいるのかな?」

その者は、無邪気な顔をしたフランだ。

正「おい・・・」

立ち上がり、フランを睨みつける。

フ「あ、見つけた見つけた」

陸を見つけて言った。

正「フラン・・・まさか・・・お前がやったんか・・・」

拳を握り締め、更に睨みつける。

フ「だって、誰も私と遊んでくれないもの。だから外からの人だつたら遊べると思ったの。それなりに面白かったけど、やっぱり駄目ね。すぐに壊れちゃった。きやはははは」

無邪気に淡々と言った。陸を傷つけた事などまったく気にしていない。

正「お前え・・・」

正がフランに殴りかかろうとする前に、レミリアが目にも留まらぬスピードでフランに襲い掛かった。

そしてレミリアとフランはつばぜり合いの状態になった。

レ「何をやっているか、わかっているの？フラン。」

フ「わかってますわよ、お姉様」

レ「あなたはまだ能力を制御出来ない。だからおとなしくしていなさいと、あれほと言ったでしょう？」

フ「だってえ……」

そう言いながら、レミリアの背後に魔方阵を敷いた。

フ「それじゃつまらないもの!!」

そう言ったと同時に、魔方阵から攻撃を繰り出した。

レミリアは完全に予測していたかの様に上空に飛んで避ける。フランもレミリアと対峙するように、上空に出た。

レ「どうやらお仕置きが必要みたいね。フラン。」

そう言いながら、フランに対し構える。

フ「やったあ、お姉様が遊んでくれるんだ」

フランも同じく構える。

そして、二人は上空で凄まじい弾幕戦を始めた。

圧倒的スピード、弾幕、刹那に見える二人の姿も相まって、その光景はまさに一枚の絵のようだった。

正「レベルがちゃう……こんな……今のわしに出来る訳ない……陸はこんな相手にしてたんか……」

ただ立ち尽くし、その絵を傍観するしかなかった。

フ「あはははは！！やっぱり楽しいよ、こつやって自由に暴れるの
！！」

そう言つて右手に溜めた力をレミリアの方に放った。
だがレミリアは圧倒的スピードでフランの後ろに回りこんだ。

レ「何を言っているの、フラン？」

そのまま右手に槍を形作つた。

レ「これはお仕置きよ、フラン。」

形作つた槍を凄まじい速度でフランに投擲した。

レ「神槍 スピア・ザ・グングニル！！」

槍は振り向いたフランに刺さり、そのまま壁までフランごと飛んで
行った。

フランは壁に突き刺さつたままぐったりとしていた。

正「お、終わったんか？」

槍が刺さつたフランを傍観していると、フランの体が消え、一枚の
トランプとなつた。

レ「な、これは・・・」

するとレミリアの周りを囲むように、三人のフランが姿を現した。

フ「残念でした お姉様。」

三人が同時に喋り、声が重なる。

レ「これは・・・フォーオブアカインド・・・」

フ「ふふ、その通りだよお姉様」

そう言つて三人のフランが一斉にレミリアを攻撃し始めた。

レ「く！！まずいわね・・・このままだと・・・」

容赦の無い攻撃を避け続ける。

レ「本体は・・・」

三人のフランに目を配っていく。

その内の一人を、レミリアは本体だと判断した。

レ「あれね！！」

攻撃を回避し、本体に攻撃を仕掛ける。

レ「終わりよフラン！！」

攻撃を構えたが、そのフラン自身も攻撃を構えていた。

フ「さっすがお姉様、もう見破っちゃったんだ」

そう言つて右手に、凄まじい刀身を作っていた。
いつの間にか他のフランは消えていた。

レミリアがそれに気づいた時には手遅れだった。

フ「でも、私の方が早かったね」

そのままそれをレミリアに振りかぶった

フ「禁弾 レーヴァティン!!」

レミリアはそれをガードしたものの、そのまま吹き飛び壁に叩きつけられ、床まで落ちていった。

レ「・・・く・・・この私が・・・」

伏したまま言った。

そこにフランがやや距離を置いて降りてきた。
その時、正達は少し距離を置いた所にいた。

正「ど、どないしたらええんや・・・」

美「私では、止めることはとても・・・」

チ「へん!! 喧嘩なんてしたい時にやらせとけばいいでしょ!!」

進「・・・」

無言でレミリアとフランをじつと見据える。

正「進？」

進「正、チルノ、美鈴、何があっても最後まで絶対手を出さないで。」

」

美「何の事よ？」

進「僕が・・・フランを止めてくる！！だから絶対手を出さないで！！」

そう言つてフランの方に走つていった。

正「おい、進！！」

進の後を追つた。

その頃、フランはゆっくりとレミリアの方に歩み寄っていた。

フ「ふふ、私の勝ちねお姉様　お姉様でも私に勝てないんだ・・・
まあいいや。」

レミリアのすぐ近くまで来て言つた。

フ「これから外で、遊んでくれる人を見つけに行くから。じゃあね、お姉様。」

一瞥をして、そのままそこを去ろうとした。

その時、レミリアが動きそうにない体を奮い立たせていた。

レ「待ちなさい・・・」

フランはその声を聞いて振り向く。

レ「あなたを・・・外に出すわけには・・・」

体を何とか支えながらフランに近づいた。

フ「そんな状態で、私を止める気なの？」

見下した目でレミリアを見下す。

フ「もういいよ、無理して立たなくても。」

再び攻撃を構える。

フ「またそこで寝ててよ。」

今まさにレミリアにその攻撃を放とうとした。
だがその攻撃を止めるような声がした。

進「・・・かしいよ。」

進がフランのすぐ後ろまで来ていた。

フ「ん？誰？」

その声に反応して矛を収め、後ろを振り向いた。

進「おかしいよ・・・たった一人の家族を・・・平気で傷付けるなんて・・・」

拳を握り締めてフランを見据える。

フ「何よ、あなたに何がわかるって・・・」

進「わからないよ!!」

フランの言葉を遮るように大声で言った。

進「君の今までの事なんて、僕にはわからないよ!!でも・・・一人しかいない家族を・・・君は・・・何だと思ってるんだよ!!」

顔を上げてフランを見つめた。

だが、フランは無言で右手を振り、進はそれによって吹き飛ばされ、倒れた。

フ「うるさいなあ・・・黙っててよ・・・」

虚ろな目で進を見下す。

進「・・・黙らないよ・・・陸が言おうとしてんだ・・・君がさびしそうにしてたって・・・」

立ち上がり、フランに近づく。

フ「ただの人間が・・・一体何だって言うのよ!!」

弾幕を放ち、進の周りを撃つ。

だが進は立ち止まる事なく、フランに近づく。

進「君は・・・遊びたいだけなんだろ・・・だったら・・・誰かを傷つける必要なんてないじゃないか・・・」

その声に、フランは思わず怯んだ。

フ「だって私は・・・何かを・・・誰かを傷つけなきゃ・・・遊べないもの・・・」

立つたまま俯いた。

進「大丈夫・・・君なら出来るよ・・・誰よりも・・・素直な君なら・・・」

俯いたフランに笑顔で接する。

フ「素直・・・」

その言葉にふと過去の記憶が蘇る。

その記憶は、フランがレミア達に見守られながら庭で遊んでいた記憶だ。

その時のフランは、まだ能力などに意識を持っていなかった。

だからこそ、素直な気持ちで遊んでいたのだ。

その意識こそ、フランが長い時の中で忘れていた事なのだ。

フランは進の言葉を聞いて今その事を思い出したのだ。

フ「・・・こんな能力・・・私は・・・持ちたくなかった・・・」

その場で泣き始めた。

その様子に、進があやすように接した。

進「そんな事ないよ・・・君の能力は・・・君の個性だよ・・・だから・・・持っているべきなんだよ・・・」

フ「でも・・・」

進「君が・・・素直な気持ちでいれば・・・周りは自然と優しい
気持ちでいてくれる・・・そうすれば・・・誰も傷つけないよ・・・

」

フ「・・・私に、できるの？」

顔を上げ、進を見つめる。その目には涙が残っていたが、もう泣いてはいなかった。

進「うん・・・君なら・・・で・・・」

言おうとしたが、その場で意識を失い倒れてしまったのであった。

第十章 進の思い（後書き）

後書き

こんにちわ、友達のアドバイスにより時間差で投稿してみました澄田です。

この話の山場の一つですので、個人的には言い出来だと思ってます。友達からふと、台詞が多くね？とか、中身薄くね？とか言われたので、いつになるかわからない次回作では頑張ってみたいです。

まあそれは置いといて、わしの友達は評価ではなく感想をいただいてもらっていたらしいのです。珍しいパターンですね。

わしも負けないように頑張っていきたいです。見てる人はちゃんといてくれるようなんでそれがわしの動力源です。

さて、持久力のない友達は第四話書いて死に掛けているのを尻目に、わしはこれを投稿させていただきます。

では、第十一章をお楽しみに。

第十一章 第二の目的地（前書き）

あらすじ

- 1、四人はレミアアに会った
- 2、フランが色々暴れた
- 3、進がフランをなだめて気絶した

ではどぞ。

第十一章 第二の目的地

進が目を覚ますと、進は少し広めの部屋のベッドで寝かされていた。上体を起こし、周りを見ると、左右にさっきまで誰かが寝ていたような跡があるベッドがあった。

進「あれ？僕って確か・・・」

とりあえず自分の中で今までの事を整理する。

進「えーっと、レミリアとフランが喧嘩して、フランになんか色々言って、それから・・・」

正「そつから先は、わしが教えたるわ。」

進が考えている所に、いつの間にかいた正が話しかけてきた。

進「正！！」

驚愕と感嘆の混じる大声で言った。

正「おーおー、一晩寝ただけあって元気やのう。」

やや呆れた様子を見せる。

進「ねえ、今まで何があったの？」

正「ああ、それはお前が倒れてもったところから説明するぞ。」

進「うん。」

正「が進の隣のベッドに座り、話し始める。」

正「お前が気絶した時、わしはお前の後ろにおつてな。で、わしがお前の様子を見て、意識が飛んでる事を確認したんや。」

進「そうだったんだ。」

正「お前が言ったとおり、みんなお前の邪魔せんかったやろ?」

進「そう言えばそうだね。」

正「その後、レミリアに進と陸の手当てを頼んでのう、レミリアはフランを止めた礼って事で美鈴と一緒にお前らをここに運び込んで、紅魔館で手当て出来る奴が来てくれた訳や。」

進「え?手当てってどこを?」

自分の体に手を当てまわすが、それらしい物はない。

正「ま、大したもんやなかったから、結局寝かしただけになったわ。」

進「で、そのまま一晩過ごしたの?僕達。」

正「そうや、まず最初にわしが起きて、ちよいと紅魔館散歩したわ。」

進「じゃあさ、陸は?」

正「陸か？あいつやつたら、確かフランと・・・」

進「フランと？」

正「うん、ちょっとうる覚えや。まあお前はもう目覚ましたし、そこに連れてつたるわ。」

進「うん。」

そう言つて二人がベッドから立ち上がると、ドアが大きな音を立て、蹴破られたように開けられた。

正「誰・・・」

振り向いた瞬間、正の顔にチルノの足の裏がめり込んでいた。

チ「竜巻旋？ー脚！」

蹴られた反動で正は壁まで吹っ飛んで行った。

進「・・・」

あまりに突然すぎる出来事に呆然とする。

チ「ドア越しに話は聞いたわよ！！」

飛んで着地した体勢から、いつもの体勢に戻る。

チ「道案内なら、あたいに任せなさい！！」

そう言って進の手を掴み、部屋から強引に引つ張っていった。

進「ちょ、チルノ！！待って待って！！」

チルノは進の言う事をガン無視し、気がつけば二人は陸とフランのいる部屋の前に着いた。

チ「さあ、ここよ進！！」

後ろにいる進を見て部屋のドアに左手を向ける。

進「・・・えーっと・・・」

チルノの顔を見て少し考えた後、

進「ありがとう。」

感謝をした後、ドアをノックもせずに入った。

進「陸、フラン。」

ドアを開けると、陸とフランがテーブルに向かい合い、座っていた。テーブルにはティーカップが置かれていた。

陸「お、やっと起きたか進・・・」

と言い切る前にフランが進に飛びついていった。

フ「進！！」

進に抱きつくフラン。

進「あわわわ!？」

勢いあまってそのまま後ろに倒れこんだ。

フ「ずっと心配してたんだよ進!!怪我とかしてない!？」

進に馬乗りの状態で尋ねてきた。

進「ちょっと・・・どいて・・・」

苦しそうな顔で言った。

フ「あ、ごめんなさい。」

ぱつと進からだいた。

陸「ははは、お前の周りはいつもこうだな。」

進「陸!怪我とかしてないの?」

陸「ああ、俺自体は別にな。先に起きてフランと話をしてたんだ。」

フ「私、進のいる部屋にいようかなって思ったんだけど、お姉様が進が起きるまではこの部屋にいなさいって言われて、ここで待ってたんだ。」

進「そうなんだ。」

陸「それにしても、あのフランが素直に言う事聞くななんてなあ。大したもんだよ進。」

進「え？あの時陸は確か・・・」

陸「その事だったら、正から聞いてるよ。」

進「だったら、陸は・・・」

陸「なーに、この世界じゃしょっちゅうになるだろこれぐらい。それより・・・」

進「それより？」

陸「フランの相手してやれよ。」

そう言われて進はフランの方を見た。

フ「ずっと待ってたんだもの、遊んでよ。」

進「うん。」

笑顔でそう言ったと同時に、廊下からかなり声が聞こえてきた。

チ「何よ！！竜巻旋？脚を喰らった事は名誉な事じゃない！！」

正「全然名誉な事ちゃうやろうがあー！！」

ドアが開き、二人が絡み合ったまま転がってきた。

陸「おいおい、何やってんだ二人して？」

その声を聞いて、正とチルノが組み合った体勢を外し、立ち上がった。

正「さっきこいつがわしの顔面にキックしてきたんじゃない！見ろやこの顔！！」

その顔にはチルノの足の裏の跡がくつきり出来ていた。

チ「違うわよ！！竜巻旋？脚よ！！」

意味不明な反論をする。

チ「それよりあんた！！あたいをほっというて遊ぼうだなんて、聞き捨てならないね！！」

そう言つてフランの方を指差した。

フ「あなたも遊びたいの？」

チ「当たり前でしょ！！遊びも天才サイキョーのあたいだよ！！」

進「じゃあ、みんなで遊ぼうか！！」

フ&チ「うん！！」

正「おい、ちょっとま・・・」

と言いかける前に、陸に首根っこを掴まれた。

陸「はいはい、邪魔者は去りますかな。」

そのまま正を引きずりながら部屋を後にした。

正「待てや陸！！わしはあいつに言いたい事が・・・」

引きずられながらも言うが、陸が遮る。

陸「まあ、お前の気持ちはわかるが、お前にはやる事があるだろ？」

引きずるのを止め、お互い立って見合う。

正「やる事？ああ、あの事か。」

陸「お前が言い出したんだ。お前で話をつけろよ。」

正「わかつとるわ。」

陸「で、あの子はどこにいるか、わかっているのか？」

正「あ、そう言えばそやのう・・・」

陸「おっと、正、後ろ。」

正「ん？」

そう言われて後ろを振り向くと、そこに美鈴がいた。

美「私をお探しで？」

少し皮肉めいた風に言ってきた。

正「はは、そうやで。」

苦笑いを浮かべる。

陸「じゃあ、これから話をつけに行くか。」

三人はレミリアのいる部屋に向かった。

少年達移動中……

正「おーい、レミリア、話があるんや。」

レミリアのいる部屋のドアを開けると同時に言った。

そこには初めて会った時と同じ感じで座っているレミリアと、その隣に咲夜がいた。

レ「あら、もうお目覚めになつて？」

陸「まあな。」

咲「で、一体何の用ですか？」

正「いやのう。昨日はあんな事になったからそれどころやなかったんやけど、わしらの目的はちゃんとあるんや。」

レ「何？」

美「それは私が言います。」

咲「美鈴・・・そう言えばあなた、昨日は様子がおかしかったわね？」

美鈴を軽く睨む。

美「はい、実は言いますと・・・」

レ「彼らについて行きたいのね？」

見透かしたような一言を言い放った。

美「はい、そうで・・・って、え？なぜお分かりに？」

不思議そうな顔で尋ねた。

レ「私を誰だと思っているのよ？」

陸「さすがだな。」

正「ってことやから、あんたの許可が貰いたいんや。」

咲「馬鹿な、中・・・美鈴は仮にもこの紅魔館の門番。そうやすや

すと・・・」

遮るようにレミリアが言った。

レ「いいわよ。」

正「おお、話が早いわ。」

咲「な！？お嬢様、そのような判断を下してよろしいのですか？」

レミリアに食いかかるように言った。

レ「門番ぐらいなら、ある程度どうにでもなるでしょう？」

咲「しかし・・・」

レ「もう齒車は回りだしているのよ、これはその一つよ。」

咲「・・・わかりました。お嬢様がそう言うのであれば。」

陸「齒車？」

レ「気にしないでいいわ。こつちの話。」

正「よっしゃ、これで交渉成立やのう。」

美「そうですね。」

陸「じゃあ、進達を呼んでくるか。」

正「そうやのう。」

しばらくして、進達もレミリアの部屋に集まり、地図を広げて全員が座って話し合っていた。

陸「さてと、次の目的地はどうする？」

正「距離的に言っんやったら・・・人里やのう。」

進「人里か。」

美「ここなら、私も何度か行った事がありますね。」

チ「よし、悪は急げね！！」

正「それ言っんやったら、善は急げや。」

陸「じゃあ、次はここに行くとするか。」

一同「おう！！」

全員が立ち上がり叫んだ。

少年達移動中・・・

しばらくして、紅魔館のロビーにて全員が身支度を始めていた。それをレミリア、フラン、咲夜が見送る。

フ「もう行っちゃうの？進。」

不安そうな目で進を見る。

進「ごめんねフラン。でもまたここに来るよ。」

フ「本当に!？」

進「ああ、約束するよ。」

チ「あたいもね!!」

割り込むように入ってくるチルノであった。

咲「あなた、今度戦う時は油断も手加減もしないわよ。」

そう言いながら、陸を見据えてきた。

陸「はは、その頃には俺はもっと強くなってるよ。」

自身に満ちた顔で言うのであった。

正「次は人里か。」

美「あなた達は、まだ人里には行った事はないの？」

正「ああ、なんせこの世界来てまだ2日目やからのう。」

美「それでよく、この紅魔館に来ようなんて考えたわね・・・」

やや呆れた顔をする。

正「ええやんけ、それで新しい仲間できたんやし。」

そう言つて美鈴の肩を叩く。

美「・・・先がちよつと不安ね。」

軽いため息を吐く美鈴であつた。

陸「よし、挨拶はすんだな？じゃあ行くぞ。」

こうして5人は陸を先頭に紅魔館を後にした。

5人が見えなくなるようになった頃、見送つていたレミリアと咲夜の元に、パチュリーが息を切らして走ってきた。ちなみにフランは部屋に帰っていた。

咲「どうしました、パチュリー様？」

その声が聞こえていないのか、無視してレミリアのすぐ近くまで来た。

パ「レ、レミィ・・・少し話があるわ。」

息切れ気味に言ってきた。

レ「何？」

パ「ほら、フランが暴れた原因よ。」

咲「あれでしたら、別段理由があるとは・・・」

咲夜の声を遮るように言う。

パ「それがね、ちょっと怪しい噂があるのよ。」

レ「噂？」

パ「さつき文の新聞が届いたんだけど、その新聞にここ最近幻想郷の各地で規模こそ小さいけど色々と事件が起こっているって書いてるのよ。」

そう言って二人に新聞を見せる。

咲「それが、妹様とどう関係性が？」

パ「その事件の中に、人が変わったように暴れたってたつてのがあるのよ。」

レ・咲「！」

パ「どう？おかしいと思わない？フランは最近までおとなしかった。けど昨日急に暴れたした。これ、まったく関係ないとは言えないわ。」

レ「そうね・・・」

咲「では、まさか紅魔館にその犯人がいると!?!」

パ「そうとは限らないけど、何かしらの跡はあると思うわ。」

レ「・・・フランに聞いてくるわ。咲夜、行くわよ。」

咲「は!!」

そのまま三人は、フランのいる部屋に向かった。

その頃、紅魔館の屋上に何かがいた。

?1「あらら、失敗しちゃったか。」

?2「思ってもない来客だね。」

?3「招かれざる客だ。」

?1「でも、昨日の様子からすると・・・」

?2「え?もしかしてこのお客が?」

?3「だしたら話は別だ。丁寧にもてなそうか。」

?1「それもいいけど、今はまだ歓迎の時間じゃないよ。」

？2「そうそう、他のお客さんにまだ招待状を配ってないもんね。」

？3「誰もいない歓迎会では、あまりに無粋。」

？1「ふふ、だからこそ準備をしなきゃ。」

そう言つと、その者達はそこから消えるように去っていったのであった。

第十一章 第二の目的地（後書き）

後書き

不定期更新は変わりません。澄田です。

紅魔館編、堂々の完結でございます。何か妙なのが出てきましたね。

この後は割と長かった気のする人里編に入ります。紅魔館編とは違った面白さもあるので、是非期待しておいてください。

では、第十二章をお楽しみに。

第十二章 謎の助兵衛（前書き）

あらすじ

- 1、進、フランとチルノと遊ぶ
- 2、美鈴の勧誘に成功
- 3、5人は人里に向かった

ではどぞ

第十二章 謎の助兵衛

第十二章 謎の助兵衛

五人は日が昇ってそれなりに時間の経った昼ごろに、人里に向かって歩いていった。

陸を先頭に正と美鈴が続き、少し後ろで進とチルノとしゃべくつていた。

陸「お、ようやく見えてきたな。」

そう言う陸の前には、それらしい人里が見えてきた。

正「案外早く着けそうやのう。」

美「そうですね。」

チ「あたい、お腹空いてきたあゝ」

わかりやすく、腹に手を当てる。

進「朝、おかわり三回もしたのに？」

チルノを呆れた顔で見る。

チ「空いたものは、すいたのおゝ。」

美「まあまあ、着いたら少し早いですがどこ飯にしませんか？」

チ「やったあ！！ご飯ご飯」

飛んで喜ぶチルノ。

進「僕もさんせーい。」

陸「それはいいな。」

正「わしもええで。」

美「では、満場一致でお昼にしましょう。」

そして五人は、気がつけば美鈴を先頭に人里へと入っていった。

進「わぁ・・・結構大きいね。」

町並みを眺める五人。。

正「ほんまやのう。結構活気もあるし。」

陸「じゃあ美鈴、案内頼むよ。」

チ「えゝ？あたいがやるゝ。」

正「お前にやらせたら、こんなところですら迷いかねんわ。」

チ「こんなところで迷うはずないでしょ！！」

癪癪を立てる。

美「あはは、さっき言ったとおり、まずはご飯にしましょう。何か希望はありますか？」

進「僕、カツ丼がいい。」

正「わしは、クロワッサンサンドがええのう。」

陸「こんな時は蕎麦なんていいな。」

チ「あたい、冷麺！！」

陸・正・進・美「いや、無いから！！」

全員が並列に突っ込む。

そんな全員の突っ込みを無視し、我先へとどこかへと向かった。

チ「あたい、あの店がいい。」

そう言つて、店が並んでいる一店を指差した。

その店先には、冷麺始めました！という張り紙が張ってあった。文字通り時が止まっているような店だった。

陸・正・進・美「あつたのね・・・」

呆れて、呆然となる四人。

チ「じゃあ、冷麺に決定ね」

誰が決めた訳でもなく、すぐさま店の扉を開けようとする。が中々開かないようだ

正「こんな時期や、しまってるんやろ？」

疑った顔を浮かべる。

美「そうですね。冷麺ですしね。」

だが、チルノが聞いている様子は無かった。

チ「この扉あ・・・開かないiiiiiii!!」

がたがたと力を入れ続けていると、扉が外れ勢い良く扉が空を舞った。

そしてそれは誰かの頭に命中した。当たった者はその場に扉と一緒に横になった。

陸・進・正・美「あ!!」

全員がその方を見た。そしてその誰かは、見ている内に立ち上がった。

陸・進・正・美「（あれは・・・）」

全員が思わず沈黙した。

その者は、チルノの方に歩み寄っていった。

チ「え？どうしたの？そんなにあたいを見て？」

その者に対して首を傾げる。

？「扉を吹っ飛ばしたのはあ・・・お前か？」

その声色は明らかに不機嫌だった。

陸・進・正・美「（慧音だ・・・頭にたんこぶがある・・・当たったんだあれ・・・）」

全員の視線が、慧音の頭に出来たたんこぶに奪われる。その者とは慧音だったのだ。

チ「扉？あたい、そんなの知らないわよ。」

慧音から視線を明らかにそらした。

慧「嘘は駄目だぞ？」

笑顔で今にも切れそうだ。

チ「へん！！そんなの知らないって言ってるじゃない！！」

開き直り、声を荒げる。

慧「そうか、まだ嘘をつくか。ならお仕置きが必要だな！！」

そう言つて、切れマークを笑顔に浮かべて両手の指を鳴らし始めた。

チ「ふん！！このさいきょーのあたいと勝負するって言つて言つての！？あんなバカね！！」

慧音お仕置き中……

チ「うゝ、このさいきょーのあたいがボコボコにやられるなんて・
・」

頭突きを十回程喰らい、チルノは完全にノックアウトした。

慧「これに懲りたら、嘘をついたら駄目だぞ。」

機嫌がよくなったのか、さつきと違い声色は普通だ。

チ「ううう、わかったわよ……」

そう言つて、涙目で頭に手を当てる。頭にはバツテンの包帯のような物があった。

進「チルノ、大丈夫かい？」

歩みよつてチルノに尋ねた。四人はどうやら高みの見物をしていたようだ。

チ「ううう、頭痛いわよ!!」

八つ当たりに近い感じで、いかった声を上げる。

正「ま、こいつにはええ薬や。」

陸「それもそうだな。」

ちよつと距離をおいて言った。

慧「おや？君達がこの子の・・・」

声を聞いて陸たちを見る。

陸「保護者です。」

慧「だったら、君達がこの子をすっかり見なきゃ駄目だろ？」

二人に歩み寄る。

陸「いやあ、実はですね、こいつが悪いんですよ。」

そう言つて正を差し出すように前に出した。

正「え？またこのネタ？」

慧音の前に出され、戸惑う。

慧「む、そうだったのか。じゃあ・・・」

急に雰囲気が変わった。またもや怒りモードに入つたようだ。

慧「覚悟は出来てるだろうな！！」

さつきと違い、マジで怒つた顔をしてきた。

正「あれ？これって、洒落で済まない気が・・・」

額に冷や汗が出てくる。

慧「問答無用！！」

慧音の頭突きが正の頭にクリーンヒットした。

正「ぐわあああああ！！！！！！」

倒れた後、その辺りを転げ回った。

陸「まったく・・・」

転げる正に向けて、冷たい反応をした。

慧「君も保護者なら、しっかりとしなきゃ駄目だろ？」

陸「はい、以後気をつけます。」

白々しい笑顔で返した。

慧「じゃあ、吹っ飛ばした扉を付け直してもらっからな。」

そう言って倒れている扉を指差した。

陸「わかりました。美鈴、手伝ってくれ。」

美「了解です。」

そう言つて扉の方に駆け寄り、それを外れた所に持つて行き、そのままがたがたと付け直した。

陸・美「これでいいですか？」

慧音に確認を取る。

慧「ああ。」

OKのサインを出した。

陸「そう言えば、あの店は、貴方と何か関係があるんですか？」

慧音に歩み寄つて尋ねた。

慧「一応な・・・」

そう言っていると、美鈴が陸の方に駆け寄つてきた。

美「せっかいですから、ここでごはん取りましょう。」

陸「ああ、それはいいが、この店は今やっているのか？」

慧「それは・・・」

少し考えていると、美鈴の脇の間から手が出てきて、美鈴の胸を揉んできた。。

？「お、この辺じゃ珍しく発育のいい子だね」。

美「！！！！」

顔を真つ赤にして、後ろにいる者に裏拳を見舞ったが、その者はひよつと後ろに飛んで裏拳をかわした。

？「おつと、腕っ節もいいね。」

その者は、頭は頭巾のぐるぐる巻きにドテラ、はかま姿をしたちよつと渋めのおっさんだ。

慧「おいK！またやったのか！」

慧音がその者に怒鳴った。

K「ははは、これも幻想郷の女性の未来の為って奴だ。」

高らかに笑っていると、怒りをあわらにした美鈴が走ってきた。

美「乙女の胸を鷲づかみにしておいて笑うなんて・・・許しません！！！」

その乙女？はKに本気のパンチを見舞ったが、Kはその場から消え、パンチは空を切った。

美「な！？」

その者はまたもや美鈴の後ろに回り、今度はウエストとヒップを触った。そしてすぐさま後ろに飛んで距離を取った。

K「お、ここも中々・・・」

そう言つて地面に着地すると、Kの頭に陸の拳銃の銃口が突きつけられていた。

陸「おい・・・」

どすの利いた声を出した。

Kはその気迫に押されて、両手をあげる。

陸「あなたはもしや、彼女のスリーサイズを測っていたのか？」

K「ああ・・・そうだが・・・」

陸「だったら・・・」

少し溜めてこう言つた。

陸「是非とも俺に教えてください。」

進「ぼ・・・僕も・・・」

今までにない真顔で二人は言つた

美「おういいいいい！！！！！！」

美鈴がブロントさんばりの声を張り上げたのであつた。

第十二章 謎の助兵衛（後書き）

後書き

こんにちわ（こんばんわ）。前との空きはあんまりない気がする澄田です。

最近真剣なのばかりだったので、たまにはギャグもありかなって事でやりました。

でもってオリジナルキャラ、Kを登場させました！

これはあくまでわしのオリジナルキャラですので、他の所にはいませんよ。

このキャラについてはまあ追々で。

次回は結構面白いノリですよ。

では、第十三章をお楽しみに。

P / S 友達からの連絡で添削しました。

第十三章 見えざる者と見通す者（前書き）

あらすじ

- 1、五人は人里についた
- 2、チルノと正が慧音に怒られた
- 3、すけべおっさん、Kが登場した。

ではどぞ

第十三章 見えざる者と見通す者

第十三章 見えざる者と見通す者

少しして、彼らはKの店で冷麺を堪能した後、よくある畳の上で各々が座つて会話を交していた。

陸「いやあ、こんな時期でもうまいもんだな。」

進「うん、そうだね。」

笑顔の頬にはすぐにわかるビンタの跡があった。

K「おう、そうだろ?」

皿を片付けているKの頬にも、同じくビンタの跡がある。誰の物かは言うまでもない。

美「まったく・・・これですから男の人は・・・」

ぶつぶつと不満な顔を浮かべる。

慧「何、男は全員こういう物じゃないぞ。」

美鈴をなだめる。

正「むしろ、女の方が怖いわ。」

不機嫌な顔の鼻には、バツテンの形ののテープがついていた。

進「でも、それだけで済んでよかったじゃん。」

正を察していった。

チ「そうよ！！あたいなんて十発も喰らったのよ！！」

だが傷らしき物はもうない。さすがは妖精の回復力である。

正「わし、お前ほど再生力ないし。」

呆れたように言う。

チ「当然よ！！あたいがさいきよーなんだから！！」

その場で立ち上がって言い放った。

陸「さて、食事が済んだ所で、この里を歩き回ってみるか。」

立ち上がり、全員を見て言った。

正・進・チ・美「おう！！」

全員が威勢のいい返事をした。

陸「じゃあKさん、勘定で。」

そう言ってKに代金を渡した。

K「まいど。」

代金を渡した後、そのまま5人はそろそろ店を後にした。

5人がKと慧音から見えなくなる程になって、Kが口を開いた。

K「しかし、まさかこんな時に客が来るなんてねえ。」

慧「そうだな、こんな時期に来るなんて珍しい物だ。」

K「・・・慧音、あの噂、聞いてるか？」

少し溜めてから言った。

慧「噂？」

K「ここん所、妙な事ばかり起きてるって奴さ。何かまた問題でも起こす奴が出てきたのか？」

慧「さあ？私はただの一教師・・・問題解決は担当外だ。」

K「ただの教師って、よく言うねえ。」

慧「むしろ、そういう事はお前がやった方が合ってそうだが？」

K「勘弁してくれよ、俺はもうおとなしくするって決めたんだ。」

慧「本心はどうだ？」

K「・・・そりゃあ・・・まあ・・・」

悩み、戸惑った。どうやら慧音の質疑がKの本心に届いたようだ。

その様子を察した慧音は、こんな事を言った。

慧「・・・正直じゃないな。」

K「まあ、本心を言つと、ここに何かあつたらとか考えちまうからさ。」

そう言つて外の町並みを見渡した。

慧「おや、おまえにそんな心があつたとは。」

K「そりゃちつとはある。ここの人たちには結構世話になってるし、それに・・・」

そう言つて慧音の方を真つ直ぐ見てきた。

K「お前さんに何かあつたら、心配なんだ。」

慧「な・・・」

Kの思わぬ発言に、顔を赤らめる。

K「ははは、最近どうも発育のいい子が少ないから、お前さんみたいな貴重なんだよ。そういう意味なら、さっきの子とかも中々・・・」

と笑っている顔に、慧音の頭突きが見事に入り、店内どころか外にまで響く悲鳴がしたのであった。

その頃、5人はのんびりと里を歩き回っていた。

正「わりかし、古い感じやのう。」

進「僕らの世界とは大違いだね。」

美「パチュリー様に聞いた事があるんですけど、幻想郷は外の世界より、魔法が発達していないからだそうです。」

正「魔法？わしらの世界に魔法なんてないで。」

陸「この場合、魔法ってのは科学技術の事だろ。」

正「ああ、なーる。」

陸「で、パチュリーが言いたいののは、幻想郷は科学者とか研究者が少ないから、文明があまり発達しない。だから俺達の世界より時代的な所が古いんだろうな。」

美「その通りです。」

そんな会話を交していると、後ろにいた進が陸達に呼びかけてきた。

進「あの・・・ちょっと・・・」

正「どうしたんや？」

三人が後ろを見ると、進の隣にいるチルノが、全身を真っ赤にし、シュッと湯気を出してばたと倒れていた。

美「ええ！？一体どうしたんですか！？」

美鈴がチルノに駆け寄る。

正「これって・・・もしかして知恵熱か？俺達の話が難しすぎたみたいだな。」

考え込んで言ってきた。

進「言ってる場合じゃないよ！！このままじゃチルノどうなっちゃうの！？」

不安そうな声を出す。

陸「多分・・・溶けるんじゃないかな？」

進「ええ！？そんな・・・どうすれば・・・」

美「・・・治す方法は、あると思います。」

正「それって、もしかして・・・」

陸「永遠亭だな。」

美「はい、あそこなら、恐らく治せない薬はないかと。」

正「それはええけど、場所知ってるんか？」

美「私はちよつと・・・」

陸「あれは・・・」

そう言つて少し遠くを見つめた。誰かを見つけたようだ。

陸「進に美鈴、今から宿を探してチルノを看病してやってくれ。正は俺についてこい。」

みんなに指示を出す。

正「へ？いきなりどうしたんや陸？」

陸に問いただす。

陸「今は時間がない。急ぐぞ！！」

と言つたかと思うと、陸は走り出していた。

正「ちょ、まてや陸！！」

陸を追いかける。

陸の走る先に、白色の長い髪をした女性が立っていた。

陸「あなたは・・・妹紅ですね。」

陸がその女性に話しかけた。

？「ん？誰だ？」

後ろを向いていたので、陸の方に振り返った。その者は陸の言ったとおり、あの妹紅であった。

陸「やはりそうでしたか。」

妹「だから、お前誰だ？」

そう言っていると、正も駆けつけてきた。

正「おい陸、急に走りおって・・・一体どうしたん・・・あ、妹紅や。」

妹紅をに気づいたので、それとなく反応した。

陸「挨拶が遅れて申し訳ありません。俺は戦動 陸と言います。そしてこいつが拳武 正です。」

一例をし、紹介をした。

妹「で、そんな初対面なお前達が、あたしに何の用？」

陸「実は言いますと、永遠亭までの案内を頼みたいのです。」

妹「ああ、あそこまでの案内か。わかった。案内してやるよ。」

陸「本当ですか。」

正「さんきゅ。」

顔を上げる二人。

妹「じゃあ、すぐに行くよ。」

陸「はい。」

そして三人は人里を後にし、永遠亭に向かった。

少年達移動中・・・

妹紅の案内の元、竹林を進んでいく二人。

妹「ああ、あれだよ。」

そうこうしている内に、少し遠いが二人の前にあの永遠亭が見えてきた。

陸「あれか・・・」

遠くから永遠亭を見る。

妹「じゃあ、あたしはこれで帰らせてもらっよ。ここにはあんまり長居したくないからね。」

そう言ってその場を去っていった。

陸「ありがとう。」

正「すまんかったの。」

後ろ姿に感謝の言葉を言った。

妹紅は返事代わりにそのまま右手を上げて答えた。

そして、妹紅は竹林の中に見えなくなった。

正「よっしゃ、そんじゃ永琳に薬もらいに行くか。」

そう言つて、永遠亭に向かって歩き出した。

陸「おい、この辺りつて確か・・・」

正の足元を見る。そこにはあからさまに怪しい色をした草があった。

正「え？何が・・・」

言いかけた時に、正は落とし穴に落ちてしまった。

陸「正！！」

陸が駆けつけると、草木とともに埋もれている正がいた。正は意識を失ったようだ。

陸「おいおい、早速か。お前は昔っからこういつのに・・・」

と呆れていると、どこからかともなく音がした。

陸「！！」

周りに気配を配る。

陸「誰だ？俺相手に隠れても無駄だぞ。」

そう言うのと、陸の後ろの大きめの竹から、てゐが姿を見せてきた。

て「へへーん、たかが人間の分際で、私に挑む気？この畏張り名人の私に！！」

陸を見て自慢げに言い放った。

陸「讓ちゃん・・・誰に物を言ってるかわかってるのかな？」

不気味な笑顔をてゐに向けた。

て「ふん！！どんな手を持っても、ここにいる時点で私の勝ちよ！！そこに落ちてる奴と同じく、畏にはめてやるもんね！！」

そう言うて正の落ちた落とし穴を指差した。

陸「畏あ？畏つてのは・・・」

カードを拳銃に変えて、構えた。

陸「これの事かなあ！？」

そう言うてあたりを打ちまくった。
打ったところから、恐らくは畏らしいものがどんどん壊れていった。

て「え？え？え？え？」

と驚いている間に、陸の銃声が止んだ。

陸「さてと・・・これで全部だな。」

構えを解いた。

て「そんな・・・なんでわかったの？」

絶望し、地に膝を落とした。

陸「それは単純な答えさ、それは・・・」

てゐにゆっくり歩み寄る。

陸「畏に関しては俺の方が一枚上手だって事だな。」

さつき以上に不気味な笑顔をてゐに向ける。

陸「さあ、どうする？どうする？どうするう！？」

てゐにどんどん顔を近づける。

だがその顔の目前に、銃弾らしき物が飛んできた。

陸「おっと。」

そのままバックステップで交した。

その隙を見て、てゐは永遠亭まで走り去っていった。

陸「あ、待て・・・」

追いかけてようとしたが、今度は陸の足元に銃弾が飛んできた。
その後に、どこからともなく声がした。

？「人間よ、ただちにここを立ち去りなさい。さもなければ、次は威嚇ではなく攻撃します。」

声の元はまったくわかりそうにない。

陸「・・・この感じ、芝居がかった台詞さえ外せば、間違いないな・・・」

銃弾の飛んできた足元から、周りの方に目を移した。

陸「この声の主は・・・うどんげ、あなただな。」

誰もいないところに話しかける。

？「・・・」

陸「返事しない所から見ると、凶星だな。」

？「・・・どうやら私を知っているようですね。ですが、その様子ですと私がどこにいるかわからないので

はありませんか？」

陸「まあ、目じゃ見えないな。だが・・・」

誰もいないはずの上方に銃口を向ける。

陸「悪いけど、俺にはバレバレなんだよ!!」

銃弾を放つと、その方の近くの竹が不自然に揺れた。

そして近くの地面から、何かが降り立った音がした。

そこから、うつすらとうどんげが姿を現した。

服の肩辺りが少し破れていたので、銃弾は肩をかすめていたようだ。

う「・・・大した物ですね。隠れている私を狙って撃つなんて。」

服の破れた所を手で押さえ、陸を見つめる。その目は真っ赤になっていた。

陸「ははは、これが俺の能力だからな。」

う「そうですね、なら・・・」

そう言つて、目の赤みをますます強くしてきた。

う「長視 インフレアドムーン!!」

そう言つと、うどんげは陸の視界から完全に姿を消した。

う「これは、さっきまでとは訳が違います。降参するなら今の内ですよ?」

再び誰もいないところから声がしてきた。

陸「やれやれ、俺はここに戦いに来たんじゃないんだがな。」

困った様子を見せる。

う「さっきの様子では、あなたは明らかに、こちらに攻撃を加えたと考えられますが？」

陸「おいおい、あっちから罠仕掛けといて、そりゃないな。」

う「どちらにせよ、ここから立ち去っていただきます。」

そう言うと、竹やぶの暗闇から陸目掛けて銃弾が大量に飛んできた。それを陸は軽快にかわしていった。

陸「それは出来ないな。俺には病気を抱えた仲間が待ってるんだ・・・」

かわしながら言う。

陸「だから、俺は絶対に退けないんだよ!!」

銃弾の飛んできた方向に向かって攻撃をするが、攻撃が当たった気配はない。

しばらくして、うどんげの銃撃が止んだ。

陸「さて・・・場所は何となくわかるが・・・次はどう出る？」

周りに気配を配る。

どうやら陸は位置を感じ取ったようだ。

陸「・・・今度は左か!!」

そういつて左手の銃で左を撃とうとするが、攻撃は真上から来た。

陸「しまった!!マインドドロッピングか!!」

銃弾の雨によって陸の周りが爆風に包まれた。

体が少し巻き込まれながらも、その爆風から転がり逃れる。

陸「危ないな、まさか上から・・・な!？」

逃れた先は、視界を遮るほどの緑色の煙に包まれていた。恐らく毒ガスだろう。

陸「今度は・・・瓦斯織物の玉か・・・まずい・・・意識が・・・」

ふらつく陸。

陸「・・・はあ・・・はあ・・・ここまで防戦一方になるとはな・・・」

そのままその場に跪いた。

う「どうです?ここまですれば、もう降参せざるをえないでしょう?」

恐らくは陸の前方から話しかけてきた。

陸「そうだな・・・普通なら・・・なあ!!」

体を起こし、声のした方に銃弾を放った。

う「愚かですね・・・やはり人間は度し難い。」

やはり姿を見せない。

う「次で最後です。」

そう言いつと、陸を取り囲むように八人ほどのうどんげが姿を現した。

う「せめて、安らかにしてあげましょう・・・」

そのまま陸に向かって一斉に走ってきた。

陸「こうなったら・・・!!」

万事休すの陸は、自分のいる場所を爆発させた。

う「!!」

突然の事に、八人のうどんげは足を止めた。

毒煙を吹き飛ばされ、陸自体はうどんげからは煙にまかれ見えない。

う「無駄な抵抗を・・・」

煙が晴れると、そこには一本のナイフを構える陸がいた。

う「そんな物で、どうする気です?」

陸「さあな・・・だが・・・君にはこういうのが効きそうだな・・・」

「

そのナイフを、前方にいる一人のうどんげに向ける。

う「・・・いいでしょう、ナイフ一本で私を止められるのなら、やってみなさい!!」

八人のうどんげが、一斉に陸に襲い掛かった。

陸「は・・・本体ならもうわかってる・・・」

前方に構えたナイフを空中に構える。

そこには降下してくるうどんげがいた。

う「！よく気づきましたね・・・でも、そんなナイフごときで!!」

そのまま攻撃しようとしたが、陸のナイフが柄から飛び、うどんげの腕をかすめた。

う「く!?!」

不意の攻撃に、陸から距離をとるように着地した。

う「こ、これは・・・」

かすめた所を見る。

陸「スペツナズナイフってんだ。見るのは初めてだろうな。」

飛ばした後の柄だけの物をつどんげに見せる。

う「ふ・・・ですが、この程度では・・・あれ？」

うどんげの視界が突如霞み、顔に手を当てた。

陸「さっきのお返しさ。立つのもやっとだろ？」

どうやらさっきのナイフに毒を仕込んでいたようだ。

う「馬鹿な・・・私に効く毒なんて・・・」

なんとか立つてはいるが、意識は朦朧としている。

陸「香森堂の近くの森の茸さ。あなた相手にここまで効くとは思わなかったがな。」

う「まさか・・・魔法の森の・・・」

陸の方を見るが、その目にはもはや陸はまともに映っていない。

陸「その通り。さて・・・終劇だ。」

拳銃をカードにしまった

そして違うカードを出した。それはショットガンになった。

陸「これで終わりだ!!」

それを放ち、うどんげは後ろにあった竹まで吹き飛んでいき、そのまま地面に突っ伏したのであった。

第十三章 見えざる者と見通す者（後書き）

後書き

こんにちわ（こんばんわ）。ちょっと頑張ってみました澄田です。

なぜか友達と連想ゲームをしながら添削をしていました。なので誤字脱字がちよっとあるかもしれません。

ギャグの後でまたも戦いです。まあ楽しくやれたので満足です。

みなさんはどう思っているのかはよくわかりませんが、これからもっと面白くなりますよ。

では、第十四章をお楽しみに。

第十四章 人里の夜（前書き）

あらすじ

- 1、チルノが熱くなった
- 2、陸と正が永遠亭に向かった
- 3、陸がうどんげと戦い、勝利した

ではどぞ

第十四章 人里の夜

第十四章 人里の夜

陸とうどんげの戦いが終わった後、正の落ちた落とし穴から大きな音がした。

正「ぶわあ！！なんじゃあこりゃあ！？」

落とし穴から、正が這い出てきた。

正「一体どうな・・・あ、陸！！」

出てこようとしている途中で陸を見つけたようだ。

陸「お、やっと目を覚ましたか。」

正を見てさっきの武器をカードにしまった。

正「・・・えーっと、何があったんや？」

その体勢のまま、戦いで滅茶苦茶になった周りを見てから尋ねた。

陸「ああ、一応説明してやるよ。」

正「ほお・・・わしが気絶しとる間に、そんな事が・・・」

さつきと違い、二人は適当な所で立って話をしていた。

陸「そうだ。たく、お前が寝てる間に大変な事になってたんだよ。」

正「それやったら、わしを起こせばよかったやろ？」

陸「いや、お前はあのまま埋めるところと思ってな。」

正「おうい！！何考えとんねんお前！！」

正が陸に突つかかっていると、正の背後から、倒れているうどんげが起き上がってきた。

う「まだまだ・・・」

ふらふらと陸たちに近づいてきた。

陸「おい、勝負はもうついてるだろ？これ以上戦うのは・・・」

う「な！？」

突如叫び、歩みを止めた。どうやら二人の後ろに誰かがいるようだ。

陸・正「？」

うどんげの方を見ていた二人は、背後に振り返った。
そこには、あの永琳が悠然とこっちを見ながら立っていた。

永「・・・うどんげのこの様子から見ると、あなた達二人があの子を？」

うどんげを見た後、二人を睨みつける。言葉にはうつすら殺気が混じっている。

正「ちゃ、ちゃうで！！わしやのうてこいつが・・・」

焦った様子で陸に手を向けると、陸が永琳に対し、なぜか跪いていた。

陸「数々のご無礼、どうかお許し願いたい。」

永琳を真つ直ぐに見る。

正「え？え？ええええ！？」

その様子を見て思わず驚いた。

正「あのう、ここはお前がわしを差し出すとかせえへんの？てかキヤラ違うね？」

だが陸は正の発言を完全に無視した。

陸「我々はここに争いに来たのではありません。」

正「おーい、陸さん？」

正の問いかけを、陸はことごとく無視した。

永「では、あなた達は何をしに？」

陸「我々は、ただ薬をと・・・」

永「じゃあ、なぜうどんげがああなってるの？」

ぼろぼろになつたうどんげを見てから尋ねた。

陸「それは・・・彼女から攻撃された為、正当防衛という形をとらせていただきました。」

永「なるほどね。」

察した様子。

陸「いかようにも罰は受けましょう。ですが・・・薬だけでもいただきたい。俺には病気を抱えた仲間がいます。その為にも、どうか薬を・・・」

顔を下に向け、永琳に頼み込んだ。

永「・・・顔を上げなさい。」

そう言われ、陸は顔を上げた。

永「ただ争いに来ていたのなら、私自身が追ひ払おうかと思ってい

たけど、そういう事なら話は別ね。」

陸「では、俺の申し出は・・・」

永「ええ。出来る限り協力するわ。」

陸「・・・ありがとうございます・・・」

頭を深々と下げる。その目には少し涙があった。

正「・・・えーっと・・・恩に着るで!!」

周りを見て少し考えた後、陸と同じように永琳に頭を下げた。

永「別にそんなかしこまらなくていいわよ。仮にもこっちが悪いんだから。」

そう言っと、永琳の後ろからてゐが寄り添うように姿を見せた。

正「あ、てゐ、さっきはよくも・・・」

てゐを睨み、前に出ようとしたが、陸が止めた。

永「ごめんなさいね、この子も悪気はなかったのよ。」

そう言っと、てゐは少々おびえがちに正を見て小さく頭を下げた。

それを見て正は、

正「いや、その・・・まあ、素直に謝るんやったら、それでええけ

ど・・・」

戸惑い、照れた。

陸「お、さすがはロリコ・・・」

正「シャラップ!!」

陸の言いかけた口を正が手で覆いで塞いだ。

永「で、その病気の仲間は？」

陸「それでしたら、実はここには・・・」

困った様子を見せる。

永「だったら・・・」

そう言っとうどんげの方を見た。

永「うどんげ、あなたがとりあえず診てきて。」

う「ええ！？私ですか!？」

永「私あまりここを離れる訳にはいかないでしょう？それに、今回悪いのはあなたなのだから。」

う「・・・わかりました・・・」

ため息混じりに言った。

陸「では、彼女がとりあえず我々に同行し、処方を・・・という形でよろしいですか？」

うどんげに手を向け、永琳を見て尋ねた。

永「ええ、そういう事になるわね。」

正「ほうか。そんじゃよろしく、うどんげ。」

振り向き、うどんげに手を振る。

う「やれやれです・・・」

困った様子を見せるうどんげであった。

その頃、進は里の宿にてチルノを二階の和室の部屋で布団に寝かせ、看病をしていた。

進はチルノのいる部屋で頭に乗せるタオルの水を桶に絞っていた。

進「チルノ、大丈夫？」

タオルをチルノの頭に乗せ心配そうな声で尋ねた。

チ「へん・・・さいきょーのあたいが・・・これぐらいで・・・」

布団から上半身を起こしたが、顔を赤くし、意識は朦朧としていた。

進「無理しちゃ駄目だよ、今は寝てなきゃ。」

そのままチルノを寝かせる。

チ「・・・」

寝かされてから、進をじつと見た。

進「ん？どうしたの？」

チ「いや・・・別に・・・」

そう言いながら、進から視線を逸らした。

進「何か言いたい事とかでもあるの？」

視線を逸らしたチルノに尋ねた。

チ「だから、別にないってば・・・」

目を逸らしたまま返事をした。

進「えー？本当に？」

立ち上がり、顔をそらした方に回り込んできた。

チ「もう・・・しつこいわね!!」

いらつとして立ち上がったが、そのまま進の方にふらつと倒れた。

進「おっと。」

倒れてきたチルノを受け止める。

チ「あたいは・・・ただ・・・」

言いかけたが、そのまま進の胸元で寝てしまった。

進「あれ？チルノ？」

チルノに話しかけるが、当然返事をしない。
そんな時に、美鈴が部屋の襖を開けてきた。

美「進、チルノの様子は・・・」

何か言いかけたが、二人の様子を見て美鈴は、

美「あらごめんなさい、邪魔したみたいね。」

棒読みで言いながら、真顔でゆっくり襖を閉めた。
その後、進はチルノを再び布団に寝かせ、座る。

進「邪魔って・・・何の事だろ？」

考え込む超鈍感少年だった。

その頃、陸と進はリュックを背負ったうどんげと共に竹林を歩いていた。

陸「すまないな、わざわざ来てもらって。」

先頭を歩くうどんげに話しかける。

う「別にいいんです。師匠に言われましたし、それに・・・」

陸「それに？」

う「こういう形で、人里に行ってみたかったです。」

陸にそれとない笑顔を向ける。

正「一人じゃ嫌なんか？」

う「まあ・・・そうなりますね。」

陸「人目が気になるのか？」

う「・・・」

少し下を向いた。

正「言いたくないんやったら、別に言わんでもええで。」

う「・・・はい。」

陸「お、ようやく見えてきたか。」

そうこうしていると、さっきの人里が見えてきた。

正「さてと、あいつらのおる宿を探すとすつか。」

三人は人里に入り、うろつろと探し回った。

しばらくして、陸が少し離れた所から恐らくは宿の前で門番っぽく立っている美鈴を見つけた。

陸「あそこか・・・おい、美鈴。」

陸の呼びかけに、そっぽを向いていた美鈴がこちらに振り向いた。

美「あ、陸、正!」

陸たちの方に駆け寄る。

正「帰ったで、美鈴。」

軽く手を振る。

美「おかえりなさい。それはそうと薬は?」

正「それやったら、ここにおるで。」

隣にいるうどんげを指差した。

う「ちょっと、私を薬呼ばわりしないでください。」

やや不満げな顔で反論した。

美「ああ、誰かと思えば貴方ですか。」

うどんげを見る。

う「そうですよ。患者はどこですか？」

美「こちらです。」

そう言つて、宿を指差した。

陸「それじゃ、中に入るとするか。」

そのまま四人は、宿に入つていった。

少年達移動中・・・

夕焼け空が窓から差し込む宿の二階で、寝ているチルノの容体を見るうどんげ。他の者はやや離れたところに座っていた

う「・・・」

黙ったまま容体を見る。

正「のう、やっぱ妖精相手じゃ難かしいんちゃう？」

うどんげに聞こえないように小声で陸に話しかける。

陸「ここは幻想郷だ。妖精の処方ぐらいあるだろ。」

正と同じ調子で答える。

う「・・・ふう。」

唐突に大きく息を吐いた。

進「ねえ！？チルノどうなるの！？病気は治るの！？」

じっとしていたが、いてもたってもいられずうどんげに駆け寄った。

う「大丈夫。この薬を飲んで今日一日安静にしていたら、明日には治ってるわ。」

そう言って薬を枕元に置いた。マークはもちろんやごころである。

進「よかったあ・・・」

ほっと胸をなでおろした。

う「じゃあ、私はこれで・・・」

立ち上がって部屋を出ようとすると、陸が呼び止めてきた

陸「ちょっと待ってくれ。」

う「なんですか？もう用は済んだでしょう？」

陸の方に振り向く。

陸「今日はもう遅い。夜道を歩くのはあまりよくないと思うが？」

う「では、私にどうしろと？」

陸「だから、今日はこの宿に止まっていったらいいんじゃないか？君はまだここをあまり見ていないしな。」

う「・・・」

正「そうやで、せっかくやし、こんな時ぐらいゆっくりしててもええやろ。」

う「・・・しょうがないですね。」

陸「よし、そうと決まったら・・・」

進「ご飯にしよう！-」

正「そうやのう、今日はやけに腹が減ったわ。」

美「お昼が冷麺でしたしね。」

陸「じゃあ、ぱつとやるか！-」

一同「おう!!」

そうして5人は宿で夕飯を共に過ごした。

一同食事中・・・

食事が終わり、正と進は男性用の部屋に、美鈴とチルノは女性用の部屋で眠りについていた。

うどんげは一人、宿の屋根の上に座っていた。

う「・・・」

ぼーっと夜空を眺めていると、陸が後ろからぬつと出てきた。

陸「どこにいるかと思ったら、こんな所にいたのか。」

そつとうどんげの隣に座る。

陸「なんでこんな所にいるんだ？うどんげ。」

うどんげを見ながら尋ねた。

う「ここなら、綺麗な夜空が見えるから。」

眺めたまま答えた。

陸「なるほどな。でも、部屋の窓からでも見えるんじゃないのか？」

う「窓からじゃ、味気ないもの。」

陸「ああ、そう言えば君の住んでいる所は竹林に囲まれているから、夜空が見えづらいのか。」

う「ええ。だから、こういう時でもないところやって眺める事も出来ないのよ。」

陸「へえ・・・やっぱり月の故郷を思い出したりするのかな？」

う「そうね、それもあるけど、この夜空は本当に綺麗だからって理由が一番ね・・・って、なんで私の故郷が月だって知ってるの？」

陸の方を見てから尋ねた。

陸「さて、何ででしょうかな。」

とぼけた調子で返した。

う「ちょっと、はぐらかさないでよ。」

陸「まあまあ、それは今いいじゃないか。」

う「・・・それもそうね。」

そしてまた、夜空を見た。

陸も同じように夜空を眺める。

少しして、うどんげが陸に尋ねてきた。

う「・・・外の世界の夜空は、どんな感じなの？」

陸「俺達の世界じゃ、夜空が見える所は中々ないんだ。」

う「どういう事？」

陸「ここは夜になれば暗いだろう？でも俺達の世界は明るすぎるんだ。だから、夜空なんて全然見えないんだ。」

う「そう・・・」

陸「でも、田舎とかに行けば、こんな感じの夜空を見る事は出来るかな。例えば・・・えーっと・・・」

夜空を指差し探すが、それらしい物が見当たらず、困惑する。

陸「そうだな・・・えーっと・・・どれだろうな？」

う「ふ・・・ふふふ。」

その様子を見て笑った。

陸「ちょ、笑うなよ。」

う「だって・・・自分で言ってそれだもの・・・ふふふふ。」

なおも笑い続ける。

その時、陸がある事に気づいた。

陸「・・・そう言えば、さっきから敬語じゃないな。」

う「あ、そう言えばそうね。敬語の方がいい？」

陸「いや、俺はその碎けた感じの方がいいと思うな。かわいいし。」

軽い笑顔をうどんげに向けた。

う「か、からかわないでよ・・・」

少し照れながら言った。

陸「ははは、ごめんごめん。」

う「もう・・・」

陸「なあ、うどんげは普段からずっと敬語なのか？」

う「・・・てゐとかには今みたいな感じね。」

陸「って事は・・・俺はてゐと同じレベルって事かよ。」

う「そういう事・・・かしらね。」

陸「おい、否定しろよそこは・・・」

う「いいじゃない、別に。」

陸「まあ、それはどうでもいいか。そうだとんげ、一つ聞きたい事があったんだ。」

う「何？」

陸「俺達と・・・旅をしないか？」

う「旅？」

陸「そうだ。俺達は今幻想郷を旅しているんだ。だから、一緒に来ないか？」

う「旅・・・」

唐突な一言に、うどんげは困惑した。

陸「突然言って戸惑ってるとは思っている。でも、俺はうどんげから感じ取ったんだ。君はもっと、外の世界を知ってみたいって。」

う「どうして・・・わかったの？」

陸「俺にはわかるんだよ。君みたいな子とかの気持ちは特にわかる。」

う「そうなの・・・でも駄目よ、だって私はまだ・・・」

言葉を失ったその時に、陸が畳み込むように言ってきた。

陸「大丈夫だ。今の君の気持ちを永琳に伝えれば、きっといける。だから、君の思いを言ってくれ。」

う「私は・・・私は・・・」

少し下を見てから、

う「みんなと・・・旅してみたい・・・」

顔を上げて、やや小声で思いを告げた。

陸「だったら、明日永琳に直談判するか。」

う「でも・・・本当に大丈夫なの？」

陸「大丈夫だって、俺がなんとかするさ。」

う「陸・・・」

陸「じゃ、今日はもう遅い。明日に備えて、もう寝るか。」

う「ええ。」

そして二人は、屋根から下りて自分の部屋に入り、眠りに着いたの
であつた。

第十四章 人里の夜（後書き）

後書き

今回は時間差なんて小細工なしで連続投稿します。澄田です。

今回からうどんげが仲間入り！！するかもしれませんね。てかこれ
ほぼ確定（ry

さて、これから物語は怒涛のなんたらに入りますよ！！確か。

まあどうなるかはあくまでご想像につて事で。これからもよろしく
お願いします。

あ、一応人里編的な物はこれにて終了です。

これからは個人個人を見ていきます（いわゆる修行編的な）

では、第十五章をお楽しみに。

第十五章 鬼と人（前書き）

あらすじ

- 1、うどんげがチルノを診た
- 2、うどんげが陸達と宿に泊まった
- 3、陸がうどんげを勧誘し、とりあえずOKをもらった

ではどぞ

第十五章 鬼と人

第十五章 鬼と人

翌日、陸たちが泊まっている宿の布団に、一つだけ誰かが寝ていた後の布団があった。正の布団である。

正自身はかなり早起きし、人里内をランニングしていた。

正「おはようさん!!」

半そでにジーンズの格好で、行きかう人々に挨拶をしていた。

しばらく走り、町の入り口辺りで休憩をした。

正「ふう、やっぱり朝のランニングは気持ちええのう。ここは空気が綺麗やし、それに・・・」

上って間もない太陽を仰いだ

正「今日はええ天気や。こんな日は何かええ事でも・・・」

そう言っていると、正から見て太陽の日を隠すように、空に何かが飛んでいた。

正「ん？なんやあれ・・・？」

それは空中で方向を変えて正の方に落ちてきた。

正「ちょ、たんまたんまあ!？」

正は落ちてきた物をとっさにかわした。
それは土煙を起こしながら地面を滑り続け、そのまま木にぶつかって止まった。

正「・・・な、なんなんや一体・・・？」

その方に振り向いた。

土煙で実体は見えないが、煙越しに何かが動いていた。

？「おお、よく避けたねえ、人間・・・」

それは、正の方にゆっくりと近づいてきた。

？「最近外から来た奴ってのは、君かい？」

土煙から出てきたのは、ちょうど角の間に大き目のたんこぶが出来ている伊吹萃香だ。

正「・・・」

突然の出来事に戸惑い、言葉を失った。

そんな様子の正に、萃香が怒声を出して問いただした。

萃「どうなんだい!!」

その声によって、正は我に返った。

正「!・・・ああ、そうや・・・」

我に返った正に、萃香が何かを覚ったような事を言ってきた。

萃「・・・ふん、今まで色んな奴を見てきたけど、あんたは少し違う感じがするねえ。」

正「ああ、わしはただの人間とちゃうで。それでも能力持ちって奴や。」

自身をアピールするように、右拳を返して萃香の前に出した。

萃「よろしい。じゃあ、喧嘩とかいける口かい？」

にっとした笑顔を正に向けた。

正「ははは、喧嘩って言うんかのう・・・まあ殴り合いとかやったらいける口やで。」

照れながら頭を掻いた。

萃「ますますよろしい！！だったら、今すぐってのはどうだい！？」

正がさっきやったアピールのように拳を掲げた。

正「ええ、こない朝っぱらから？」

萃「朝っぱらだからこそそのよさじゃないか。」

正「・・・しゃあないのう。弾幕戦とかならともかく、ただの喧嘩ぐらいやったら・・・」

そう言つて萃香がいた方をちらつと見ると、なぜか萃香がいなかった。

正「あり？どこ行つたんや？」

正は周りを見渡したが、萃香はどこにもいない。

正「まさか・・・」

何かを感じ取つたのか、正が上を見上げると、そこには右拳で殴る構えをしている萃香がいた。

萃「油断禁物！！」

右拳を落下しながら放ち、周囲に鈍い音が広がった。

正は両手を交差させ、萃香の拳を防いでいたが、反動で少し後ろにすべった。

萃香はそのまま地面に着地した。

殴った手をちらつと見た後、正の方を見た。

萃「・・・へえ、なるほど。」

正「危な！！二度も空中から来るとはのう・・・」

殴られた所を少し見た後、萃香を見る。

萃「君の能力つてのは、今のガードかい？」

正「・・・えーっと、そやのう・・・一応？」

戸惑いながら答えた。

萃「それなら・・・君自身の力をみせな!!」

そう言つて、キーパーの様な構えを見せた。

正「お、ええんか？」

萃「さっきのは明らかに不意打ち・・・あたしは本来そう言つのは嫌いなんでね。」

正「そつか、そんじゃあ・・・思いつきりやるでえ!!」

右拳を構える。

だがその時、正がある事に気づいた。

正「と、その前に、名前ぐらい名乗っておかなあかんのう。わしの名前は拳武 正や。」

構えたまま挨拶した。

萃「そうかい、じゃああたしも名乗っておこうか。あたしの名前は伊吹 萃香。覚えときな。」

同じように挨拶を返した。

挨拶が終わると、正が萃香に挑みかかった。

正「そんじゃ行くで!!ライドナックル!!」

飛び込みからパンチを放った。

萃「（お、結構早いね・・・）」

両手を正のパンチから守るように交差させた。

正の拳は交差させた所の中心に当たり、さっきと同じような鈍い音がした。

正「これでどうやー!!」

だが萃香はぴくりとも動いていなかった。

萃「人にしちゃ大したもんだね。でも・・・」

殴った拳を右手で掴んだ。

萃「この程度じゃ、あたしには効かないよー!!」

正をそのまま上方に放り投げた。

正「のわああああ・・・」

悲鳴を上げて飛んでいった。

そのまま元いた場所に落下し、周囲に土煙と轟音を響かせた。

正「・・・」

うつぶせたまま動きそうにない。

萃「まあ、人間にしちゃ中々・・・」

と言っていると、正が両手で飛んで起き上がり、萃香に回し蹴りを放った。

正「まだやでええええ！！！！！」

だが回し蹴りを放った足首を萃香に掴まれた。

萃「ガッツはあるね、気に入ったよ。」

掴んだまま感心を示した。

正「は、放せや！！！」

無駄にじたばたするが、右足はまったく動きそうにない。

萃「次はもっと腕磨いてきな。あたしはいつでも・・・」

掴んだ足を後ろに振った。

萃「挑戦歓迎だからね！！！」

正をハンドボールの様に前に投げた。

正「ありやああああ・・・・・・」

投げられてしばらく滑空し、ちょうど泊まっていた宿の前まで飛んでいき、そのまま頭から上半身が道にめり込み、轟音を立てた。突き刺さった状態のところに、宿から美鈴と陸が出てきた。

美「誰です？朝っぱらから大きな音・・・」

突き刺さった正を見て、呆然とした。

陸「・・・もしかして、正か・・・？」

その状態の正は、返事もせずぴくりともしなかった。

陸「・・・とりあえず、引っこ抜いた方がいいよな？」

美「・・・そうですね。」

二人は両足を持って正をずぼつと引っこ抜いた。
正の顔に意識は完全になかった。

陸「・・・何があつたんだ、こいつ？」

美「さあ・・・」

二人が正をとりあえず横にしていると、萃香がきよろきよると何かを探すように歩いてきた。

萃「あれ？どこに飛んで行つたんだ、あいつ？」

そのまま陸たちの所まで来た。

萃「お、ここにいたみたいだね。」

横になっている正を見て言った。

陸「あなた、正の事を知っているのですか？」

萃香を見て尋ねた。

萃「ああ、こいつとちよいと喧嘩しててね。」

美「ええ！？正があなたと！？」

ややオーバーリアクションで言った。

萃「そうだよ、人間にしちゃ大したもんだね。でもまだまだ若いね、経験が足りないよ。」

陸「（鬼相手に、経験もなくでもないだろ・・・）」

顔に出したが、口には出さなかった。

萃「ま、あたしの見たところだけど、こいつは伸びるよ。どれほどになるかはわかんないけど、もしかしたら・・・」

そう言いながら踵を返し、もと来た道を歩いていった。

萃「そいつが起きたらそんな感じな事言つといて。じゃ。」

少し手を振って、その場を後にした。

萃香が見えなくなる頃に、正が目を覚ました。

正「・・・あり？ここどこや？」

上半身を起こして辺りを見た。

美「正！！目を覚ましましたのですね。」

美鈴が正に駆け寄った。

正「お、美鈴か・・・てそれより、萃香はどこや!？」

立ち上がり、また周りを見渡した。

陸「萃香なら、どこかに行ったぞ。」

正「何でや!？あいつ、まだ勝負は・・・」

自分の拳を見て言葉を紡いだ。

陸「・・・正・・・お前、負けたんだよ。」

少し重苦しく言った。

正「そうか・・・そうやのう・・・あんだけ一方的にやられたら、
そうなるのう・・・」

美「正・・・」

陸「・・・とりあえず、朝飯食つとけ。」

正「そうやのう・・・」

少し重苦しい雰囲気では三人は宿に戻るものであった。

第十五章 鬼と人（後書き）

後書き

ふう、前との空気がちょっと大きかった気がするかな？そんな澄田です。

今回はあまり目立ててない気がする正をメインにしてみました。そうでもないかな？

そんでもって、これからまた面白くなっていきますよ。

さて、それはさておきましょうか。今回の後書きは重大発表があります。

それは、この澄田が違う幻想入りを投稿してみたんです！！

そのタイトルは、導かれし者が幻想入り、です。

こつちと違ってかなりやりたかった投稿ですので、ペース配分とかまったく考えてません。まあやりたかっただけ投稿ですので。

後、せっかくだから友達の宣伝しておきます。

友達の一人がわしと同じ感じの幻想入りを書いています。

タイトルは東方無限録。わしと赴きが違いますが結構面白いですよ。

おつとと、ちょっと長くなってしまいましたね。ではここまでにしておきます。

では、違う方の幻想入りにも期待していただきながら、第16章をお楽しみに。

第十六章 それぞれの時間（前書き）

あらすじ

- 1、正が早起していた
- 2、正が萃香と喧嘩をした
- 3、正が負けた

ではどぞ

第十六章 それぞれの時間

第十六章 それぞれの時間

少年達食事中・・・

陸達は宿にて朝食を済まし、二階の大部屋でちやぶ台を囲んで話し合いをしていた。

チルノは完全に回復し、進の隣にいた。

美鈴はずっと考え事をしている正の隣にいた。

陸とうどんげはその間辺りにいた。

陸「さて、全員に重大な発表がある。しっかり聞いてくれ。俺達の旅に・・・うどんげが加わる事になった！！」

進「ええ！？本当に？」

う「まだ決まった訳じゃないけどね。」

美「どういう事ですか？」

陸「本人の意思はあるんだが、まだ永琳に許可を貰っていないんだ。だから、今日これから行ってくて訳だ。」

進「なるほど。これからよろしく！！うどんげ。」

うどんげに手を振る。

う「よろしく。」

同じく手を振る。

チ「・・・」

なぜかだんまりを決め込んでいた。

陸「おいチルノ、お前の病気はうどんげに治してもらったんだぞ。挨拶ぐらいしろよ。」

チ「・・・へん！！あんなんで、あたいより弱いんだからね！！」

進「今強さ関係ないでしょ？てかうどんげの方が強いと思うんだけど？」

美「あ、わかりました。治してもらった恩があるから、素直になれてないんですね？」

チ「そ、そんなんじゃ・・・」

うそぶくチルノに、うどんげが立ち上がって手を差し伸べた。

う「これからよろしくね、チルノ。」

満面の笑顔をチルノに向けて言った。

チ「・・・この借りは、必ず返すからね。」

少し悔しそうな顔をしてうどんげの手を握った。

陸「よし、じゃあこれから永遠亭に……」

正「待ってくれや!!」

立ち上がった陸の言葉と動きを止めるように正が力強く言った。

陸「……なんだ？」

立ち上がりかけた体勢で尋ねた。

正「……今から言うことは、完全にわし個人の頼みや……最悪聞き流してくれてかまわへん。」

顔を上げて言った。

正「美鈴!! わしに、気の使い方を教えてくれ!!」

美鈴にいきなり頼み込んだ。

美「え? 気の使い方を？」

正「ああ、そうや。」

進「またなんで急に？」

正「さつき萃香と喧嘩して理解したんや……わし、このままやつたらこの先どうにもならんようになるって……だから美鈴から、気の使い方を学ぼうと思ったんや……」

美「そうですか・・・私はかまいませんけど・・・」

陸「なぜ今言うんだ？」

その問いに、正は待つてましたといわんばかりな調子で答えた。

正「そこや！！そこでわしは考えたんや。何も永琳に頼みに行くのに、ぞろぞろと全員で行く必要もないやろ。それやったら、わしはその間美鈴と修行をした方がええって考えたんや。」

陸「・・・なるほどな。それだつたら・・・俺とうどんげはこれから永琳に頼みに行く。で正と美鈴は適当な場所で修行つて事にすればいいな？」

正「そうしてくれるんやつたらありがたいで。」

進「え？ちよつと待つてよ。僕とチルノは？」

陸「進とチルノは・・・この村の観光でもしとけ。」

進「うん、わかつ・・・」

と言いかける前に、チルノが進の腕を掴んで部屋から引つ張り出した。

チ「じゃあ、あたいたちは先に行つてるよ！！」

進「ちょ、チルノ！？前もこんな・・・」

チルノに引つ張られ、二人は凄いスピードで宿から出て行った。
窓からその様子を見る一同。

陸「やれやれ、昨日ずっと寝たきりだったのに・・・相変わらずだな、あいつ。」

う「元気があるのは、いい事よ。寝たきりだったから多分鬱憤が溜まってたんじゃないの？」

正「そうやのう、まああいつから元気とったら、何も残らんからのう。」

美「言えてますね。」

陸「じゃあ・・・俺達は予定通り、永琳に頼みに行くか。」

う「ええ。」

そう言つて陸とうどんげの二人も部屋から出ていった。

正「・・・よっしゃ、わしらはこれから手ごろな場所探しに行くか！！」

美「先に言つとくけど、私の修行は厳しいわよ？」

正「へ、望む所やで！！」

そう言つて二人もまた宿を後にした。

ここから六人三組の彼らの様子をそれぞれ別に分けて書いていきます。

三組が最終的に合流するまでの流れみたいな物です。

最初が陸とうどんげ。次は正と美鈴。最後が進とチルノです。

ではどうぞ。

陸・うどんげパート

二人は前通ってきた所と同じ竹林の道を並んで歩いていた。

陸「やれやれ、二度もここに足を踏み入れるとはな・・・」

ぼそぼそとつぶやく。

う「でも、私一人じゃ説明し辛いし、それにあなたが何とかするって言ったじゃない。」

あきれた様子で陸に言った。

陸「ああ、わかってるよ。ただ、こう山道を何度も歩くってのは、元いた世界じゃなくてな・・・」

それとなく疲れた様子を見せる。

う「・・・もしかして、運動とかろくにしてないの?」

陸「いや、そこそこ運動は出来るよ。まあ、正ほどじゃないがな。」

その時、遠くの方で何かが爆発する音が聞こえた。

陸「お、結構大きいな。」

足を止め、音のした方を見る。

う「にとりとかじゃないかしら？」

同じように見る

陸「どうだろうな。幻想郷じゃ爆発なんて珍しくなさそうだしな。さあ行こう。」

そう言って再び歩き始めた。

う「・・・そう言えば、正とか進って、どんな子なの？」

陸「そうだな・・・正は脳筋、進はガキかな。」

う「随分アバウトね・・・」

陸「はは、これからの旅を通して知っていったらいい。」

う「そうね。」

陸「その為に、これから永琳に頼みに行つてOKもらわなきゃな。つと・・・そんな事言つてたら見えてきたな。」

二人の前に竹林に囲まれた永遠亭が見えてきた。
とりあえず玄関まで行った。

う「ただいま帰りましたよー。」

横式の玄関を半分ほど開けて大きな声で言う。
その声を聞いて、てゐがやや早足で駆けつけてきた。

て「うどんげ！！やっと帰ってきたんだね。」

う「ただいま。それはそうと師匠は？」

てゐに身長を合わせてかがむ。

永「ここにいるわよ。」

玄関の廊下をゆっくりと歩いてきた。

う「師匠！！」

立ち上がり、永琳の方を見た。

永「うどんげ・・・昨日の内に帰ってこなかったのはなぜ？」

うどんげにやや鋭い視線を向けた。

う「それは・・・」

うつむいて言葉を失った。

その時、玄関の開きかけた戸を開けて、陸が姿を見せた。

陸「それは、俺が説明します。」

永琳を真つ直ぐに見る。

陸「うどんげは昨日俺の仲間であるチルノの処方をしていた所、遅くなつてしまい、やむなしという事で俺達が泊まっている宿で夜を共にしたのです。」

永「夜を・・・まさか、うどんげに何かした訳じゃないわよね・・・？」

陸に敵意を向けた。

う「いいえ、そんな事は一切ありません!!」

陸の前に立つて言った。

永「そう、ならいいけど。」

ほつと気を落ち着かせた。

永「なら、貴方はなぜここに來たの？」

陸「実は・・・今日俺がここに來たのは、ある事を頼むためです。」

永「ある事？」

陸「彼女を・・・うどんげを、俺達の旅に同行させてもらおうと言う」

事です。」

永「同行？」

陸「すなわち、彼女はここにしばらく帰って来ないという事です。」

永「それは、随分急な話ね・・・」

陸「急なのは仕方ないと思っています。しかし俺達は旅を続ける日々・・・今しか頼めないのです。」

永「・・・うどんげ。」

う「はい。」

永「それは、あなた自身の願い？」

う「はい。」

真「直ぐに永琳の目を見た。
その目に永琳は、

永「・・・あなたが他者に心を許すどころか、まさかこんな事になるなんてねえ・・・いつかはこんな日が来ると思っていたけど。」

う「師匠・・・」

永「あなた自身で決めた事なら、私から言うことは何もないわ。」

陸「では・・・」

永「陸、うどんげの事、頼んだわよ。」

陸「・・・はい！！もちろんです！！」

永「じゃあ、旅支度ぐらいしていきなさい。」

陸・う「はい！！」

二人はしばらく永遠亭にて支度をしていくのであった。

正・美鈴パート

二人は人里からやや離れた森に囲まれた閑散とした所で、修行をしていた。

美鈴を腕を組んで近くで正の様子を見ていた。

正「ふう・・・」

戦闘時の服装で立ったまま両手を合わせ、目をつぶって意識を集中させていた。

美「いい？気は誰もが持つ力の一つ。でも、それを形にするのは簡単じゃないのよ。だからこそ、今やっている事、集中する事は基礎であり、一番大事なのよ。」

饒舌に語る。

正「わかつとる・・・」

集中を切らさず返事をする。

美「（さて、ここからどれほどの時間がかかるか・・・正の素質次第だけど・・・）」

そう考えて見ていると、正の周りからオレンジ色の光の帯がにじむように出てきた。

美「（あら、思ってたより早いわね。）」

正の様子を見直した。

正「・・・こんな感じかう？」

光の帯がどんどん大きくなり、正より一回りくらいの大きさになった。

美「（・・・人間にしてはかなりの大きさね・・・どうやら正の・・・）」

だが帯の形が大きくなっていくうちになぜかゆがんできた。

美「（まずい！！このままだと・・・）」

危険を感じ取った美鈴は、正を止めようとした。

美「正！！それ以上は・・・」

だがその声が届く前に正の気が周りに散り、文字通り大爆発を起しました。

美「くっ・・・！！」

美鈴は爆風に巻き込まれ、少し吹っ飛んだ。

美「・・・手遅れだったみたいね・・・」

受身を取って立ち上がり、正の方を見るが、爆風の煙に巻かれ見えなくなっていた。

美「正！！どうなったの！？正！！」

煙の中、正の名を呼んだ。

その時、正らしき声が返ってきた。

正「わしやったら・・・ここやで・・・」

美「正！無事なの？」

美鈴は声のする方に歩いていった。

正「あんまし無事ちゃうかな・・・」

煙が晴れてた正が姿を現した。

正の上半身の服は吹き飛び、肌は黒いすすだらけになっていた。

美「・・・それぐらいなら大丈夫ね。」

正の様子を見て言った。

正「ええ！？結構やばかったんやけど・・・」

美鈴の方を見た。

美「あなたは才能と力量なら大した物よ。一日で形として出せたのは凄いことよ。」

正「そうなんか？それにしちゃえらい無様なんやけど・・・」

自分の体を見る。

美「そんなもので済んだならもうけものよ。さあ、どんどんやっていくわよ。」

正「ほんまに厳しいんやのう・・・」

美「だったら、ここでやめておく？」

正「そんな訳ないやろ！！」

美「じゃあ、さっきの要領で続けなさい。今度はちゃんと私がスト
ップかけるから。」

正「頼むでほんま・・・」

そう言って再び姿勢を正し、さっきの構えを取り直した。

美「（・・・しかし、いくら素質があっても、わずか一日であそこまで色濃く出るなんて・・・萃香が言ってた通り、正は化けるかもしれないわね・・・）」

そう考えていると、正の体から再び光の帯が出てきた。

正「よっしゃ、コツはもう・・・」

と思った矢先に、光の帯はぱつと周りに散って消えてしまった。

正「あれ？なんでや？」

周りをきよろきよろと見た。

美「そんなすぐにうまくいくはずないでしょう。ほら、もう一度。」

美鈴の声を聞いて正はまた構えを取り直した。

美「（・・・まだまだ荒削りね・・・）」

ため息混じりに考え、雲がまだらにかかった青空を仰いだ。

美「（まあ、これから先は長い付き合いになるでしょうから、今はこんな物でいいわね・・・）」

そんな事を考えていた時、正が地面にへたり込んだいた。

正「あかーん！！全然や・・・わし、ほんまに才能あるんか？」

自身の手をじっと見る。

美「・・・そうね、一旦休憩しましょう。一日で出せる気の量には限界があるし。」

正に歩み寄りながら言った。

正「それ・・・先に言えやあ・・・何か体が変にだるいと思ったのはそれかい・・・」

そのまま大の字で後ろに倒れた。

美鈴はすつと正の左隣に座り込んだ。

そして美鈴が正に話しかけてきた。

美「・・・まだ正はましな方よ・・・私の時なんてもつとひどかった。形どころか出すことすら出来なかったもの。」

正「へえ、そうなんか？」

美「ええ。」

正「ふん・・・まあ美鈴って、なんか努力家ってイメージあるのう。」

美鈴を見る。

美「イメージじゃなくて、事実努力はしてきたわよ。」

正「そうやるの・・・」

そして、空を仰いだ。

正はふと、思い出した事を声に出した。

正「・・・今でも現実味ないのう・・・」

美「何が？」

正「いや、わしらが幻想郷に来たって事。だって考えてみい？わし、この前まで普通に高校通ってた・・・言うなら単なる人間やで。それが、急にこんな世界来て・・・こんな事になって・・・もしかしたら、今までの事全部が夢で、わしは今元の世界で寝てるだけやないかなって・・・つい考えてまうんや・・・」

上半身を起こして語る正の頬を、美鈴はぎゅっと引っ張った。

正「あだだだ！？いきなり何すんや！？」

その手をどけて、赤くなった頬に手を当てる。

美「その痛みは、夢？」

正を真っ直ぐに見た。

美「夢だったら、そんな痛みはないわ。あなたは今、まぎれもなく幻想郷にいるのよ。現実から、目を背けちゃ駄目よ。」

正「・・・そうやのう・・・」

そう言って、座ったままうつむいた。

美「・・・もしかして、正は元の世界に帰りたいの？」

正「・・・わしは霊夢に言われてもう元の世界には戻れんから・・・選択肢なんてないんや・・・この世界の掟って事で割り切ってたけど・・・」

美「そうだったの？」

正「ああ・・・進はこの事言われた時、いきなり走り出したんや。あいつ、多分やけど色んなことが頭によぎったんちゃうかな・・・それで、パニックったんやと思ったんや。」

美「それで・・・その後どうなったの？」

正「チルノが追いかけて、二人して川で遊んでたわ・・・その時はこいつほんま能天気やのうとか思ってたのう。でも今考えたらあいつって・・・強かったんかもしれへん。もしくは・・・心の切り替えが早かったんかのう・・・ただ忘れただけかもしれんけど。」

そう言ってしばらく、二人の間に沈黙が訪れた。
その沈黙の中、美鈴が先に口を開いた。

美「・・・正自身はどうなの？」

正「わしは・・・そうやの・・・まあ進みたいなガキやないし、そんな考えたりとかは・・・」

軽快に話す顔に、一つの滴がすつと伝った。

正「あれ・・・？何でやろ・・・」

その滴は、まぎれもなく正の涙であつた。

正「おかしいの……わし、別にそんな事……ない……のに……」

目をぬぐうが、涙が止まることは無かつた。

正「なんでや……なん……」

その時、美鈴が包み込むように正の体に両手を回した。

美「今はいいのよ……子供のように泣いても……」

正はそのまま美鈴の胸で泣き崩れたのであつた。

進・チルノパート

進はチルノに引つ張られながら村を見て回っていた。

しばらくして、二人は村の団子屋の長椅子に座つて、一休みしていた。

チ「あー、こうやって動き回るのって、やっぱりいいね!」

両手を大きく広げた。

進「……病み上がりなのに随分元気だね。」

その様子を見て尋ねた。

チ「へん！！このあたいが病気ごときでまいるわけないでしょ！！」

進「でも、うどんげが来なかったら、チルノ結構やばかったと思うよ。」

チ「あんな奴来なくても、自力で治ってたわよ！！」

進「まーだ素直になれてないんだね。」

不適な微笑をチルノに向けた。

チ「け！！何よ、みんな揃ってうどんげうどんげって・・・あたいは別にあいつに頼んだわけじゃないのよ！！なのに・・・」

むきになって反論した。

進「まあまあ、一応借りって事にしてるんでしょ？いつか返せばそれでいいんじゃない？」

なだめるように答えた。

チ「それもそうね・・・この借り、絶対に返してやるんだからね！」

空を見て右拳を上げた。

その時、村中に響く爆発音がした。

進「ん？何だろ・・・今の・・・」

音のする方に立ち上がって見た。

チ「これは・・・もしや・・・」

同じように見た。

チ「ダイダラボッチが出てきたのね!!」

進「ええ！？またそのネ・・・」

チルノの方に振り向いて言いかけるが、チルノに腕を掴まれ、言葉を止めた。

チ「これは急ぐが吉ね!!行くよ!!」

進を引っ張り、音のした方に走っていった。

少年達移動中・・・

音のした方にひたすら走っていたチルノと引っ張られていた進は、森の中で立ち往生していた。

チ「おかしいな・・・ダイダラボッチだったら、隠れられるわけないのに・・・」

深く考え込んだ。

進「それ以前に、ダイダラボッチだったら遠くからでもわかるですよ？」

チ「あ、確かにそうだ。ってことはあいつ・・・何かしたわね！」

進「いや、もっと言うなら、ダイダラボッチなんていないんじゃない？」

チ「そんな訳ないでしょ！！あたいは一度この目で見たことがあるんだから！！」

自分の目に指を向けた。

進「（どうせ何かと見間違えたんだろうな・・・）」

やや呆れた顔でチルノを見た。

チ「何よ！！何か言いたいことでもあるの！？」

進「別にい。それよりさ、もう帰ろうよ。」

チ「やだね！！ダイダラボッチを見つけるまで、あたいは帰らないよ！！」

そう言つてさらに奥の方に行つた。

進「困つたなあ・・・僕、帰れるのかな？」

チルノの後を追いかけようと歩き出した。

その時、足元に何かが飛んできた。

進「わっ!!」

後ろに倒れて尻餅をついた。

進「いたた・・・一体何が・・・？」

そのまま飛んできたところを見ると、地面に弾幕の撃たれた跡があった。

進「え？これって・・・」

立ち上がりながら周りを見渡した。

？1「今ので普通こける？」

？2「いきなりじゃ、しょうがないんじゃない？」

？3「どっちにしても、この子はどっちかな？」

進は声のした方に振り向いた。

そこにいたのは、やや高い所に飛んでいる三人の妖精だった。

進「あ、君達って・・・もしかして妖精三姉妹？」

？1「そうよ、私がルナ・チャイルド。」

一番先頭にいる妖精が言った。

？2「私はサニー・ミルク。」

その後ろにいる妖精が続けるように言う。

？3「スター・サファイアよ。一応聞くけどあなたは？」

一番後ろにいた妖精が進に指を指して尋ねた。

進「僕？僕の名前は鳥間 進って言うんだ。よろしく。」

ル「あなた・・・人間よね・・・？」

進「そうだよ。」

そう言うと、三姉妹の雰囲気が一気に変わり、殺伐とした空気になった。

サ「やっぱり・・・」

進「え？どうしたの？何か雰囲気変わってない？」

阿呆なので空気が読めていない。

ス「よくも堂々とこの森に入ってきたわね・・・」

進をにらんだ。

進「あれ？この流れてもしかして・・・」

嫌な汗がにじみ出てきた。

ル「人間なんて・・・消えちゃえ!!」

そう言つて、三人が一斉に進に弾幕を放った。

進「わわわわわ!!??」

弾幕を何とか避けた。

進「ちょ、何で!?!何でいきなりこんな事を・・・?」

サ「何で?あんた達が私達にした時も・・・いきなりだったじゃない!!」

声を荒げた。

進「だから、何の事だよ!?!僕が君達に何かしたとでも言うの!?!
こんなの一方的過ぎるよ!!」

その声を黙らせるように顔の近くに弾幕が飛んできた。

ス「うるさい・・・あんた達が言い訳する権利なんてないの!!」

攻撃を放ち、進を黙らせる。

あまりの弾幕に、進はその場から逃れようと走った。
森の木に隠れて、三姉妹から一時的に逃れた。

進「一体何があつたんだろう・・・どう考えても普通じゃないよ・・・
・彼女達をあんな風に変えたのは誰・・・?どっちにしても、この
ままじゃ僕・・・」

その場に座り込み、ただうつむく。

進「チルノ・・・陸・・・正・・・誰か助けて・・・」

その時、進に誰かが語りかけてきた。

？「進・・・進。」

その声を聞いて進は顔を上げると、目の前に誰かがいた。容姿は鎧姿で、右手に槍を立てて持っていた。

進「誰・・・？」

？「ああ、挨拶がまだでしたね。」

そう言つて進の前に跪き、槍を前に横にして置いた。

？「私の名は、道助と申します。」

進「道・・・助・・・？」

突然の事に今だ平常心を保っていない様子だ。

道「私は・・・ずっとあなたのそばにいました。あなたが生まれた時からずっと。」

進「どういうこと？」

道「私はかつてのあなたの・・・先祖である人の家来でした。しか

し私は戦場にて志半ばで命を落としたのです。その時から、私の魂は常にその人の子孫と共にありました。」

進「えーっと・・・それってつまり・・・守護霊って事？」

道「そう思えてもらえるのであれば光栄です。」

進「ちよつとごめん・・・」

跪いた道助の兜に手を当てた。

鉄独特の感触と冷たさがが進の手に伝わってきた。

進「え？君って・・・幽霊じゃないの？」

触れた事に少し驚き、手を引っ込める。

道「はい。しかし今の私には・・・生きていた頃の体がなぜかあるのです。」

顔だけ上げて進を見た。

進「なんでだろ？」

その時、右ポケットに何かが入っている事に気がついた。

進は右ポケットに手を入れてそれを取り出した。

それは、進がこの世界に来るときに持っていたカードだ。

進「これって・・・あの時の・・・」

そのカードから、うつすらと何かが出ていた。

進「あれ・・・始めてみた時は、こんな感じじゃなかった気がするのに・・・」

ぼーっとそれを見てみると、上から怒声が聞こえてきた。

ル「やっと見つけたあ！！もう逃がさないよ！！」

進の方に真っ直ぐ飛んできた。

進「うわぁ！？」

突然の事に身をかめた。

ルナが進に物理的に攻撃しようとしたその時、道助が槍を構えてその攻撃を防いだ。

ル「！？」

攻撃を防がれたので、後ろに退いて距離をとった。

ル「あんた・・・誰？」

道助をにらんだ。

道「我が名は道助！！」

声高らかに名乗った。

ル「で・・・何で邪魔したの？」

道「知れた事、いかなる理由があろうとも・・・この者を傷つけさせはしません!!」

そう言っていると、ルナの後ろからサニーとスターも来た。

サ「ルナ!!ここにいたの・・・って誰あれ？」

道助を見て尋ねた。

ル「よくわからないけど、あの人間の味方みたい。」

進を指差した。

ス「だったら・・・一緒にやつつけちゃおうよ。」

ル「そうだね・・・どんな奴か知らないけど、私達三人相手じゃ・・・」

三人が弾幕を撃つ構えを見せた。

サ「勝てっこないわよ!!」

一斉に弾幕を進たち目掛けて放った。

道助は無数の弾幕を前に槍を凄まじいスピードで振り回し、ことごとく打ち落とした。

ル・サ・ス「・・・え？」

言葉を失い、呆然とした。

道「・・・どうしました？この程度だったら・・・」

槍を後ろに振って力強く構えた回し始めた。

道「私が戦で見てきた弓や鉄砲と大差はありませんね・・・」

槍の回転がどんどん早くなっていく。

道「行きますよ！！私の奥義が一つ・・・とくと味わいなさい！！」

回転させていた槍を前方に大きく振りかぶった。

道「轟旋風！！」

振りかぶった所から、三人を呑み込むほどの大きさの竜巻のような衝撃波が出てきた。

ル・サ・ス「ちょま・・・えええええええ！！？」

衝撃波を避けることも出来ず、そのまま巻き込まれ遠くに飛んでいった。

衝撃波は木々をなぎ倒し、およそ10メートルほどで消え去った。通った跡は、地面が大きくえぐれていた。

進「・・・」

ぽかーんとその様子に見とれていた。

道「ふう・・・ご無事でしたか、進。」

槍を再び縦に構え、後ろに振り返った。

進「・・・すっごーい!!」

道助に駆け寄る。

進「ねえ、今のどうやったの？もう一回やってよ!!」

道助の目前に来て見下ろし、好奇心の強い目で見た。

道「ちょっと、私の技は見せ物ではないですよ？敵もないのに使う訳・・・」

そう言っていると、突如煙のように消えてしまった。

進「あれ？どこいったの、道助？」

周りを見渡すが、どこにもいない。

道「ここですよ、進。」

進の後ろから話しかけた。

進「え？」

後ろに振り向くと、文字通り幽霊のように半透明になった道助がいた。

進「ええ！？どうしたの一体？」

道「わかりません・・・ただ、以前の姿に戻ってしまった様です。」

困った様子を見せる。

進「本当？」

道助に触ろうとするが、手は空を切った。

進「本当だ・・・どうしてだろ？」

道「これは推測ですが・・・私が形を得れるのには、限界があるのではと・・・」

進「そうなのかな・・・」

道「どちらにせよ、私はこれまでどおりあなたのそばにいますから。」

進「そうだね、これからよろしく。」

握手をしようとしたが、当然それは空を切る。

進「あはは、今は無理だったね。」

道「私も、反射的に手を出してしまいました。」

お互いの行動に笑っていると、チルノが木の影から姿を現した。

チ「進！どこ行ってたのよ！？こっちはずっとダイダラボッチ探しして・・・」

進の後ろにいる道則に、目を奪われた。

進「まだダイダラボッチ探してたの？こんな所にいるわけないって・

・・」

そう言っていると、チルノが急接近してきた。

チ「ねえ！！後ろにいる奴誰！？誰なの！？言いなさいよ！！」

進にやたらつつかった。

進「あ、チルノにも見えるんだ。」

後ろに振り返り、道助を見た。

道「今の私は、誰にでも見える様ですね。」

覚った様子で言った。

チ「ねえ！！誰よあんた！？早く答えなさいよ！！」

今度は道助につっかった。

道「私の名前は、道助と申します。」

チルノにぺこりと頭を下げた。

チ「で、何で半透明なの！？」

道「私、これでも幽霊なので。」

顔を上げて答えた。

チ「本当なの・・・」

道助に触ろうとしたが、その手はやはり空を切った。

チ「・・・」

空を切った手をじっと見つめる。

進「道助は、僕の守護霊なんだ。」

チルノに歩み寄って言った。

チ「・・・・・・とりあえず帰るよ!!」

色々考えた様子を見せたが、面倒になったのかそこから離れるように歩き出した。

進「そうだね。そろそろ陸と正も帰ってるかもしれないし。」

チルノの後について行った。

道助も進の背後にひっそりについて行った。

進「（あ、そういえば・・・さっきの三姉妹。なんでいきなり僕を襲ったのかな？訳ありぽかったけど・・・）」

歩きながら考える進であった。

その頃、山の頂からおおよそ進達のいる所を見ている者がいた。
紅魔館にいたのと、恐らくは同じ者だ。

? 1 「・・・見た感じ・・・当たりかな？」

? 2 「でも、あれじゃまだまだだね。」

? 3 「目覚めてから間もないのであれば無理もない。」

? 1 「もう少し様子見るかな・・・ってそうだ。歓迎会の準備は？」

? 2 「いつでもOK・・・ってのは嘘。後ちよつとだね。」

? 3 「この様子なら、急ぐ必要もない。」

? 1 「ふふ・・・今はこの世界の思い出を作らせた方がいい・・・
時期にそれも叶わなくなるんだから。」

そう言うのと、その者はまた消えるようにその場を去っていったのであった。

第十六章 それぞれの時間（後書き）

後書き

長かったあ・・・正直しんどかったです。もうこんな感じで話を書く事は多分ありませんね。

今回はちょっとお得感がありませんかね？そうでもないですか？

ちょっとマイナーな妖精三姉妹を出してみました。知らない人はWIKIで。

そしてまたもや新キャラを出しました。その名は道助。一応女性キアラです。

これからの進は、ちょっと面白い事になっていきますよ。

とりあえず今は人里編ではなく修行編的な？感じです。まあこの際どっちでもいいですね。

後、違う方も更新してますので、暇があればどうぞ。

では、第17章をお楽しみに。

第十七章 進の決意（前書き）

あらすじ

- 1、正が決意し、涙した。
- 2、陸が交渉し、うどんげが仲間に加わった。
- 3、進のピンチに、道助が現れて事なきをえた。

ではどぞ

第十七章 進の決意

第十七章 進の決意

しばらくして、陸とうどんげは永遠亭にて準備を済まし、人里に帰ってきていた。

同じ頃に正と美鈴も、修行を一通り終わらして人里に帰ってきていた。

そのため、陸達と正達は宿の前で鉢合わせをした。

陸「おお、正。それに美鈴も。」

二人に手を振った。

正「陸！！交渉はどうなったんや？ってうどんげがここにおるってことは・・・」

陸を見てから、うどんげに視線と移した。
その様子から、正は交渉の結果を察した。

う「今度こそ、これからよろしく。」

正に手を差し伸べた。

正「おう、よろしくのう。」

同じく手を差し伸べて、うどんげに握手をした。
握手をした後で、陸が正の服装が気になったようだ。

陸「それにしても・・・その服、何があっただんだ？」

正の服は上半身が丸々無かったので、疑問に思ったのだろう。
その事に関して、美鈴が一応説明をした。

美「実は修行中、気のコントロールを誤ってこうなっただんです。私が止めようとしたのですが、一歩間に合わずこのような姿に・・・」

どこか申し訳なさそうな調子で答えた。
そんな様子に、正自身は、

正「何言ってるんや！！これはわしの名誉の証や！！」

と胸を張って答えた。

陸「名誉って・・・どう見ても違うだろ？」

呆れ様子で言った。

う「自身の失態の表れね。」

陸と同じ調子で言った。

正「やかましいわ！！人の苦勞も知らんでからに・・・」

二人の発言に、軽くふてくされた。

そんな事などお構いなしに、美鈴がこんな事を尋ねてきた。

美「そう言えば・・・進とチルノはどこでしょう？」

陸「村にはいなかったな。」

正「どつかでぶらぶらしてるだけやないんか？」

う「あ・・・あれって、もしかして・・・」

正の後ろの方に、やや離れてはいるが、こっちに向かって歩いてくる二人がいた。

陸「おお、多分あれだな。おい、進。」

と呼びかけると、それが聞こえたのか急いでこっちに来た。

こっちに向かってくる二人を見ている内に、正が進の後ろにいる何かを感じ取った。そう、道助の事である。

正「あれ？何か進の肩に妙なもんが見えるような・・・」

美「え？何が・・・」

と正に尋ねようとしたが、それが見えたのか口を閉じた。

進「いやあ、みんな帰ってたんだね。」

少し息を切らしながら言った。

う「あの・・・進・・・」

進の背後にいる道助を、震えながら指差した。

陸「だ・・・誰だお前はああああ!？」

道助を見てから、村中に響き渡る程の大きな声を出した。

少年説明中・・・

正「へえ、進に守護霊なんておったんか。初めて知ったで。」

道助を見上げた。

進「僕も、さっき知ったばかりだよ。」

陸「俺としたことが・・・つい取り乱してしまったな。」

そう語る顔は、少し赤くなっていた。

美「私達の、新しい仲間ですね。」

チ「あたいの新しい家来ね!!」

道「私は、進にしか仕えませんよ。」

きっぱりと言い切った。

チ「何!?!あたいの何が不満だって言うよ!?!」

怒るチルノに、正が、

正「多すぎて言われへんやろ。」

と冷静に突っ込んだ。

チ「きいーーーーー!!!!!!」

やたらと悔しがった。

陸「まあ、とりあえず歓迎するよ。道助。」

道助に握手を求めようと手を伸ばした。

道助も手を伸ばしたが、陸はその手を握ることがやはりできなかった。

陸「おっと、確か今は無理だったんだっけな。」

そのまま手を引っ込めた。

道「私も、つい反射的に手が出てしまいました。」

申し訳なさそうに言った後で、一同が軽く笑った。

正「にしても・・・」

道助に意味深な笑顔で迫ってきた。

道「何でしょうか？」

正「いや、お前さんやのうて、進のことや。」

視線を進に移した。

進「え？何の事？」

不意の事に、少し戸惑った。

正「まさか、あの進まで戦う奴になるとはのう。」

進「へ？」

道「どう言う事です？私がいる以上、進が戦う必要などありませんよ。」

陸「それはどうかな・・・」

道「何か問題でもあると？」

陸「確かに道助はそのままでも戦えてる。だがそれも限界ありって奴だ。なら、進が何かしらの形でサポートなり何なりできるようになった方が、今後とも都合がいいと思うが。」

進「それもそうだね。」

正「ただのう・・・肝心のそういう事に詳しい奴って、幻想郷におるんか？」

陸「いるじゃないか・・・四六時中幽霊連れてる奴が。」

正「いや、あれは進とは勝手がちゃうやろ？」

陸「だよな。言つてて思った。」

進「・・・他に誰かいるのかな・・・」

ぼーっと全員がそれとなく考えていると、うどんげの肩に誰かが手を乗せてきた。

う「？」

すつと振り向くと、そこにはあのKがいた。

K「お、またかわいこちゃんがいるかなと思つたら・・・君は永琳のこの・・・」

う「うどんげです。Kさんですよ？その節では御世話になりました。」

Kに軽く会釈をした。

K「なーに、あの事についてはもういいよ。」

少し申し訳なさそうな態度を取った。

そんなやり取りをしていると、陸がKの事に気づいたようだ。

陸「ああ、あなたは先日あったKさんですね。今日はどうしたので
すか？」

その問いに対し、Kは適当に返した。

K「別に用なんてねえよ。俺はただかわいこちゃんを探して歩き回ってただけだ。」

美「この人・・・筋金入りですね・・・」

う「昔はこんな人じゃなかったんだけどね・・・」

と言っている内に、Kが進の後ろにいる道助に目を向けた。

K「あり？坊主・・・お前さんの肩の奴、えらくくつきり見える様になったが・・・」

進「うん、さつき、出てきて僕を助けてくれたんだ。」

その一言に、Kは色々と納得したようである。

K「ふゝん・・・なるほど、さすがは幻想郷って奴か。」

その様子に、正が、

正「ちょい待てや、その口ぶりやったら、あんた、前から見えてたみたいな言い方じゃないか。」

Kに問い詰めた。

それに対してKは、

K「ああ、それでも、元々の本業がこれなんだ。」

と言つて、どこからともなく取り出した御札的な物を見せつけてきた。

正「・・・妖怪退治屋？」

K「正確に言つと、陰陽師つて奴だ。」

美「陰陽師？あの陰陽師ですか？まさかあなたが陰陽師だったとは・・・」

思わず驚いた。

K「安心しろ、よほどの事がない限り妖怪には手を出さないし、それに俺はもう一線を退いてるんだ。」

陸「それでもあなたは、この手の類について扱い方を知っていると？」

K「専門だから、もちろん知つてらあ。」

当然のように言ってきた。

進「じゃあ・・・それを僕に教えてよ！！」

Kに駆け寄つて言った。

K「は？何でだ？別に害はないんだろ？」

露骨に嫌がった。

進「そうじゃないよ！！ただ・・・僕だって、みんなの為に役に立ちたいって思ってたんだ！！道助の力だけじゃなくて、僕自身も力を身に付けたいんだ！！」

と真つ直ぐにKの目を見て言った。

K「（やれやれ、この子もまたって奴か・・・仕方ない。）」

しぶしぶといった感じで、進に言った。

K「・・・わかったわかった。本来は野郎の面倒なんて見ないんだが、今回は特別だ。」

進「じゃあ、僕に教えてくれるんだね。ありがとう！！おじさん。」

Kに頭をぱつと下げた。

K「それじゃ、後で俺の店に来てくれ。じゃあよ。」

そのまま踵を返し、その場を歩き去っていった。
去っていった後で、正がこんな事を言った。

正「・・・意外やのう・・・まさかあんなおっさんが陰陽師なんてのう・・・」

陸「ここは幻想郷だしな、ありえておかしくはない。それよりも、進にとっては願ったり叶ったりだな。」

進の方を見て言った。

進「うん!!」

陸「よし、これから今後の予定を話し合うとするか。」

そう言つて、一同は宿の方にそろそろと入っていった。

一同は今朝と同じ感じで、ちゃぶ台を囲って話し合いをしていた。

陸「さて、進はこの後Kさんの所に行くとして、その間俺達はどうするかだな・・・」

う「とりあえず、みんなどこかに行つてみるとか?」

美「それもいいですけど、一体どこへ?」

正「わし・・・白玉楼に行つてみたいんや。」

陸「どうしてだ?」

正「陸、わしら今、幻想郷におるんやで?一度この目であの西行妖を見てみたいって思わへんか?」

陸「なるほどな、確かに俺も一度は見てみたいと思つていたな。」

美「では、とりあえず目的地は決まりましたね。」

う「それじゃ、これから白玉楼に向かうとしましょう。」

と言っていると、さっきまで何も言っていなかった進が、チルノにいきなり話しかけてきた。

進「あ、チルノ。ちょっと聞きたい事があるんだけど・・・」

チ「何よ？」

進「この後、僕はKおじさんに色々教えてもらうつて言ったよね？でも、Kおじさんと二人つきりつてのはちょっと嫌だなうって思ってた。だから、チルノだけでもいてほしいかなって・・・」

陸「ほほう、まあわからん事もないな。正直Kさんと二人つきりは気がめいるかもしれん。」

正「それやったら、別にええんとちゃうか？チルノもそれでええやる。」

チ「ちょっと！！少しはあたいにも喋らせてよ！！」

う「で、どうするの？」

チ「あたいは・・・えーっと・・・まあ別にいいけど・・・」

進「じゃあ、一緒にいてくれるんだね！！ありがとう、チルノ！！」

屈託のない笑顔をチルノに向けた。

チ「・・・しゃあなしよ。」

進の笑顔に、少し気圧された。

陸「よし、じゃあ、俺達はこれから白玉楼に行くとするか。」

う「ええ。」

正「楽しみやのう。」

美「まあ、素直に見れたらいいんですけどね・・・」

全員がその場を立ち上がり、部屋を後にした。
表に出てから、陸達は4人と2人に別れた。

陸「進、チルノ、また後でな。」

正「ちゃんとやるんやで。」

美「修行は自分のやる気が一番大事ですよ。」

う「じゃ、行ってくるわね。」

進とチルノに手を振りながら、四人は歩き去っていった。

進「わかってるよ。」

チ「あたいがいないから、万が一があっても知らないよ!!」

四人を見送る二人。

進「じゃ、僕はKさんの所に行こうか。」

チ「うん。」

二人はKのいるあの店に歩いていった。

しばらくして、二人はKのいる店につくと、店の表にKが立って待っていた。

進「Kおじさん。」

Kを見つけ、駆け寄る。

K「お、やっと来たか坊主。」

声を聞いて進の方に振り向いた。

進「これから、よろしくお願いします。」

ぺこりと頭を下げた。

K「そうかしこまらなくてもいいだろ。教えるつつつてもあくまでお前さん次第だしな。」

そう言われ、進は頭を上げた。

進「じゃあ、これからすぐにも・・・」

K「おっと、ここで教えるのもなんだ、もう少し広い所に行こうか。」

進「はい。」

そして三人は、その場から歩きだしていったのであった。

第十七章 進の決意（後書き）

後書き

前の話が長かったから、今回はこれで勘弁してくださいね。

いやあ、他の奴を一齐に更新しようと言う事で、これでも忙しかつたんですよ。文化祭近いし。

それはともかくとして、修行編もいよいよ終盤に入る所ですね。

これから進はどれほどの成長を見せるか、是非ともご期待くださいな。

何気にKってたただの助兵衛じゃなくて、陰陽師だったのね。って思ってる人も多いと思います。そうです。陰陽師なんですよ。

Kの詳しい事はまだ描かれていませんが、この話が終わってから紹介しようかなって考えてます。

あ、これを読んでくれている皆様に連絡です。

この話は不定期ですけど、これからは一応土曜日に定期的に更新しようと思っています。

ので、それを承諾してくれる感じでよろしく願いしますね。

それでは、第18章をお楽しみに。

第18章 進の憑依術（前書き）

あらすじ

- 1、進がみんなに道助を紹介した
- 2、Kが陰陽師であつた事を知り、進が頼み込んだ
- 3、OKをもらい、進とチルノ以外は白玉楼に向かった

ではどぞ

第18章 進の憑依術

第18章 進の憑依術

中年達移動中・・・

しばらく歩いていると、三人は木に囲まれた広い場所に出た。
その場にて、Kがすぐさま話を始めた。

K「よし、これからお前さんに式神とかの使い方ってのを教えよう。
まず、式神の使い方ってのは主に二つに分けられる。一つ目がそれ
自身が形となって敵に向かうタイプだ。このタイプの方が一般的だ。
で、二つ目はそれ自身が術者に憑依させるタイプだ。こっちはあま
りメジャーじゃないが、式神によってはこちらの方が都合がいい事
もある。俺が見た所道助は二つ目の方が都合がいい。維持できる時
間をお前さん自身が与えられるからだ。式神は術者さえいれればずっ
々というと思われているがそれは違う。式神はあくまで動かせる時間
が決まっているんだ。だからこそ、道助のようなタイプは二つ目の
タイプの方が適している。確かに道助の戦闘力は高いかもしれんが、
幻想郷には強い奴なんてごまんという。長期戦になったりしたら、
明らかに不利だ。今のお前さんじゃまだ複数の式神を行使するなん
て事出来る訳ない・・・」

長々と話をしていると、座って話を聞いていた進とチルノがぐっす
りと寝ていた。

Kは拳を固めてはぐっすと息を吐きかけた後で、下を向いている進の
頭を上から思いつき殴った。

ゴンと言つ音ともにも、進は文字通り叩き起こされた。

進「いったあ！！」

殴られた所を手で抑えた後に、顔を上げて、Kの方を見た。

K「おはよう、進君・・・」

かなり怒つた雰囲気的笑顔を進に向けた。

進「は、はい！？え、えーっと・・・何だっけ？」

中年制裁中・・・

K「つまり、進は道助を憑依させ、戦術を身に着けるべきなんだ。わかったか？」

さつきとは違い、もう怒ってはいなかった。

進「はい・・・」

正座をしている進の頭には、たんこぶが3つほどできていた。隣にいるチルノは相変わらず寝ている。

K「それじゃ、さっそくやってみるか。」

進「ええ？いきなり？」

K「何だ？問題でもあるのか？」

進「その・・・今道助が出てこれるか、僕にはわからないんだけど・・・」

K「ああ、そんな事なら大丈夫だ。お前さんがさっき道助を行使したと言っても大分時間が経ってる。もう使えてもおかしくない頃だ。」

進「へえ、そういう物なんだね。じゃあやってみるよ・・・ってちよつと待つてよ、まったくやり方がわからないんだけど？」

K「はあ？坊主、お前がさっきどうやって出したのか、覚えてないのか？」

進「うん・・・なんか勝手に出てたって言うか・・・」

K「（・・・無意識で出してたって奴か？だとしたらこいつぁ・・・）」

と感心していると、進が困った様子で尋ねてきた。

進「ねえ、コツとかないの？」

K「コツ？ああ、コツか・・・イメージだ。」

進「イメージ？」

K「そうだ、今自分の前に今道助がいるな．．．って感じた。」

進「曖昧すぎる気がするんだけど．．．」

K「な．．に、式神を使うってのはそういうもんだ。まあ気合と根性とやる気があれば大丈夫だ。」

進「．．．はい．．．」

適當すぎる説明に、進はしぶしぶと始めた。

進「（えーっと．．．こうかな．．．？）」

頭の中で道助をイメージし続けた。

その時、道助が進の前にすーっと現れた。

進「わあ、本当に出てきた。」

道「．．．また形を得られたようですね、私は。」

自身の体を見てから、進に語りかけた。

K「よし、うまくいったな。それじゃ、憑依術をやってみろ、進。」

進「あの．．．コツとかは．．．」

K「イメージだ。」

進「だよー．．．まあやってみようか、道助。」

道「はい。」

二人でそれとなく始めた。

K「さーで、後はここからどれぐらいかかるか・・・」

少し距離を取って、後ろの木に寄りかかり、進たちの様子を見届けた。

？「もう少し、ちゃんと教えてやってもいいだろ？」

後ろから突如、誰かがKに話しかけてきた。

K「悪いが、俺は放任主義なんだよ・・・って誰だ？」

後ろに振り向くと、そこにあの妹紅が腕を組んで立っていた。

K「ああ、誰かと思ったら、相変わらず発育の悪い子か。」

妹「・・・誰が発育が悪いって？」

Kの発言に、妹紅はガンを飛ばした。
ちよつとびびったKは、

K「おいおい、冗談だつて。」

一応謝る態度を見せた。

妹「たく・・・」

呆れながらも歩み寄ってKの隣に立ち、同じように進たたちの様子を見届けた。

K「てか、何でこんなところにお前さんがいんだ？」

妹「近くを歩いてたら、たまたま見かけたただけだ。」

K「へえ、そうか。いつからいたんだ？」

妹「お前が、あの子にやってみろって言った時だ。」

K「ああ、じゃあついさっきか。」

妹「・・・なあ、もしかしてだけど、お前はあいつに・・・お前と同じ道を歩ます気なのか？」

K「そんな気はねえよ。俺はあいつに頼まれただけって奴だ。」

妹「そうか。」

K「・・・俺みたいな奴は、俺一人で十分だ・・・」

哀愁の目で、どことなく遠くを見つめた。

妹「K・・・」

憐れみをKに向けた。

その時、進と道助の二人から光が広がっていった。

K「お、これはもしや・・・」

と言っている間に、辺りが光に包まれていった。
その光が晴れると、そこには右肩に道助の肩当てと槍を右手に携えた進が立っていた。

進「・・・これでいいのかな？」

手に持った槍を見た後に、自分の体を見た。
体からは、気とも何ともいえないオーラの物があふれ出ていた。

K「とうとうやったか。」

進に歩み寄った。

進「ねえ、これでいいの？Kおじさん。」

少し不安げにKを見た。

K「ああ、多分それでいい。それが一番坊主と道助にとって理想的な形だろう。」

進「そうなんだ。あ、そう言えば、この状態だったら、道助はどうなってるの？」

K「ああ、そのことが・・・試しに名前を呼んでみな。」

進「うん。道助、どうなってるの？」

その辺りに声をかけた。

道「（私なら・・・貴方の右腕にいますよ。）」

進の頭の中に道助の声が響いた。

進「え？右腕って・・・」

自分の右腕を見るが、これといってわからない。

K「多分、お前さんの右腕に道助が宿ったんだろ。」

覚ったように言った。

進「ふゝん・・・何かイメージと違うや。」

K「で、今何か出来そうか？」

進「ちよつと待って・・・」

とりあえず、持っている槍を上から下にぶんと軽く振り下ろした。

進「あれ？何でだろ？あんまり重くないや。」

二、三回ほど同じように振り回した。

K「それはお前さんに道助が憑依しているから、お前さんの肉体的負担があまりかかってないからだ。」

進「なるほどね。」

肩の辺りのまじまじと見つめた。

K「それじゃ、しばらくはその状態にいるんだ。ある程度そうして
いれば、体が自然と慣れてくる。」

進「わかった。でもその間どうしようかな。」

道「（では、今から私が、進に槍の使い方を教えましょう。」

進「うん、じゃあ頼むよ、道助。」

と言った後で、そのまま進は道助の教えの元、槍の練習を始めた。
その様子を、Kと妹紅は変わらず見届けていた。

K「・・・しかし、こんなに早く出来るたあ大したもんだ。」

妹「素質は十二分にある・・・か。」

K「まあ、その方が教えるのも楽でいい。」

妹「教えるって・・・お前さっきからただ見て言ってるだけ・・・」

とその時、妹紅の言葉を遮るように、その場に雄たけびのような声
が響いた。

チ「あーもう！！退屈すぎ！！じっとしてるなんてあたいの性に
合わないよ！！」

起き上がり、その場でわめきだした。

進「ちょっとチルノ、おとなしくしててよ。」

チルノに近づき、説得しようとしたが、聞く耳など持ちそうにない。
チ「うるさい！！元はと言えばあんたがさびしいとか言うからついできたのに、こんなに退屈なんじゃ嫌になるよ！！」

妹「何だお前、そんなに退屈なのか？」

二人に歩み寄ってきた。

チ「当然でしょ！！寝てて楽しい訳ないじゃない！！」

妹「そうか。あたしも丁度暇してた所だ。今から一戦、あたしとやらないか？」

背後からうつすらと炎を出し、チルノに軽く挑発する。
その様子にチルノは、

チ「へん！！あんたなんかにあたいの相手が務まると思ってんの！？」

自慢げに妹紅を指差した。

妹「やれやれ・・・この妖精は、口の利き方を知らないようだな。」

うつすら出していた炎を強めた。

今にも戦いを始めそうな二人にKが

K「おいおい、弾幕ごっこするならここから離れてやってくれ。俺達が巻き込まれちゃいい迷惑だ。」

と呼びかけた。

妹「わかってる。じゃあ、空中戦でいいな？」

チ「上等！どこでやろうと、サイキョーなあたいの勝利にゆるぎなし！！」

そう言つて、二人とも木々よりも高い所に飛んでいった。

妹「先に言つとくけど、あたしはあんまり加減できないよ。」

チ「加減？それはこっちの台詞よ！！」

両者、相手に向かってそれぞれ構えた。

妹「（さて、どう出るか・・・）」

チルノをじつと見据えていると、チルノが手を上にして攻撃を構えていた。

チ「先手必勝！！」

手を前に出し、氷の弾幕を妹紅に放った。

妹紅はそれを、手で形成した炎の壁で防いだ。

妹「やれやれ、いきなり攻撃か。こんな何の考えのない攻撃じゃあたしには・・・」

壁を解いた時、さっきまでそこにいたチルノがなぜかいなくなつて

いた。

妹「ん？一体どこに……」

周りを見回っていると、上空から何かが急降下する音がしてきた。

妹「まさか……！」

ぱつと上を見ると、チルノがきりもみ回転しながら妹紅にとびかかり、いや、けりかかってきた。

チ「チルノ・アイスキックッ……！」

寸前で確認できた妹紅は、そのとび蹴りを避けてかわした。

チ「なにに……！」

勢いがありすぎたのか、下の森にそのまま突っ込んでいった。

妹「……何なんだこいつは……だがさっきの攻撃は少し焦った……判断が遅れていたら当たっていたかもしれない……」

チルノが落ちた所をじつと見る。

チ「まだまだあ……！」

落ちた所から、チルノは妹紅より一回り大きい氷の塊を飛ばしてきた。

妹「おっと、」

その塊をひらりとかわした。

チ「へん！！さっきから避けてばかりね、あんた！！」

妹紅のいる高さまで、再び飛んできた。

妹「それもそうだ・・・そろそろあたしも攻撃するでしょう。」

右手に炎を集め、そして、

妹「そら！」

その手を袈裟に下ろし、その軌道を描く炎の壁をチルノに放った。
大きさ的にはチルノでは避けれそうにない大きさだ。

チ「この程度なら・・・」

全身を氷に包み、その壁に向かっていった。

チ「あたいにはぬるいぐらいよ！！」

勢いよくその壁を突き破った。

チ「覚悟しなさい！！」

その勢いで、妹紅に突撃していった。

妹「読んでたよ。」

左手に炎を纏わせ、その手で向かってきたチルノを氷ごと殴り飛ばした。

チ「いったあ！！」

氷が砕け、殴られた勢いで地面に落ちそうになったが、今度はどうにか空中で体勢を整えた。

チ「よ・く・も、やってくれたわねえ！！」

妹「最初からそうだけど、攻撃が馬鹿正直すぎるんだよ。」

チ「きいいいい！！！！誰が馬鹿よ！！その鼻っ柱、すぐにでもへし折ってやる！！」

そう言つて、両手を上に上げて氷を作り始めた。

チ「避けれるもんなら・・・避けてみなさい！！」

しばらくして、恐らくは一戸建てくらいの大きさの氷がチルノの頭の上で出来た。

チ「くら・・・」

それを投げようとした瞬間、手が滑って自分の頭部に落下し、鈍い音を鳴らした。

チルノは声すら出す事なく地面にまっさかさまに落下し、自身の氷の下敷きになってしまった。

妹「・・・・・・・・」

その様子に呆れて、もう声すら出なかった。

その頃、進は槍の使い方の練習を終え、道助との憑依を解いて木にもたれかかり、座って休んでいた。

進「ふう・・・」

K「どうだ？初めてする憑依は？」

進の隣に立ちながら尋ねた。

進「どうって・・・思ったより普通だったと言うのかな・・・」

K「坊主はどんな奴を想像してたんだ？」

進「えーっと・・・漫画とかでよく見る感じかな？」

K「ほお、なるほど。」

進「あ、そうだ。Kおじさんの式神って、どんな奴なの？」

K「俺のか？俺のは・・・簡単に言ったら、犬と猿と雉だ。」

進「へえ・・・何だか桃太郎みたいだね。」

K「そりや俺自身で自覚してる。」

進「ははは、そうだよな。」

K「・・・」

急に神妙な顔つきになって、進を見つめた。

進「え？どうしたの？」

K「いや・・・お前さんを見ると、何となく懐かしい感じがしたんだ。」

進「懐かしい感じ？」

K「お前さんには話してなかったか。今から十年ぐらい昔の話だ。俺は・・・それより昔の記憶がないんだ。」

進「え？本当なの？」

K「ああ、その時に覚えていた事って言ったら、メシが作れた事ぐらいだ。」

進「そうなんだ。で、僕を見てて懐かしい感じがしたの？」

K「ああ、だがそれが何かは、わかる訳ないが・・・」

進「今まで思い出しそうなことって、あったの？」

K「・・・何度かあったが、どれも断片的すぎた。とてもじゃない

が思い出すには不十分だ。まあ、思い出さなくても、俺自身は今の生活に満足してる。思い出せないのなら、俺自身が思い出したくないだけだろ。」

進「・・・」

K「おっと、しめっぽくなっちまったな。すまん。」

進「・・・別に。」

K「そうだ、お前さんに渡しとく物があつたんだ。」

自分の袖から、ごそごそと何かを取り出した。
取り出したものを、進に渡した。

進「これって・・・」

それをまじまじと見てから、Kを見た。

K「式神の宿つた御札だ。これからのお前さんの力になってくれるはずだ。」

進「これを・・・僕に？」

K「ああ、いくら道助が強くても、一人だけじゃ後々苦勞するだろ。使い方は自分で考えてくれ。」

進「Kおじさん・・・ありがとう。」

K「まあ、俺のお下がりだから、ちゃんと使えるか微妙だが・・・」

進「ええ〜？大丈夫なの？」

K「なーに、式神に老いとかはない・・・」

と言っていると、妹紅がチルノを担いできたのに気がついた。

K「お、弾幕ごっこは終わったか？」

妹「ああ。一応あたしの勝ちかな・・・」

そう言いながら、チルノを地面に降ろした。

進「一応って？」

妹「ああ、こいつが自分の氷で下敷きになったんだよ。だからだ。」

進「・・・ははは、チルノらしいや。」

今だ目を回して気絶しているチルノに目を配った。

K「お、案外冷静じゃないか。」

進「だって、こんな事って幻想郷じゃ日常茶飯事なんですよ？じゃあいちいち心配してたらきりがないよ。」

妹「自滅する奴は珍しいけどな。」

進「あ、それはそうだね。」

一同、少しばかり笑った。

進「じゃあ、僕とチルノはそろそろ陸たちに合流しなきゃ。」

K「ああ、そうだったか。そう言えばあいつらはどこに行っているんだ？」

進「陸たち？白玉楼らしいよ。」

K「白玉楼・・・ああ、あの冥界にある所か・・・」

妹「そんな所に行つて、大丈夫なのか？」

進「大丈夫だよ。陸たちは僕と違って、ちゃんと戦えるんだから。」

その頃、雪が積もった白玉楼の庭にて、倒れている者が三人と立っている者が二人いたのであった。

第18章 進の憑依術（後書き）

後書き

修行編、これにて終了です。

これから大方の人の予想通り、白玉楼編へと突入します。

雪の積もった白玉楼に、一体何が起きたのか！？それは当然後々つて事で。

進もいよいよ戦えるキャラになれたので、その内誰かと戦わす予定ですよ。

あ、今のわしは文化祭でこれでも割と忙しい身分なんですけど、それでもわしはこっちも頑張りますよ。

では、第19章をお楽しみに。

おしらせ

お知らせ

これからの澄田の小説は、バクテリアではなく、澄田のアカウントで投稿させていただきます。

なので、こちらの方は事実上の凍結とさせていただきます。

あ、心配しなくても大丈夫ですよ？あくまでアカウントが変わる以上、そっちに移転しなければいけないので、これからも澄田の小説はしっかりと投稿していきます。

なので、質問や評価やレビューやお気に入り登録などは、そちらの方でお願いします。

お手数をおかけして、真に申し訳ございませんでした。 m (——) m
これからのニュー澄田に、是非ともご期待ください (#^|^#)
ps、少し時間がかかりますので、それまでお待ちくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8807m/>

三人一緒に幻想入り ~ the three heros and new trouble .

2010年10月29日13時10分発行